

OKI ISLANDS GEOPARK GUIDE BOOK

隠岐ジオパークガイドブック

大地の成り立ち
独自の生態系
人の営み

隠岐ジオパークガイドブック OKI ISLANDS GEOPARK GUIDE BOOK



隠岐ジオパーク

〒685-8601
島根県隠岐郡隠岐の島町港町塩口 24 番地
隠岐ジオパーク推進協議会事務局
TEL 08512-2-9636 / FAX 08512-2-9626
E-mail info@oki-geopark.jp
URL <http://www.oki-geopark.jp>

はじめに

みなさん『ジオパーク』という言葉を知っていますか？

ジオパークとは、科学的にみて重要な、あるいは美しい地質遺産を有する自然公園の一種ですが、地質遺産だけではなく、大地の上に成り立つ生態系や歴史・文化など私たち人の営みを含めた総合的な公園のことをいいます。日本では『大地の公園』とも訳され、私たちが住んでいる地域や地球をまるごと楽しむことができる場所です。

隠岐諸島は、ユーラシア大陸の縁辺であった時代から、湖の底の時代、深い海の底の時代を経て、今から約600万年前に大規模な火山活動によって誕生しました。約2万年前の最終氷期には海面の低下に伴い島根半島と陸続きとなり、その後、海面の上昇によって約1万年前に現在のような離島となりました。

隠岐諸島では、北方系の植物、南方系の植物、大陸系の植物、高山性の植物、そして氷河期時代の生き残りの植物が海岸の低地に分布するという非常に不思議な自然環境を体験することができます。この要因としては、対馬暖流の影響や氷河期時代（約2万年前）に海面の低下によって島根半島と陸続きとなったこと、アルカリ火山岩という大陸的な地質が関係すると考えられています。

また、隠岐は石器時代における黒曜石の産出に始まり、北前船の風待ち港として文化的、経済的に大きく繁栄してきました。聖武天皇の時代（神亀元年：724年）に遠流（おんる）の地として定められてからは、小野篁、後鳥羽上皇、後醍醐天皇が配流（はいる）され、隠岐の文化形成に大きな影響を与えたと言われています。遠流の地として定められたのは、離島という地理的環境と黒曜石という岩石によってもたらされた高い文化があったからだとも考えられています。

このように、隠岐ジオパークでは何億年も前からの『大地の成り立ち』、大地の上に成り立つ『独自の生態系』、更には、『古代から現代へと続く人の営み』をまとめて体験することができます。

このガイドブックを片手に、ぜひ、隠岐ジオパークを楽しんでください。

平成24年3月

隠岐ジオパーク推進協議会

会長 松田和久

目 次

第1章 隠岐諸島の概要について

1-1	隠岐諸島の位置と町村の概要	1
1-2	隠岐の呼び方	2
1-3	隠岐の所属	2
1-4	隠岐ジオパークの範囲	3
1-5	隠岐ジオパークのみどころ	6

第2章 隠岐ジオパークの自然環境について（陸上）

2-1	地質概要	7
2-2	隠岐諸島の地形	8
2-3	隠岐諸島の地質	9
2-4	隠岐諸島の成り立ち（地史）：大地の成り立ち	12
2-5	浸食によって作り出された景観	15
2-6	岩石の分類	20
2-7	隠岐の不思議な植物分布（独自の生態系）	24
2-8	植物の逃避地であった隠岐	28
2-9	隠岐の固有植物	31
2-10	隠岐を代表する海岸周辺の植物	32
2-11	大満寺・鷲ヶ峰の自然環境	37
2-12	隠岐ジオパーク花カレンダー	40
2-13	隠岐の固有動物	44
2-14	隠岐の蝶	46
2-15	隠岐のトンボ	48
2-16	油井の池自然観察コース	49
2-17	隠岐の野鳥	51
2-18	危険な陸上生物	53

第3章 隠岐ジオパークの自然環境について（海洋）

3-1	隠岐の海洋生物	56
3-2	日本海の成り立ち	58
3-3	隠岐の海洋生物の解説	61

3-4	危険な海洋生物	69
3-5	海藻の植生と採集	75
3-6	海藻アートの作り方	81
3-7	隠岐ジオパーク海洋動物カレンダー	83

第4章 隠岐ジオパークの歴史について

4-1	隠岐の歴史～概要～	89
4-2	隠岐を取り巻く歴史～神話の時代から～	89
4-3	隠岐の神社	113
4-4	島前の祭り	137
4-5	島後の三大祭り	143
4-6	島後の祭り	149
4-7	隠岐古典相撲	155

第5章 主なジオサイト

5-1	主なジオサイトマップ	157
5-2	大陸の時代	158
5-3	日本海形成の時代	158
5-4	火山の島の時代	160
5-5	半島から孤島へ	164

第6章 付 録

6-1	大山隠岐国立公園区域	169
6-2	隠岐における国立公園区域	170
6-3	隠岐ジオパークの指定文化財	173
6-4	日本における黒曜石の産出地	178
6-5	縄文海進と隠岐	180

第7章 おわりに

7-1	あとがき	182
7-2	協力していただいたみなさん	182
7-3	参考文献	183

【参考】コラム掲載ページ

コラム1：ジオパークとは？	4
コラム2：島前カルデラのでき方	14
コラム3：パンゲア大陸と隠岐	18
黒曜石面白話	23
コラム4：日本海固有水とは	59
コラム5：日本海は太平洋と比べて干満差が少ない	60
コラム6：海藻とは	60
コラム7：ウミホタルとヤコウチュウ	68
コラム8：海中にも林があります	78
コラム9：海藻と海草	79
コラム10：磯焼け	80
コラム11：アメフラシとウミウシ	86
コラム12：古事記と日本書紀	92
コラム13：応神天皇	92
コラム14：四隅突出型墳丘墓と隠岐黒曜石	93
コラム15：最高級品であった隠岐の干鮑	96
コラム16：遠流の島『隠岐』と小野篁	97
コラム17：小野篁と島の娘との悲恋物語	98
コラム18：隠岐に流された二人の天皇	99
コラム19：北前船と隠岐～風待ちの港 西郷港～	101
コラム20：北前船と隠岐民謡	103
コラム21：流人と隠岐の人情	104
一口歴史ガイド：隠岐の四つの宝物	110
コラム22：延喜式神名帳	113
コラム23：延喜式	114
コラム24：続日本後紀	117
コラム25：伝統的農牧文化	168

第1章 隠岐諸島の概要について

1-1 隠岐諸島の位置と町村の概要



島後	隠岐の島町の概要
面積	242.95km ² (琵琶湖の約36%)
人口	15,343人 (2012.4.1現在)

島前	西ノ島町の概要
面積	56.05km ²
人口	3,148人 (2012.3月末現在)

島前	海士町の概要
面積	33.25km ²
人口	2,287人 (2012.3月末現在)

島前	知夫村の概要
面積	13.70km ²
人口	602人 (2012.4.1現在)

1-2 隠岐の呼び方

隠岐諸島は、島根半島の北40~80kmの日本海に点在する4つの有人島と180余りの無人島からなる島ですが、古くから防衛上の重要拠点とされ、島でありながら、淡路島、佐渡島等とともに国として呼ばれてきました。

隠岐の表記は国造り時代（～645年）には意伎（おき）、天平時代（729年～）には隠伎、延喜年間（901年～）以降は隠岐と表記を変えながら今日に至っています。

『古事記』（712年）『日本書紀』（720年）には隠岐を「三子洲」（みつごのしま）と記しており、親島である島後を「沖ノ島」と呼んでいたことから全島を「おき」と呼ぶようになったともいわれています。また、天照大神（あまてらすおおみかみ）がこの島には美しい「御木」（おんき）があると言われたので、「御木」（おき）と名付けられたともされています。

本土側から見て手前側にある3つの島を島前（どうぜん）と呼び、後ろ側にある最も大きな島を島後（どうご）と呼びます。その昔役人が隠岐を巡視するルート（道程）において、前にあるから道前（どうぜん）、後ろにあるから道後（どうご）と呼んだのが変わったのだとも言われています。

1-3 隠岐の所屬

隠岐は離島であるがゆえに、政治の狭間でその所屬も揺れ動きました。建久4年（1193年）に近江の守護職であった佐々木定綱が隠岐国の地頭として任ぜられましたが、その後尼子氏の支配下となり、天正10年（1582年）に尼子氏の滅亡とともに隠岐は毛利領となりました。

慶長5年（1600年）には、堀尾吉晴が出雲・隠岐24万石に封ぜられ国主となり、寛永11年（1634年）からは京極忠高が出雲・隠岐24万4千2百石の国主となりましたが、寛永14年（1637年）京極忠高の死後、忠高には嗣子がなかったため、出雲・隠岐両国は幕府直轄地（天領直轄）となりました。

寛永15年（1638年）には、松平直政が信濃国松本から出雲18万6千石に封ぜられ、隠岐1万8千石を預けられました。（松江藩預かりとなる）この時、隠岐の総石高は1万8千石とされましたが、実質は1万2千石程度であったといわれています。

幕末の動乱期には隠岐でも尊皇攘夷運動が高まり、慶応4年（1868年＝明治元年）に隠岐維新が起こりました。一般的には隠岐騒動と呼ばれていますが、神官と庄屋の正義党が松江藩隠岐郡代を追放し、王政復古で隠岐は朝廷御料になったと宣言し自治政府を樹立しました。（パリコミュンより3年早い80日間の自治政府の樹立）

これに対して、朝命を受けた松江藩は隠岐に出兵して一時隠岐を奪回しますが、まもなく鳥取藩の仲介により松江藩は撤退し自治が復活しました。このことから、明治新政府は一時隠岐を鳥取藩に預けることとなるのです。

その後明治新政府は明治2年（1869年）2月～8月まで隠岐国に隠岐県を設置しますが、幕末の石見銀山を前身とする大森県に統合もさせています。

新政府の方針はなかなか決まらず、隠岐地域の所属は島根県と鳥取県との間で移管を繰り返した後、明治9年（1876年）にようやく島根県への所属に落ち着きました。（詳しくはP 105～P 109 隠岐維新の項を参照してください。）

1-4 隠岐ジオパークの範囲

◆海域も含めたジオパーク

隠岐ジオパークでは、海洋生物や漁業などの人の営みを含め、隠岐を取り巻く環境そのものをジオパークとして考えています。

このため、隠岐ジオパークの範囲は、隠岐諸島の陸域（346km²）と周辺の海域（282.5km²：海岸線から1km以内の海域面積）を足した628.5km²となっています。

このように、海域を含めたジオパークは国内にはなく、また、世界的にもめずらしいものです。



隠岐ジオパークの範囲

コラム1 ジオパークとは？

◆ジオパークとは？

ジオパークという言葉は、ジオ（geo：地球、大地）とパーク（park：公園）を合わせた造語で、『大地の公園』とも訳されています。

ジオパークとは、地球科学的にみて重要な地質遺産を有するだけでなく、生態系や歴史、文化など私たち人の営みと大地や地球との関係を学び体験することのできる総合的な公園です。

地域にある貴重な資源を保全あるいは新たに発掘し活用することによって、教育や地域振興に取り組むことがジオパーク活動の目的となっています。隠岐ジオパークでは、小中学校の総合的な学習や公民館活動において『隠岐ジオパーク学習会』を開催し、隠岐の魅力を学ぶことによって『隠岐を愛する人づくり』に取り組んでいます。

◆ジオパークとして認定されるには？

ジオパーク活動は、2004年に国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）の支援によって世界ジオパークネットワーク（GGN）が設立され、ジオパークとしての審査、認定される仕組みができました。（GGN事務局はフランスのパリにあります）

日本では、2008年に国内の認定機関として日本ジオパーク委員会（JGC）が設立され、2009年には日本ジオパークに認定された地域と日本ジオパーク認定を目指す地域によって日本ジオパークネットワーク（JGN）が設立されました。

日本ジオパークに認定されるためには、JGCに対して加盟申請書を提出し、プレゼンテーション、JGC委員による現地審査を経て認定が決定します。

また、世界ジオパークに認定されるためには、まず、日本ジオパークに認定されていることが条件となっています。日本ジオパークに認定された後、新たにJGCに対して世界ジオパーク加盟申請書を提出し、日本ジオパーク認定と同様プレゼンテーション、JGC委員による現地審査を経て、JGCから世界ジオパークネットワークに対して加盟申請書を提出しても良いという推薦を受けてから、GGNに対して加盟申請書（英文）を提出

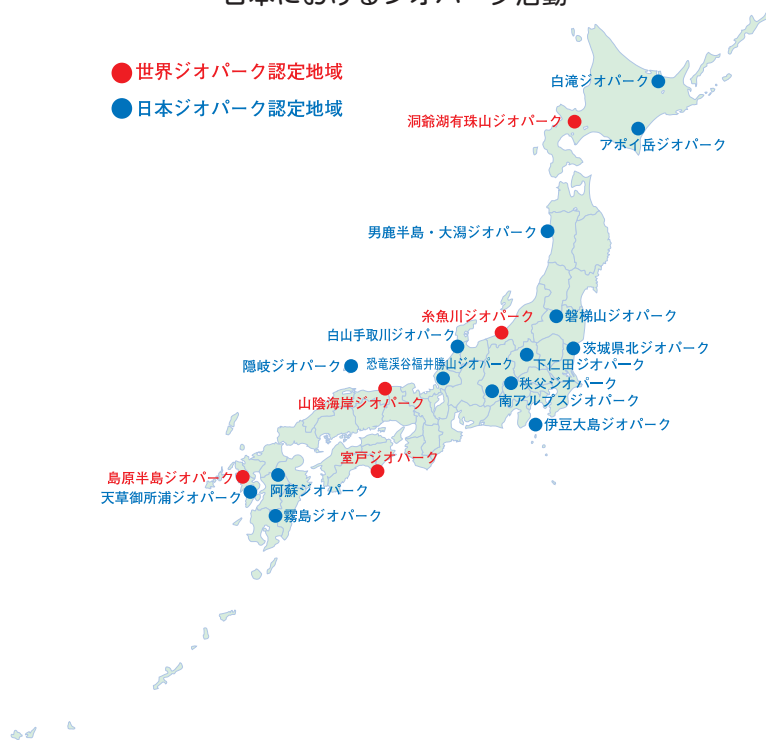
します。

GGNは、加盟申請書を確認した後、GGN委員による現地審査を経てGGNに加盟させるか否かを決定します。2012年3月現在、日本ジオパークには隠岐を含む20地域が認定されており、その内、洞爺湖有珠山ジオパークを含む5地域が世界ジオパークに認定されています。

隠岐ジオパークは2009年10月に日本ジオパークに認定され、2011年9月にはJGCからの推薦を受けて11月末にGGN事務局に英文の加盟申請書を提出しています。今後、GGN委員による現地審査を経て、国内6番目の世界ジオパーク認定を目指しています。

2012年現在、27カ国87箇所が世界ジオパークに認定されています。

日本におけるジオパーク活動



1-5 隠岐ジオパークのみどころ



隠岐ジオパークは、「日本海の孤島が生み出した荘厳な大地と独自の生態系、そして人の営みが織り成す景観」をテーマとしています。隠岐諸島は世界でも新しい縁海である日本海に浮かぶ孤島で、その自然景観を構成している植生は、最終氷河期時代（約2万年前）に流入してきた

亜寒帯の植物（現在の日本では亜高山帯）が暖温帯の植物や大陸系の植物とも混在し世界的にも珍しい植物分布をしています。また、亜高山性や大陸系の植物が海岸の遊歩道沿いに分布しているため、それらを食草としている蝶などが低地にいたり、大陸系の蝶なども生息しています。

更には、隠岐は旧石器時代から鍬（やじり）などの石器として利用されていた黒曜石の産地であったため、遥か3万年前の古代から続く人の営みが古墳などの遺跡や神社、各地で行われる祭りなどの中に息づいています。

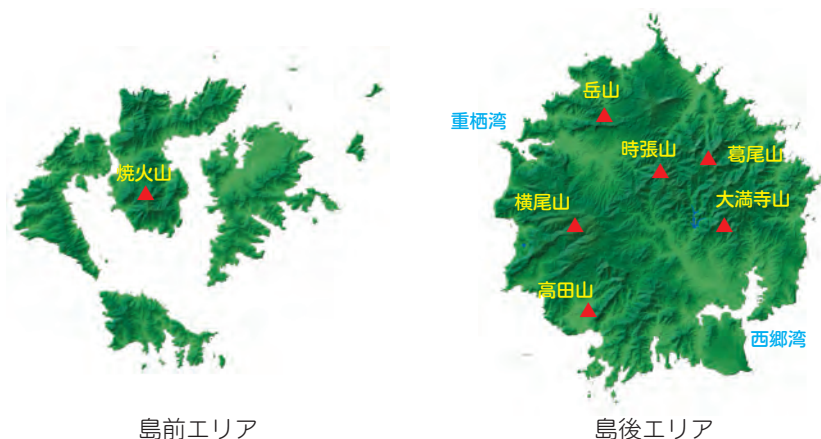
隠岐ジオパークでは、隠岐諸島が形成された『大地の成り立ち』と大地の上に成り立つ『独自の生態系』そして私たち『人の営み』の関係を分かりやすく体験することができます。隠岐ジオパークの不思議な生態系や独特の歴史、文化について、『地質、地理、地形、地史、地域、地球』という6つのキーワードを用いて考えると、小さな離島に居ながら『地球とは何か』を知ることができます。



そして、隠岐ジオパークでは、離島ならではの美しい景観と私たちに身近な植物や神社や祭りなどの歴史・文化を通してジオパークの楽しみ方を紹介しているため、地学に興味のない方やお年寄りから子どもまで気軽に地質や岩石の話を知ることができます。

2-2 隠岐諸島の地形

隠岐諸島の地形図



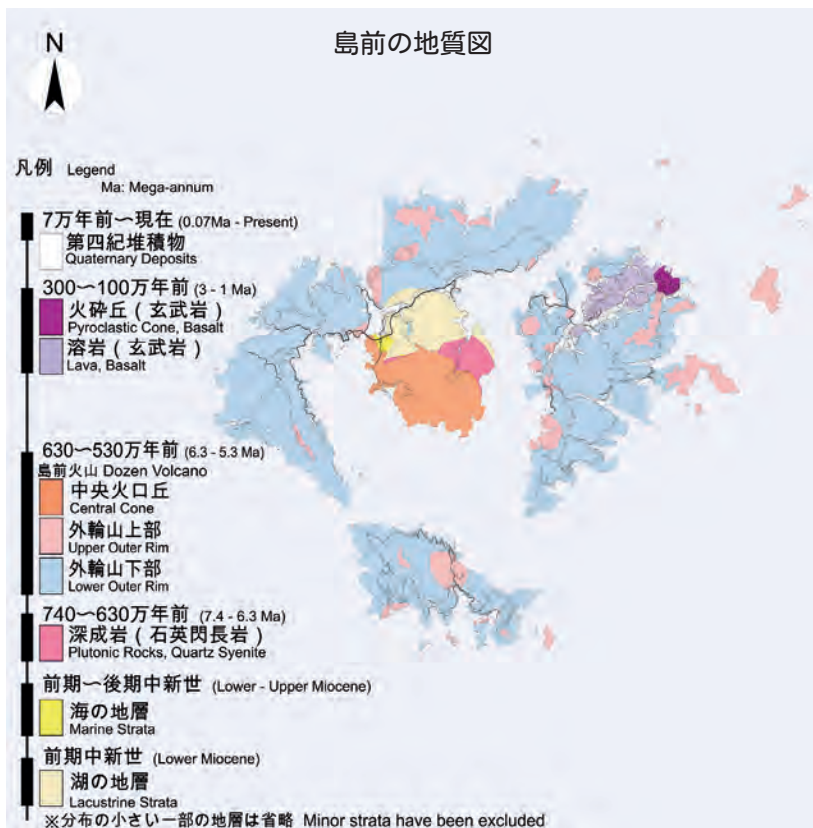
隠岐諸島は丸い形をした「島後（島）」と大きな入り江を持つ3つの島からなる「島前」の大きく分けて2つのエリアで構成されています。

島前は全体が島前カルデラと呼ばれる巨大なカルデラ地形をしており、外輪山としての島々、カルデラとしての内海、そして中央火口丘としての焼火山（島前最高峰：451.7m）からなります。大部分が山や丘陵ですが、東側の中ノ島北部には平地が広がっています。また、西ノ島の国賀海岸を代表するように、北西に面した海岸は急峻な海食崖が続き雄大な景観を作り出しています。

これに対して、島後は島の西側を中心とした三日月状の山地（高田山：315m、横尾山：572.8m、岳山：261.1mなど）と、峰の多い東部の山地（大満寺山：607.7m、時張山：521.6m、葛尾山：597.6m）、そしてその間に挟まれた低地からなり、外洋に面した海岸は平野が少ない一方で、入り江に面した低地が島の南東部（西郷湾と八尾川流域）と北西部（重栖湾と重栖川流域）に対角的に並んでいて、重栖の低地は周囲を崖で囲まれています。北西に面した海岸は島前と同じく海食崖が多く見られ、西郷湾の南には平坦な地形の半島が広がっています。

2-3 隠岐諸島の地質

隠岐諸島の大地は主に新第三紀中新世後期（約630～530万年前）の溶岩と火砕岩で形成されています。



【島前】

島前はその大部分が火山性の地質からなり、中新世後期（約630～530万年前）のアルカリ玄武岩質溶岩の外輪山（下部外輪山溶岩、上部外輪山溶岩）と粗面岩質の中央火口丘（焼火山中央火砕丘）を持ちます。例外は西ノ島の焼火山と外輪山の間に見られる中新世中期～後期の堆積岩（美田層、市部層）と、焼火山に寄り添う大山の山体を構成している島前火山噴火前の深成岩（大山石英閃長岩）程度です。また、中ノ島北東部に見られる玄武岩（宇受賀玄武岩）は島前カルデラの形成よりも後（約280万年前）に形成されたもので、外周から焼火山方面に切り込む入り江をせき止めなだらかな平地を形成しています。

島後の地質図



島前に比べて島後はより複雑で、東部の山地周辺は火山性の陥没地形を埋めた中新世後期(約500万年前)のアルカリリ流紋岩質火砕岩(葛尾層)が円形に分布しており(葛尾コールドロン)、その外周を囲むように、中生代(約2.5億年前)に変成作用のピークをもつ片麻岩(隠岐変成岩類)が屋根のないドーム状に分布しています。さらにその外周には、古第三紀漸新世～新第三紀中新世(約2,600～1,000万年前)の堆積岩や多様な組成の溶岩、火砕岩(時張山層、郡層)が分布し、その上に、島の外周に沿って西に凸の三日月状に分布した新第三紀中新世後期(約550万年前)のアルカリ流紋岩～粗面岩溶岩と火砕岩(重栖層)が重なる山地形を形成しています。また、鮮新世から更新世(約470～44万年前)にかけて散発的に噴出した玄武岩溶岩が島後東側の時張山層～郡層分布域に散在し、台地や山頂の上部を構成しています。

2-4 隠岐諸島の成り立ち(地史)：大地の成り立ち

隠岐諸島の古地理図



2億5千万年前



4千万年前



2千万年前



1千6百万年前



6百万年前



2万年前



現在

隠岐諸島は、長い間日本列島とともにユーラシア大陸の縁辺にありました。2,500万年前から始まった地溝帯運動によって、日本列島が大陸から分離するときには日本列島とともに南東に向かって移動し、大陸と日本列島の間に大きな湖が形成された時には湖の底に位置していました。その後も続いた日本列島の分離に伴い、約1,800万年前頃には湖が海へと変わりました。この時、隠岐は日本海の海底の高まりの一つ（隠岐海脚）となり、約1,000万年前頃までは深い海の底にありました。

長い間（約1,000万年間）海の底にあった隠岐は、約600万年前、大規模な火山活動によって海底から隆起し陸地となりました。島前は630万年前に溶岩が噴出し、次いで570万年前に島後で溶岩が噴出して火山島を形成しました。

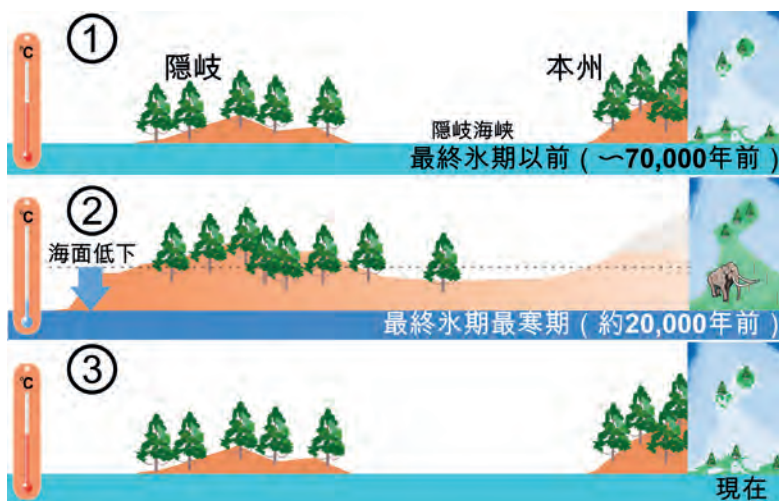
島前では、元の島を完全に溶岩が覆ったあと、マグマが噴出して空洞となったマグマだまりに向かって火山島の中心部が陥没して小さくぼ地になりました。その後（540万年前）、カルデラの内部で火山が噴火して焼火山を形成しました。

島後の方のできかたは島前ほど良く分かっていません。先に外周の火山ができた後に葛尾山を中心とした広い範囲が陥没して、そこを火砕岩が埋め立てたと考えられています。島前、島後ともかなりの規模の噴火であったと思われます。火山活動が終わった島後は、その後一部が海に沈みますが、すぐに新しい噴火活動によって隆起し、溶岩によって形成された台地があちこちに作られました。（この新しい火山活動は420万年間続いたと思われます。）

この火山活動の終了と前後して、第四紀更新世前期（約70万年前）頃から、本格的な氷期のサイクルが始まりました。世界的な海水準変動を起こした氷期サイクルによって海面は数十m以上も上下し、特に約2万年前にピークを迎えた最終氷期（ウルム氷期）には、140～120mも海面が低下したと言われています。隠岐諸島自体が海底の高まりの上であり、本州（島根半島）との間が水深約70mほどの浅海でつながっているため、この氷期サイクルの中で隠岐諸島は何度も本州とつながった半島になったと考えられています。

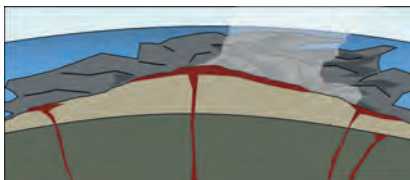
2万年前の最終氷期に、隠岐は海水面の低下によって島根半島と陸続きとなりましたが、その後の温暖化に伴う海水面の上昇によって約1万年間に現在のような離島となりました。

隠岐は世界的にも珍しい不思議な生態系と独自の文化が今も残されています。その大きな要因の一つとして、島根半島と陸続きとなりそして離島となった地史が関係していると考えられています。



コラム2 島前カルデラの作り方

島前3島は「島前カルデラ」として日本の地質百選にも選ばれています
が、島前カルデラはいつ頃どのようにしてできたのでしょうか。



今から630万年前、島前地区では焼火山（たくひさん）を火口とした火山体が形成されました。



マグマが大量に噴出し、空洞となったマグマ溜りに地面が陥没して大規模な凹地ができます。



540万年前、カルデラの中央部で中央火砕丘が形成されました。これが現在の焼火山です。



浸食によって海水が凹地に入り込み現在のよなカルデラの海が形成されました。

カルデラ：カルデラとは、火山の活動によってできた大きな凹地のことで、スペイン語の釜、鍋という意味から付けられました。
島前の内海はカルデラの手ですが、阿蘇を代表とするカルデラ盆地、洞爺湖などのカルデラ湖などがあり、観光地としても賑わっています。

2-5 浸食によって作り出された景観

美しい青い海に囲まれた緑豊かな隠岐諸島の見どころとして、青と緑が出会う場所である海岸の景観があります。隠岐諸島内の5箇所の海岸風景が国指定名勝となっています。

【海食崖】

日本海の荒波を強く受ける北西側の海岸には、国賀の摩天崖や知夫の赤壁に代表される200m級の海食崖や、代のローソク島、国賀海岸の通天橋～天上界、島後北端の白島海岸など変化に富んだスケールの大きな景観が見られます。



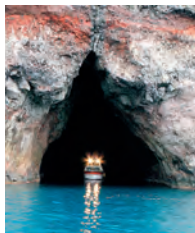
摩天崖



白島海岸

【海食洞】

海岸の多くは溶岩や火砕岩で形成されています。いくつもの割れ目が入ったこれらの岩石が波に削られると、割れ目に沿って海食洞ができます。このようにしてできた海食洞としては、明暗の岩屋（あけくれのいわや）、大屋の湾戸（おおやのわんど）などがあり、遊覧船やシーカヤックによる洞窟探検などで楽しむことができます。



明暗の岩屋



大屋の湾戸



久見の洞窟

【アーチ】

海食洞の奥行き部分が崩れると、崖に穴が開いたアーチができます。西ノ島の国賀海岸にある通天橋や島後の白島海岸の象ヶ鼻がこれにあたります。



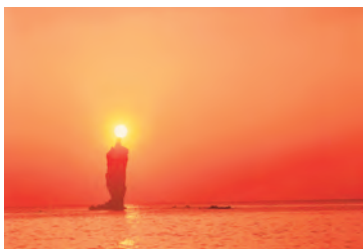
通天橋



象ヶ鼻

【離れ岩】

さらに海食洞の屋根が崩れると、陸地から離れたような島（離れ岩）になります。島後の代地区にあるローソク島、西ノ島の国賀海岸にある観音岩、海士町の三郎岩などがこれにあたります。



ローソク島



三郎岩

【波食棚】

また、特に弱い岩石が出ている海岸では、波の力のかかる部分が削られ、平らな岩場ができます。島後の油井地区にある前の洲、布施地区にある卯敷海岸、福浦地区にある福浦トンネルに見られる平坦な海岸は過去に波によって削られてきたものですが、油井の前の洲は現在も削られています。



前の洲



福浦トンネル

【火山の断面】

波によって削られた岩場では、元々は大地の内部にあったものが見えています。島後の代地区で見られる火道（フィーダー岩脈）や岬の爆裂火口、明屋海岸、知夫の赤壁では火山そのものの断面を観察することができます。



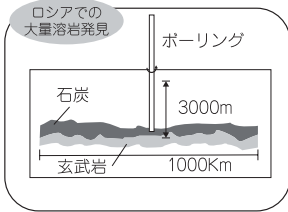
フィーダー岩脈



赤壁

コラム3 パンゲア大陸と隠岐

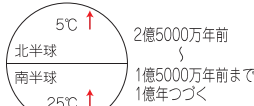
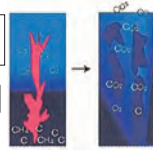
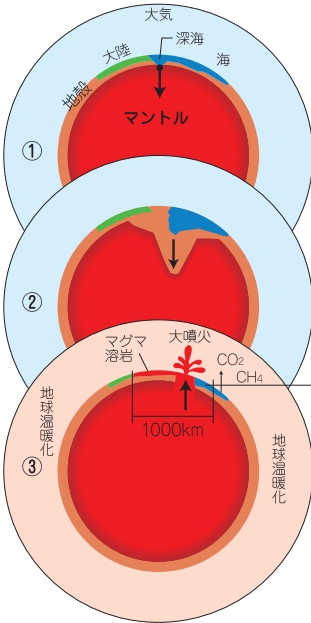
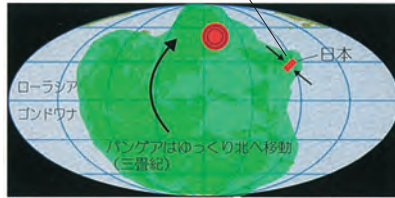
隠岐片麻岩（広域変成岩）と超大陸パンゲア



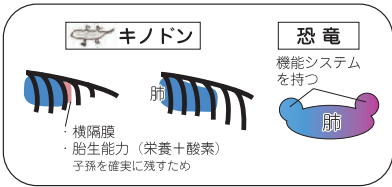
2億5000万年前
超大陸パンゲア
(一つになった大陸)

隠岐変成岩類
三疊紀～ジュラ紀
250-165Ma

爬虫類型哺乳類
キノドン



低酸素でも繁栄した理由



5%の生き物が残る

- ・アロサウルス
- ・アバトサウルス
- ・爬虫類型哺乳類
- キノドン

ろぞみくらしい

…南アフリカ：ロジャー博士説…

前頁の図は、パンゲア大陸（5大陸が1つになった超大陸）と隠岐の変成岩（片麻岩）との関係を示したものです。

隠岐の片麻岩は造山活動時にプレートがぶつかって形成された岩石で、国内最古の岩石の一つであり、日本を代表する岩石と言っても過言ではないでしょう。

2002年にアフリカのロジャー博士が発表したものによると、ロシアで行われたボーリング調査によって、地表から3kmの石炭層の下に玄武岩（マグマが地表の浅い部分で冷え固まった岩石）が直径約1千kmにわたって存在することが判明し、この玄武岩が形成されたのは今から1.5億年～2.5億年前に造山活動で5大陸が一つになったパンゲア大陸の時代であることも分かりました。

パンゲア大陸の縁の海は深く地殻が薄かったことから、大陸が北へ動いていたことで今のロシアあたりで地殻と海がマントル内へ沈みこみ大噴火を起こして、この直径約1千kmもの玄武岩が形成されたと推測されています。

この大噴火で海水中からメタンガスと二酸化炭素が大量に放出され、大気中に含まれていた酸素量が30%から10%に減少する低酸素時代をむかえました。

また、この影響で地球の北半球では気温が約5℃上昇し、南半球では気温が約25℃上昇する地球温暖化が進み、地球上の生命の約95%が死滅したと推測されています。

この低酸素時代を生き抜くために、恐竜たちは第二の肺をつくり、私たちほ哺乳類の祖先であるキノドンは横隔膜をつくり、卵から胎生へと急激に進化を遂げたのではないかと思います。

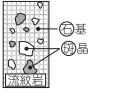

隠岐片麻岩は、こうした地球の造山活動を証明し、更には生物の進化の過程を知るうえでも貴重な岩石であると言えるのではないのでしょうか。

日本最古の片麻岩と言われる隠岐片麻岩の中には20～32億年前の源岩が含まれており、ガーネットなどの宝石類も見いだすことができます。

隠岐ではこの片麻岩が大量に産出され採石として使用されているので、私たちは人類の祖先と同じ岩石の上を歩いていると言ってもいいのかもしれないかもしれません。

2-6 岩石の分類

岩石はでき方によって、3つのグループに分かれます。(よく見られる岩石の種類は20種です)

火成岩 (火成岩な主なものを以下8種)	
マグマが冷えて固まった	
火山岩	深成岩
①流紋岩 ②玄武岩 ③安山岩	④花崗岩 ⑤かんらん岩 ⑥蛇紋岩 ⑦せん緑岩 ⑧斑レイ岩
マグマが地表近くの浅い所で急に冷えて固まる	マグマが地下深くでゆっくり冷えて固まる
岩石を構成する鉱物粒子が全体に細かい	岩石を構成する鉱物粒子が概ね1mmより粗い
 <p>⑤ 基 無地の部分 (黄緑色) 結晶: ガラス質 ⑥ 晶 大きな結晶</p> <p>●ガラス組織 (黒曜石) : マグマが急速に冷える正鉱物は含まれない</p> <p>●流紋組織 (流紋岩) : マグマが浅層中に固まる・石基に網模様</p> <p>●多角形組織 (玄武岩) : 石基に多く含む : マグマが地表に噴出した際に凝固しガスが抜ける</p>	 <p>④ 英 ①のルカリ長石 ⑤ 斜長石 ⑥ 黒雲母</p> <p>花崗岩</p> <p>⑦ 岩石の冷却途中で結晶: 水色、黄色、白、灰色、赤、紫 成分: SiO_2、ガラスの微粒子 色: 白、淡緑～褐色、赤、紫 主要成分: Na、$AlSi_3O_8$ 副成分: Ca、Fe、Mg、Ca ⑧ 色: 白、青、緑、灰色 成分: Ca、$Al_2Si_2O_7$ 副成分: Na、Fe、Mg、Ca ⑨ 色: 白、黄褐色、灰色 成分: $KAl(AlSi_3O_8)(OH)_2$ 副成分: Fe、Mg、Ca ⑩ 色: 白、黄褐色、灰色 成分: $KAl(AlSi_3O_8)(OH)_2$ 副成分: Fe、Mg、Ca</p>

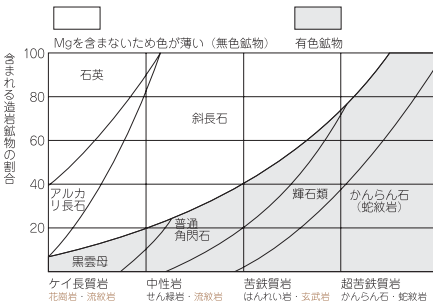
堆積岩		
れき、砂、泥などが堆積して固まった		
堆積物の種類	堆積岩の種類	備考
・礫 2mm以上の粒子	礫岩	大津久
・砂 16/1~2mmの粒子	砂岩	都万 金屋
・泥 16/1mm以下の粒子	泥岩	
・火山放出物 火山礫、火山灰	火砕岩	五箇小路 扇状岩 (五箇石)
・ $CaCO_3$ からなる 生物の死骸 サンゴ、貝殻	石灰岩	
・ SiO_2 の殻を持った 放射虫などの死骸	チャート	
・植物の死骸 木片など	石炭	五箇 トンネル 都万路

変成岩	
他の岩石が強い圧力や熱の影響を受け変化した岩石。その変化はほとんどの岩石に含まれた鉱物が別の鉱物に変わったりします。変化するものと岩石を源岩といいます。これらを変成作用といいます。	
<p>接触変成岩 熱変成岩ともいふ。マグマの熱による変成作用でできたもの。500~600°Cくらい。火成岩の分布に沿って狭い範囲に(幅数cm~数km)に分布</p> <p>花崗ホルンフェルス 泥岩から変わってできた細い黒雲母を多く含む</p> <p>粘晶質石灰岩 石灰岩が変わってできたものと石灰岩より不純物が少なく純白色 その多くは大正石である</p>	<p>広域変成岩 地球の表面を覆う複数のプレートによる変成作用でできたもの。その境界が大規模(広域)な変成作用が記し生じた</p> <p>分布は幅数km~数十km、長さ数十~数百kmと広い</p> <p>地下深くで起こるため300~800°Cの温度と強い圧力(数千~1万atm以上)が加わっている</p> <p>結晶片岩 褐色片岩 緑色片岩 青色片岩 乱れん片岩 白雲母片岩 角閃片岩</p> <p>片麻岩 石英、長石類、雲母類、角閃石類、クレー石、コランダム、ざくろ石などを含んでいます</p> <p>花崗岩に似るが輪状組織が見られます</p> <p>砂岩、泥岩、花崗岩から変わることができる</p>

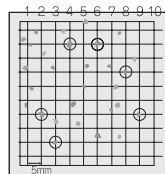
造岩鉱物による分類 火成岩に含まれるケイ酸 (SiO_2) の量によって分けられる

ケイ酸分の含有率	70%前後	60%前後	50%前後	45%以下
通 称	ケイ長質岩 (酸性岩)	中性岩	苦鉄質岩 (塩基性岩)	超苦鉄質岩 (超塩基性岩)
岩 石 名	流紋岩・花崗岩	安山岩・せん緑岩	玄武岩、斑レイ岩	かんらん岩・蛇紋岩

火成岩に含まれる造岩鉱物の割合



色指数で岩石 (深成岩) を見分ける方法



この場合は黒雲母の上に交点が7個ありますよって色指数は7です。

色指数
花崗岩: 0~20 せん緑岩: 20~40
斑レイ岩: 40~70 かんらん岩: 70以上 (蛇紋岩)

前頁の表のように、隠岐は火山活動によって形成された島であるため色々な岩石を見ることができます。

- ・岩石は火山で代表されるような地球の内部作用によってできたものです。地球の内部エネルギーによる造山活動や火山活動に伴うもので、地表の起伏や高低にも関係しますが、でき方によって下記の3つのグループに分かれます。
 1. 火成岩：マグマが冷えて固まってできたもので、マグマが冷えた場所によって火山岩と深成岩に分けられます。
 2. 堆積岩：レキ、砂、泥などが堆積して固まってできたもので、堆積物の種類によって砂岩、泥岩などに分けられます。
 3. 変成岩：ほかの岩石が強い圧力や熱の影響を受けて変化したもので、でき方によって接触変成岩（熱変成作用）と、広域変成岩（熱圧力変成作用）などがあります。

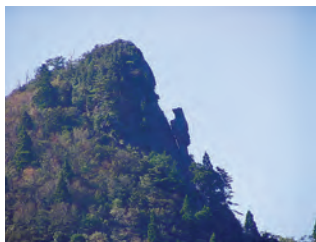
◆日本最古の岩石『隠岐片麻岩』

岩石は、そのでき方やできた時代によって分類されていますが、隠岐には大きく分けて中生代（約2億5千万年前から6千5百万年前）の隠岐片麻岩類と、新生代第三紀（約6千5百万年前から180万年前）の岩石。および、新生代第四紀（約180万年前から現在）の岩石がみられます。

隠岐片麻岩類には、先カンブリア代（地球誕生の46億年前から約40億年間）の岩石（20～32億年前）が含まれ、ときにはザクロ石（ガーネット）も含まれています。

また、島後の西側を形成するアルカリ流紋岩類も本土ではあまり見られない隠岐を代表する岩石です。

その他、国内最大の粗面岩柱状節理や、マントル成分を捕獲した玄武岩、アルカリ流紋岩中の黒曜石など、隠岐は非常に多様であり貴重な岩石の産出地でもあります。



日本の三奇岩の一つでもある隠岐のトカゲ岩は、その形も興味深いものですが「アノーソクレイス響岩質粗面斑岩」といわれる岩質で、世界でも三カ所（隠岐、南極大陸、キリマンジャロ）しか露出していない貴重なものなのです。

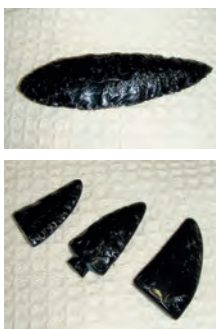
◆隠岐黒曜石の道



隠岐を代表する岩石の一つであり、石器時代に矢じりとして利用された黒曜石の産地は、国内で70箇所ほど知られています。このうち石器の材料として採掘・利用された主な産地は北海道の白滝、長野県の和田峠、伊豆諸島の神津島、大分県の姫島、佐賀県の腰岳、そして隠岐の6箇所ほどでした。



左：出土した石器



右：復元した石器

隠岐の黒曜石は、遙か3万年前から中国地方を中心として新潟県や四国地方まで運ばれていました。このことは、隠岐の黒曜石が良質であったため、古代の生活には欠かせない石であったことが想像されるとともに、その当時の盛

んな人・文化交流の道も見えてきます。

※黒曜石は鹿の角を使ってはく離させながら加工するのですが、古代人はどのようにして鹿の角を使って加工することを知ったのでしょうか？ ちなみに、現在隠岐に鹿は生息していません。

しかし、何よりも驚くべきことはGPSも機械もない遙か昔に、海を渡って交流をしていたというその航海術や文化の高さなのではないでしょうか。丸木船で日本海を渡り各地との交流をしていたということは、私たちの想像をはるかに超えるものがあります。

昭和20年代まで、隠岐の漁師は隠岐から約157km離れた竹島でアシカ猟やアワビ漁をしていましたが、ちいさなカンコ船（幅1.5m、長さ5.0m程度の船）で隠岐と竹島間を往復できたのはこの高い航海術を受け継いでいたからこそ出来たのかもしれませんが。

*竹島でアシカ漁やアワビ漁をしていた当時の資料や、竹島で酒を造っていた時の面白話なども隠岐には残っていますよ。



ちよっと一息

黒耀石面白話し

1. 黒耀石と隠岐の歴史

隠岐を中心とした交流があったことを裏付ける興味深い事実として、隠岐の神社数と大社の数、そして神社名があります。

隠岐には大小合わせて150社以上の神社があり（江戸時代は300以上とも）、名神大社が4社（水若酢神社、伊勢命神社、由良比女神社、宇受賀命神社）もあります。他の例を見ると、隠岐を除いた島根県内には出雲大社と熊野大社の二社があり、鳥取県内には宇倍神社の一社となっています。神社名についても伊勢命神社、厳島神社、諏訪神社など全国の有名な神社が隠岐にあります。このことは、隠岐の黒耀石を求めて各地の力を持った勢力が隠岐に入り、それぞれ国を造り神社を建立したのだと考えていいのかもしれませんが。隠岐が遠流の地として定められ、中央の貴族らが配流されたのもこのような歴史的背景があったからだという推測も出来るので、隠岐で自分だけの歴史物語を描いてみて下さい。

2. 黒耀石の伝説

黒耀石のことを隠岐では馬蹄石（ばていせき）とも呼びますが、これは福岡県の一部地域と隠岐だけで、隠岐の場合は名馬「池月」の伝説に関係しています。池月は源頼朝に献上され、宇治川の先陣争いで名を挙げた佐々木四郎高綱の愛馬ですが、池月が産まれて間もなく母馬は死んでしまいました。母馬を慕った池月は、隠岐の島町の津井の池（さいのいけ）の男池（おいけ）と女池（めいけ）の辺を探し歩き、ある日水の中に母馬を見つけたのです。池月は、それが水面に映った自分の姿だと気付かずに繰り返して池に飛び込みました。この時、池月の蹄で割られた黒耀石の断面が馬の蹄の形をしていたことから、隠岐では馬蹄石と呼ばれるようになったとの言い伝えがあります。

3. めぐり逢いの石『黒耀石』

このように、名馬池月が母馬と逢うたびにできた石であることから、黒耀石は『めぐり逢いの石』なのかも！黒耀石を身につけていると、きっとすてきな出会いが・・・。

※岩石分類上は黒曜石という文字を用いますが、このページでは黒耀石を用いています。

2-7 隠岐の不思議な植物分布（独自の生態系）

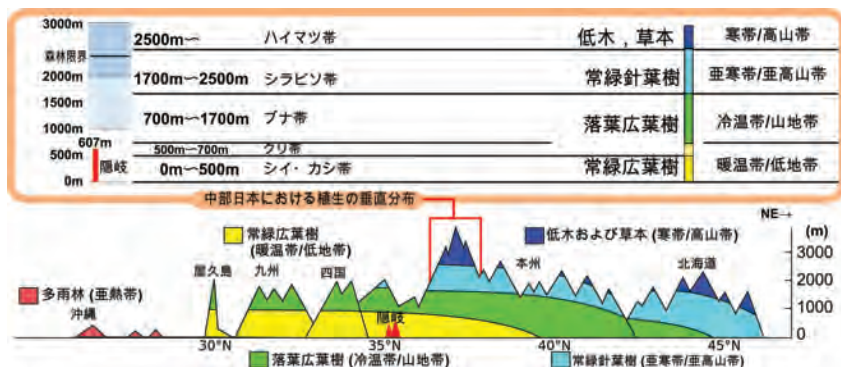
隠岐は裏日本でありながら温暖系の要素が多く入っています。対馬暖流に洗われる位置の海岸には、残存するヤブツバキ、タブ、スタジイ、ヤブニッケイなどの照葉樹林が分布していますが、興味深いことは島の中央あたりの山地にも頂上から尾根筋にかけて同じような植生が見られることです。

また、隠岐の特徴として海岸線の平地にも山地、亜高山帯のミズナラ、カシワ、クロベ、ネズ、イタヤカエデ、ハリギリ、オオイワカガミなどが見られたり、大陸系のミツバイワガサ、ケグワ、氷河期の生き残りのシロウマアサツキなども生育しています。

隠岐固有種としてはオキノアザミ、オキタンポポ、オキノアブラギク、オキシクナゲ、タクヒデンドがあります。そして、京都から鳥取の日本海沿岸に分布するトウテイランも隠岐では多く分布しています。

隠岐は、南方系のナゴラン、バリバリノキ、シャシャンポ、キエビネ、北方系のイタヤカエデ、ハマベンケイソウ、エゾノヨロイグサなどや、高山性、大陸系が共存するとともおもしろい島です。北方系のモミに南方系のナゴランが着生して自生しているなど不思議な光景も見られ、いくつかの北方種の南限や南方種の北限ともなっています。

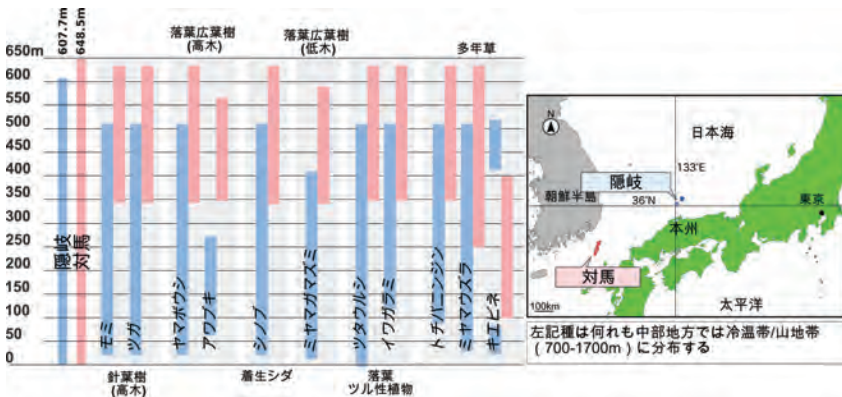
これらの大きな要因として、対馬暖流とアルカリ流紋岩の痩せ地の影響が大きいと思われます。対馬暖流によって、冬は温暖になり、夏は本土内陸部より涼しくなることにより、冷温帯・亜寒帯の植物が生き残れたのだと思われます。





隠岐は約1万年前に離島となりました。他の島に比べて若い島なので固有種の数(31種)はそう多くありませんが、生物の進化の過程を知る上ではとても貴重な島であると言えます。自然環境が豊かな他の地域では高低差による植物分布なのに対して、隠岐は水平(東西南北)の植物分布をしていると言えます。横の発見にこそ、植生分布の歴史が隠されてるのかもしれない。

離島における植物の低地化は、より南方の対馬でも見ることができますが、隠岐の場合ほど著しくはありません。

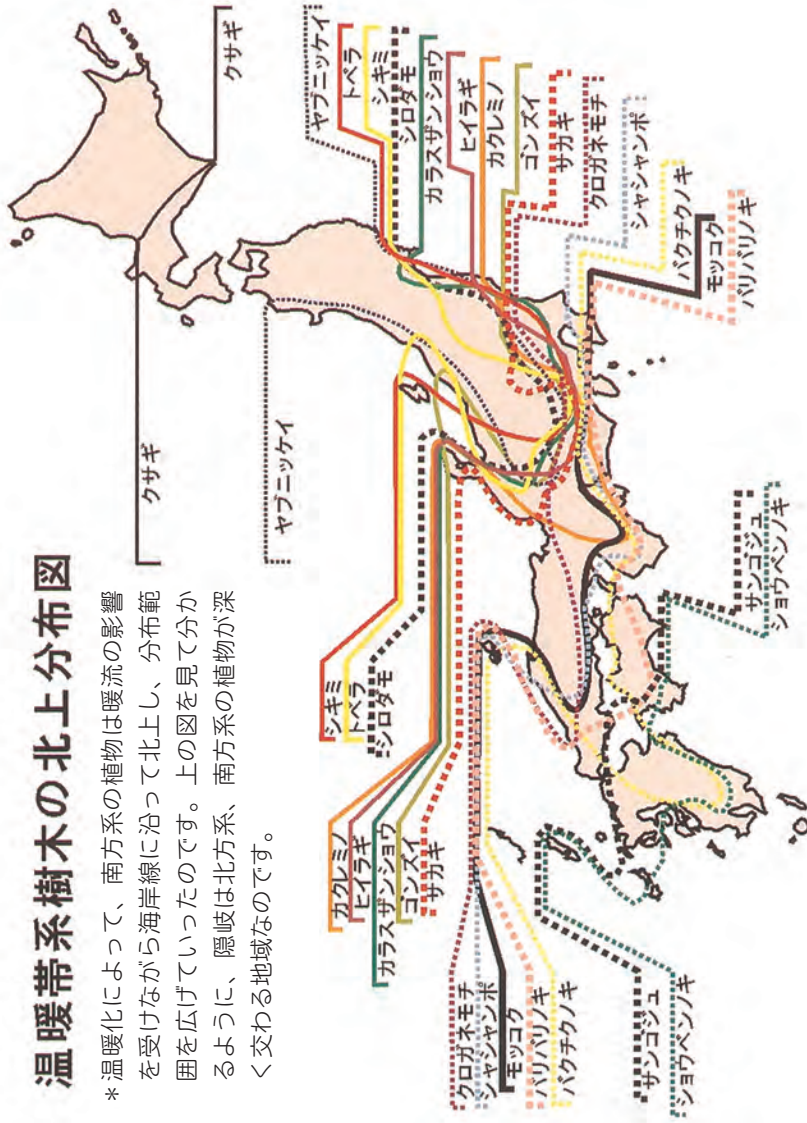


◆不思議な隠岐の植生分布解説



温暖帯系樹木の北上分布図

* 温暖化によって、南方系の植物は暖流の影響を受けながら海岸線に沿って北上し、分布範囲を広げていったのです。上の図を見て分かるように、隠岐は北方系、南方系の植物が深く交わる地域なのです。



2-8 植物の逃避地であった隠岐

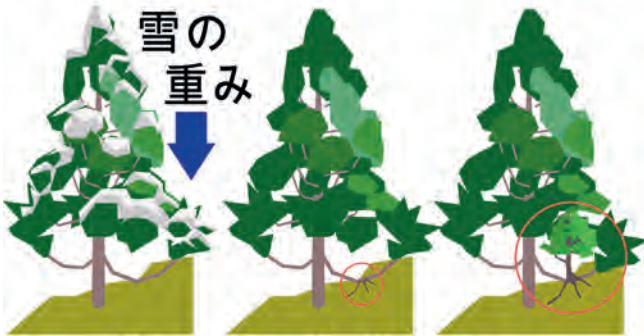
隠岐諸島は最終氷河期の時代（約2万年前）に植物の“逃避地”であったことが近年の杉の研究によって判明しつつあります。杉は日本の固有種であり、古くから建築用材として広く用いられてきました。北海道を除き本州、四国、九州に広く分布しており、太平洋側に分布する「オモテスギ」と日本海側に分布する「ウラスギ」、九州地方に分布する「ヤクスギ」の3種類に分かれています。

今から約2万年前の最終氷河期の時、海水面の低下によって隠岐は島根半島と陸続きになりました。



気温の低下に伴い、亜寒帯では生育できない杉が本州での生息場所を失い温暖な地域へと避難していくのですが、隠岐は島根半島と陸続きになっていたため日本海側の「ウラスギ」は隠岐へと避難し生き延びました。この時、太平洋側の「オモテスギ」は伊豆半島へ避難し、九州の杉は屋久島へ避難しています。その後、温暖化にともなって隠岐で生き延びた杉は日本海側に広く分布していったのです。こうしたことから、日本海側に分布する「ウラスギ」のルーツは隠岐であると言っても良いのではないのでしょうか。

ウラスギ特有の『伏条更新』



枝が地面に触れると
新しい株になる。

◆オモテスギとウラスギの葉っぱの違い



オモテスギとウラスギの違いとしては、前頁でも紹介しましたように、枝の出方、伸び方、幹の太さなどが違いますが、葉っぱの形も左の写真のように違っていています。左側が太平洋側に分布するオモテスギで右側が日本海側に分布するウラスギです。どこが違うのか分かりますか？ また、その理由は？

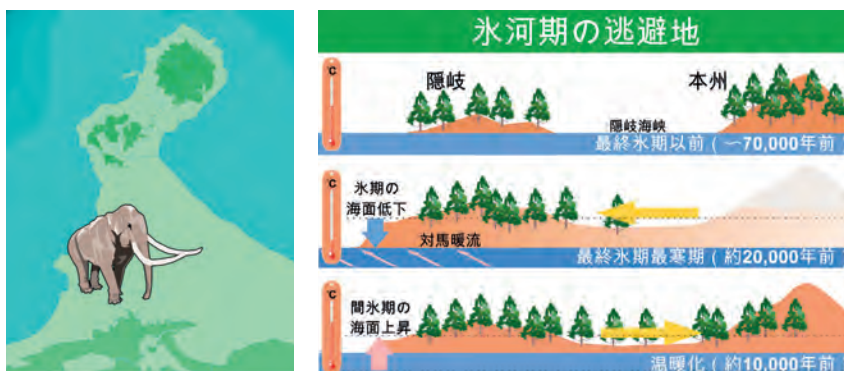
◆スギの葉の不思議



杉の葉っぱをねじると葉っぱが3列に並びます。杉の葉っぱは三枚葉で、効率よく光を受けるためにらせん状に回転しながら成長するので、戻すようにねじるときれいに3列に並ぶのです。杉という漢字ができた理由が分かりましたね！ ちなみに松は2枚葉です。

さて、ここで問題です、木に人が寄りかかるとなんとという漢字になるでしょうか？

こうした杉の逃避地という研究結果によって、隠岐ジオパークの不思議な生態系が誕生した原因を下記のように推測することができるようになりました。

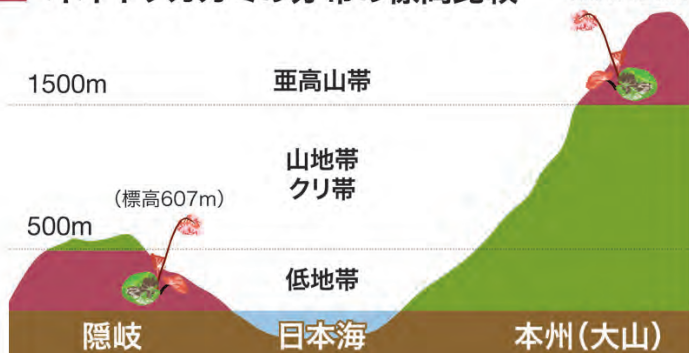


最終氷河期：隠岐は島根半島と陸続きとなり、気温の低下によって本州で生息（約2万年前）地域を失った植物たちが隠岐へ避難した。

氷河期の終り：気温の上昇とともに隠岐で生き残った植物が本州地域へと戻ったが、海面の上昇によって離島となった隠岐に氷河期時代の生き残りの植物や亜高山帯の植物がそのまま分布した。この原因として、隠岐の島後を形成するアルカリ流紋岩という地質が関係すると考えられている。

現在にかけて：その後の温暖化と暖流の影響によって、南方系の植物が北上し、隠岐に南方系の植物が分布するようになった。また、アルカリ流紋岩という大陸的な地質環境によって、大陸系の植物も海岸線を中心として分布した。

オオイワカガミの分布の標高比較 (標高1729m)



2-9 隠岐の固有植物

●オキタンポポ (キク科)



オキタンポポ



セイヨウタンポポ

オキタンポポとセイヨウタンポポの違いとしては、オキタンポポは総苞の外片が細くトゲのような突起がない。また、外片が開かないが、セイヨウタンポポは外片が大きく開き曲がる。

内片) 内片+外片：総苞
外片)

●オキシクナゲ (ツツジ科)



ツクシクナゲの変種で、ホンクナゲに花形が似ています。枝は横に広がる傾向にあり、葉質が薄く、幅広い楕円形で他のクナゲより丸味が感じられます。また、花の下の葉が小型なものもオキシクナゲの特徴です。

●オキノアブラギク (キク科)



海岸の崖地に生育する野生菊の一種。葉は深い切れ込みで5裂し、表裏に微毛がある。秋には道路わきの斜面を黄色に彩ります。

●オキノアザミ (キク科)



トゲが全体に多く、特に花の総苞片の先端が鋭いトゲになっており、それが伸びるのが特徴です。

●タクヒデンダ (ウラボシ科)



オシャグジデンダとオエゾデンダの交雑種です。西ノ島の焼火山(たくひさん)に分布していることから名前が付けられました。

2-10 隠岐を代表する海岸周辺の植物



チョウジガズミ (大陸系)



イタヤカエデ (亜高山)



ユキグニミツワツジ (北方系)



モクゲンジ (大陸系)



ケグワ (大陸系)



カジノキ



オニヒョウタンボク



ミズナラ (亜高山)



クロバ (高山性・氷河期系)



オオイワカガミ (亜高山)



ツシマナナカマド



マルバウマノスズクサ



オキタンボポ



カタクリ



トウテイラン



スズマハリイ
(芦ノ湖と隠岐)



イヌセンブリ



オキノアザミ



ダルマガク



クロキツタ (国・天然記念物)



ハリギリ



オキノアブラギク



ヒトモトススキ (北限)



ハイネズ



ヤマシャクヤク



ベニカラシ (北限)

◆海岸周辺の植物解説

●チョウジガマズミ



環境省：準絶滅危惧(NT) 島根県：準絶滅危惧(NT)。夏緑性の低木で高さは2～3mになります。葉は楕円形から広楕円形で長さ10cm、幅7～8cmで対生します。島根県内では隠岐諸島と出雲部に生育地が知られていますが、出雲部の生育地はきわめてまれです。

●オニヒョウタンボク

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 島根県：準絶滅危惧(NT)。夏緑性の低木で、葉はほぼ楕円形です。長さ10cm、幅5cmほどになり、表面はやや光沢があって対生します。果実は有毒であるとされており、島根県内では隠岐諸島にのみ生育地が知られています。



●カタクリ 島根県：絶滅危惧Ⅱ類。植物体は地中深く鱗茎があって、それから軟らかく長い柄を持った広楕円形の葉身がつくもので、葉身だけが地上にみられる。島根県内では中国山地や隠岐（島後）にまれな生息地があります。

●ナゴラン

環境省：絶滅危惧ⅠA類 島根県：絶滅危惧Ⅰ類。植物体は樹幹に太い着生根で付き、長さ10cm幅3cm前後の厚い葉をつける常緑、多年草です。島根県内での生息地は隠岐（島後）に限られており、多くはモミ、ウラジロガシの樹幹に着生しているが、隠岐の特異な状態として、クロベ、ヒメコマツ、クロマツの樹幹にも着生しています。



●マルバウマノスズクサ

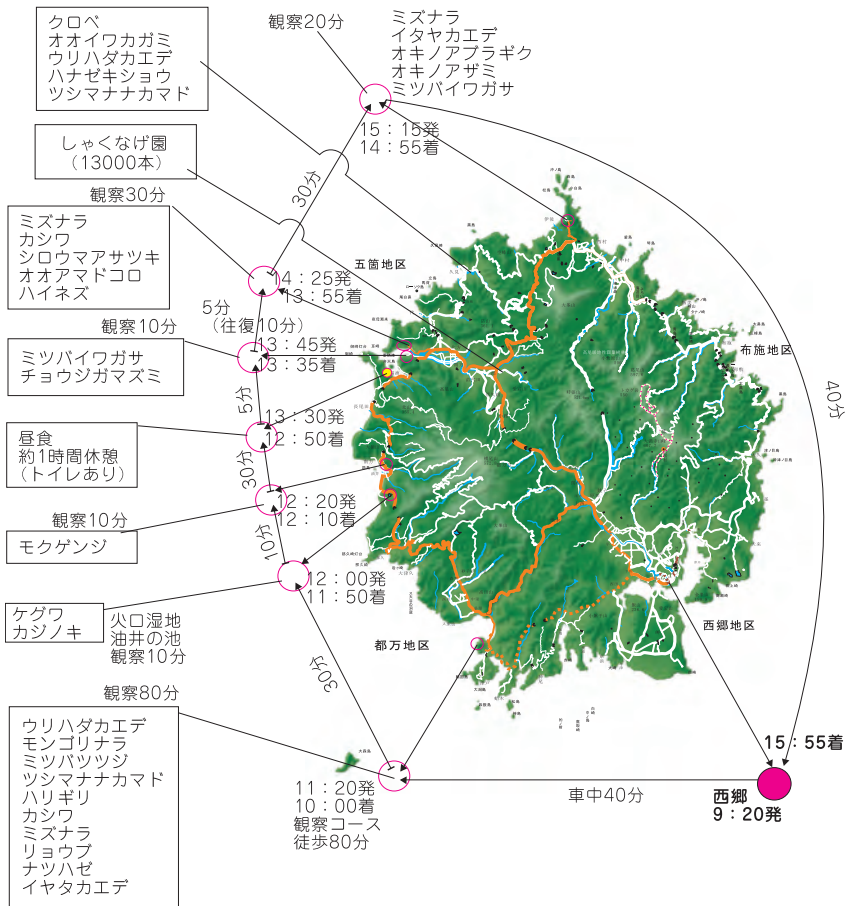


環境省：絶滅危惧ⅠB類 島根県：絶滅危惧Ⅰ類。多年草の蔓草で、枝分かれして数mに伸びます。葉は卵形で、基部は心臓のような形をしており、長さ5cm前後で互生します。島根県松江市八雲町において日本で最初に確認され、島根県内では東部と隠岐諸島にだけ生育地が知られています。

隠岐の島町（島後）

不思議な植物分布観察コース

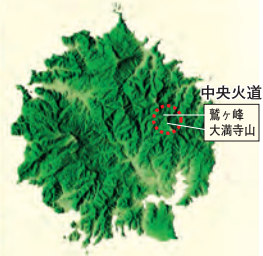
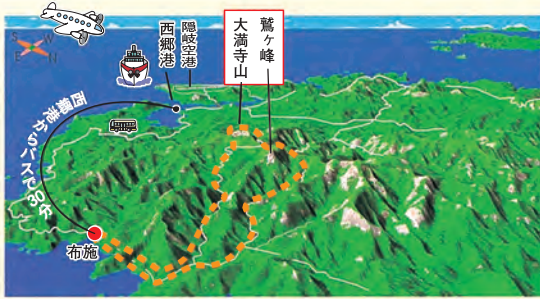
隠岐ジオパークの島後エリアでは、海岸の低地でも亜高山、またはブナ帯、南方系、大陸系の植物が混在する不思議な自然環境を観察することができます。



2-11 大満寺・鷲ヶ峰の自然環境

大満寺・鷲ヶ峰 ハイキングマップ

▶ 大山隠岐国立公園の特別区を回る
隠岐ジオパークのモデルコースです（約5時間）
（大満寺山と鷲ヶ峰を分けたコース設定も可能です）



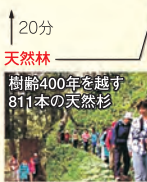
（所要時間：5時間15分）



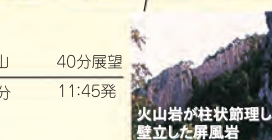
13:15着
中谷駐車場
10分
13:05発



トカゲ岩展望台
20分



12:30発
5分休憩
神原高原
12:25着



鷲ヶ峰 下山40分 5分休憩
11:05着 10:25発

布施 8:00発
バス20分
乳房杉 8:20着



登山道入り口 8:40発
登山 50分

大満寺頂上
9:30着（10分休憩）



9:40発
下山 40分

鷲ヶ峰ハイキングコース入口
10:20着



鷲ヶ峰の見どころ解説



岩倉神社の御神木、乳房杉です。樹齢八百年ともいわれており、アシュウ杉（裏杉）の特徴を見事に表しています。隠岐のエコツアーのシンボルともなっていますので、ツアーの安全祈願のため出発前に御参拝ください。

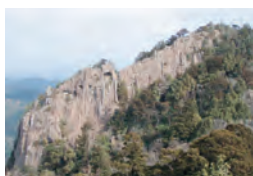


鷲ヶ峰登山コースの入り口です。隠岐ジオパークツアーのモデルコースとなっていますので、不思議な隠岐の自然環境とトレッキングを楽しんでください。

鷲ヶ峰登山コースの入り口からすぐの所で見られる杉です。地表に沿って幹が横たわり、幹の途中から真っ直ぐに枝が出ていることから、寝杉と命名される方もいます。



鷲ヶ峰での記念撮影です。ここからの景観は素晴らしく、この場所に立った誰もが感動されます。谷を隔てて下の写真の屏風岩が広がり、その向こう側には日本海を望むことができます。



柱状節理の岩が、屏風のように立っていることから屏風岩と呼ばれています。修験者の修行の場所とされていたことから、岩の窪地には天狗の像が納められています。幅1m程の屏風岩の上に立つと、足がすくみます。



鷲ヶ峰の展望台です。ここから見上げる鷲ヶ峰、屏風岩はとても険しく、ついさっきまで自分がその場所に立っていたとは信じられなくなります。また、鷲ヶ峰、屏風岩を踏破したんだという満足感に浸れる場所でもあります。



エコツアーの終点である中谷駐車場わきの溪流では、隠岐の島町の天然記念物オキサンショウウオを見ることができます。生物の進化の過程を見ることができることから、2005年には世界の希少種オキサンショウウオの生息地として隠岐諸島が指定されました。

鷲ヶ峰の植生



南方系 : ナゴラン・キエビネ・キリシマエビネ

北方系 : キンセイラン・トリカブト・イヌシデ・ゴマギ・ウリハダカエデ

解説

大満寺山・鷲ヶ峰の不思議な植生

大満寺山や鷲ヶ峰には、北方系あるいは亜高山の植物群落が見られ、林床にはツシマナナカマドやオキジャクナゲなどが見られます。

全体的にはスダジイ、ヤブツバキ、ウラジロガシなどの照葉樹林の中に北方系の針葉樹が生育している感じです。

しかし、それだけではなく、冷温帯落葉広葉樹林（リョウブ、イヌシデ、ウリハダカエデ、イタヤカエデ、・・・）、中間温帯林、亜高山下部林など複雑に入り混じっていて、非常に複雑であり、不思議な様相といえます。














* 大満寺山、鷲ヶ峰の登山ルートは、自然観察モデルコースとして整備されており、ポイントマーク・植物名札も取り付けられています。また、鷲ヶ峰自然観察モデルコースガイドブックも作成されていますので、一人でも隠岐の自然を楽しむことができますと思います。

現在、大満寺山・鷲ヶ峰の自然観察ルートは、隠岐ジオパークの代表的なジオツアーコースとして利用されており、訪れる方も年々増えています。

2-12 隠岐ジオパーク花カレンダー

3~6月















No.1

隠岐ジオパーク花カレンダー		撮影日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ラン科	シュンラン					■								
ユリ科	カタクリ	 3.27				■								
キンボウゲ科	イチリンソウ	 4.12				■								
ボタン科	ヤマシャクヤク	 4. 9				■								
スイカズラ科	オニヒョウタンボク	 4. 9 5. 9					■							
ラン科	エビネ	 5.18					■							
シソ科	ラショウモンカズラ						■							
スイカズラ科	チョウジガマズミ	 4.20					■							
ツツジ科	オキシクナゲ	 5.12					■							
ツツジ科	ユキグニミツバツツジ	 5. 1					■							
ユリ科	エンレイソウ						■							
ユキノシタ科	ウツギ マルバウツギ	 5.27					■							
アブラナ科	ノダイコン	 4.29					■							
キク科	センボンヤリ	 5.12					■					■		

隠岐ジオパーク花カレンダー

		撮影日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
キク科		5. 1				3~5								
スイカズラ科		5.14				4~5								
キク科		5. 1					5~8							
スイカズラ科		5. 7					5~6							
イワウメ科		5.12					5~6							
ユリ科		5.24					5~6							
オミナエシ科		5.24					5~6							
ユリ科		5.18					5~6							
マメ科							4~7							
キキョウ科								6~7						
ナルコユリ (ユリ科)・ハマウド (セリ科) エビネ (ラン科)・ユキノシタ (ユキノシタ科) ハマヒルガオ (ヒルガオ科)							5~6							
ムキロジ科		6. 6						6						
ミズキ科		6.24						6~7						
カヤツリグサ科		7.29							7~8					
ミクリ科		8. 7							6~8					

隠岐ジオパーク花カレンダー

		撮影日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ドクダミ科 ハンゲシヨウ		5. 1	島根県準絶滅危惧NT					6~8			・キツネノカミシリ (ヒガンバナ科)			
スイレン科 コウホネ		7. 1	島根県準絶滅危惧					6~8						
ラン科 ナゴラン		7. 4	島根県固有評価：分布 限界種（北限） 環境省絶滅危惧IA類CR					7						
ラン科 フウラン		7. 4	島根県準絶滅危惧 環境省絶滅危惧II類VU					7						
ミソハギ科 ミソハギ		7.28						7~8			・クガイソウ (ゴマノハグサ科) ・ノカンソウ(ユリ科)			
ウマノスズクサ科 マルバウマノスズクサ		8. 9	島根県絶滅危惧I類 環境省絶滅危惧I B類					7~8						
セリ科 エゾノヨロイグサ		8.26	島根県絶滅危惧I類					7~8						
タヌキモ科 タヌキモ		7.29	島根県絶滅危惧II類VU 環境省絶滅危惧II類VU					7~9			・コオニユリ (ユリ科)			
キキョウ科 ツルニンジン		10.28						7~9						
キク科 ヤブレガサ ニシノヤマタイミンガサ		5. 1	・ダイモンジソウ (ユキノシタ科)					7~10						
カヤツリグサ科 スジヌマハリイ		7.29	島根県絶滅危惧I類 環境省絶滅危惧II類					7~8						
ユリ科 イワギボウシ		5. 1						8~9						
キキョウ科 ツリガネニンジン		10. 3						8~10						
リンドウ科 ツルリンドウ		10.24						8~10						
リンドウ科 センブリイヌセンブリ		10. 3	島根県絶滅危惧I類 環境省絶滅危惧II類					8~10						
トチカガミ科 ミズオオバコ		9. 3	島根県準絶滅危惧NT					8~9						

隠岐ジオパーク 花カレンダー

	撮影日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ユキノシタ科 イリフネショウマ		9.19									■		
ラン科 ツチアケビ		9.19									■		
キク科 ダルマガク		10. 8									■		
ゴマノハグサ科 トウテイラン		10. 9									■	■	
キク科 オオバノアザミ		10.21									■	■	
キク科 キッコウハグマ		10.24									■		
ミカン科 ツルシキミ		10.24									■	■	
キク科 オキノアブラギク		11. 4										■	■
ユリ科 ヤマラッキョウ		11. 4									■		

海藻 クロキツタ (国：天然記念物)

クロキツタ													
カワモズク		6.6									■	■	

・ガガイモ
・キジョラン (ガガイモ科)

7～10

2-13 隠岐の固有動物

●オキサンショウウオ 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 島根県：絶滅危惧Ⅱ類。成体



の全長は約13cm、体色に黄味がかった斑紋が出る個体もありますが、ほぼ黒色の個体もあります。島根県内では隠岐(島後)の溪流から山地にかけて生息しています。山地に棲む流水性の種類のサンショウウオですが、海岸近くから高地まで広く分布しています。

2005年には、絶滅が危惧される約790の希少種の「最後の生息地」として世界各国の595カ所が特定され、日本でも9カ所特定されましたが、オキサンショウウオの生息地として隠岐諸島も含まれました。町指定天然記念物

●オキタゴガエル 島根県：絶滅危惧Ⅱ類。本亜種は体

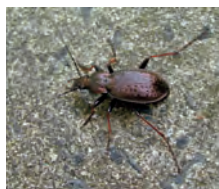


長約5cmで、タゴガエルとの差はかなり大きいですが遺伝学的には非常に近いといわれています。本亜種は島後のみに生息し、他の3島にはいません。深山の湿度が高くて、溪流が近くにある環境に生息しています。生物が離島において形態的な変異を起こす原因を研究する材料としての価値が高いといわれています。



●オキアオハナムグリ アオハナムグリは南西諸島を除く各地に分散する種で、背面は緑色で変異は少ないが、五島列島と種子島に分布するものは赤色を呈し別亜種とされています。本亜種は島前にのみ生息し、体長16.6～19.2mmで背面は藍黒色を呈し、他の地域とは異なっています。島後は緑色の原名亜種です。

●オキオサムシ 体長20～24mmで背面は赤銅色をしており、下面は黒色で光沢があります。島前、島後に分布していますが、島後では山地よりに分布し、島前では海岸部での生息も確認されています。



●オキマイマイカブリ

体長38～45mmで全体的に黒色ですが、時に青味を帯びます。隠岐に産するものは前胸背がやや短く、上翅端の突起が短いのが特徴です。島前、島後に分布し、人工・天然林内およびその周辺部に生息しています。



- オキナガゴミムシ 体長17～18mm。黒色で光沢があり前胸背はやや長めで、島根県益田市匹見町から記載されたエサキナガゴミムシによく似ているが、腹部末端節後半があまり深くへこまず、後縁が波曲しないことで区別できます。島後の都万および大満寺山で採集された個体により種が記載されました。



- オキチャイロコガネ 体長7～8mm。赤褐色でやや光沢を帯びていて、頭部と腹部は黒味がかっています。島後にのみ分布しています。



●オキツヤヒサゴミムシダマシ

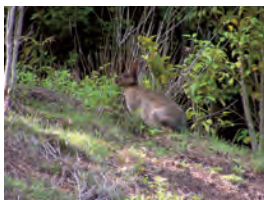


体長13.3～15.2mm。黒褐色で全体にやや扁平で細長のずん胴型に見えます。成虫は朽木でみられ、幼虫も朽木を食べます。本種はツヤヒサゴミムシダマシ群の中でも特化した個体群で島後のみに分布しています。これまで情報が少なく詳しい生息状況は不明です。

●オキヤコンオサムシ



●オキノウサギ



●オキスミスネズミ



●オキアカネズミ



●オキヒミズモグラ



●オキヒメネズミ



2-14 隠岐の蝶



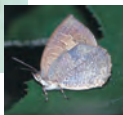
◆隠岐を代表する蝶の解説



♂

●ルーミスジミ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 島根県：絶滅危惧Ⅰ類。翅長13～15mm。島根県内では島後が唯一の生息地で、個体数も減少傾向にあります。島後の生息地は、全国各地の生息地と比較して規模はごく小さく、近年の道路工事による伐採などで危機的状況に陥っています。



♀

●キリシマミドリシジミ

島根県：絶滅危惧Ⅱ類。翅長20～21mm。隠岐諸島では1975年に門脇久志氏によって確認されました。島後ではルーミスジミと混生していますが、大規模伐採などによりアカガシ林が減少傾向にあり、憂慮すべき状態になっています。

♀



♂



●カラスシジミ 島根県：絶滅危惧Ⅱ類。翅長15～19mm。島根県内では西部、東部、隠岐諸島で記録がありますが、開発などの伐採で絶滅していると思われる場所もあります。隠岐諸島は地理的変異をもつ独特の個体群が確認されていますが、薬剤散布の影響を受けていると思われる。

●ホシミスジ 島根県：準絶滅危惧（NT）。翅長26～32mm。ゆるやかに飛翔しウツギなどに訪花します。隠岐全島で、おもに海岸部の崖や河川下流域の崖地が生息地となっています。きわめて特異な個体群であり、保全が必要とされています。



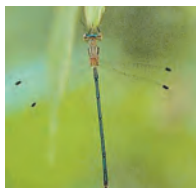
●キバナセセリ 島根県：絶滅危惧Ⅱ類。翅長21～22mm。吸水時には、自分の排出液を吸う吸い戻し行動がよく見られます。島後では海岸に近いところに生息地が見られますが、空中散布等により影響をうけていて、隠岐諸島を除けば島根県内の記録が古く、現在では生息していないと思われます。



2-15 隠岐のトンボ

日本には約200種のトンボが生息しており、島根県では約90種、隠岐諸島では現在56種が記録されています。島後には溪流が多く他の離島には生息しないムカシトンボやオオカワトンボが多く見られ、離島としてはまれなアオヤンマも生息しています。

◆隠岐を代表するトンボの解説



●コバネアオイトトンボ 環境省：絶滅危惧Ⅰ類 島根県：絶滅危惧Ⅰ類。全長34～42mm。金緑色あざやかな中型のイトトンボで、国産のアオイトトンボ属4種中最小種です。県内では東部の平野部と島後に集中しています。現在の確実な生息地は島根県松江市鹿島町内のため池や島後の油井の池などきわめてわずかです。

●コサナエ 全長37～44mmの小型のサナエトンボです。日本特産種で、島根県内では県東部では平野部から山間地まで普通に見られますが、中西部や島後では産地が局限されています。



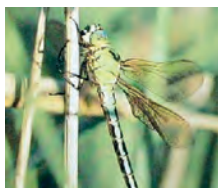
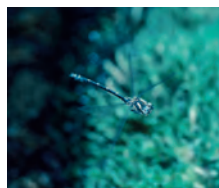
●オオカワトンボ



全長48～62mmでオス、メスとも翅に多型現象が見られます。島根県内では、本土側では島根半島を除くほぼ全域に分布していますが、隠岐諸島では島後のみに分布しています。本種が単独で生息する島後では、上流域のニシカワトンボの生息圧がかからないためか、上流から下流まで連続して本種が見られます。

●ムカシトンボ

全長47～52mmで、幼虫期間がきわめて長く、6、7年におよぶとされています。島根県内では、中国山地沿いの源流域を中心に、島根半島部や離島である隠岐(島後)にも分布しています。



●アオヤンマ 全長65～77mm。全身黄緑が鮮やかで、一見して他のヤンマと区別できます。島根県内では抽水植物が繁茂する池沼やクリーク等に生息し、かつては平野部でも普通に見られました。隠岐諸島では現在も比較的多産しています。

2-16 油井の池自然観察コース



油井の池全景



油井の池の位置

油井の池は、隠岐島後の西部に位置し標高約50mに凹地が広がっています。ほぼ丸い池の直径は250mほどで、多くは湿性草原が覆い一部に水域も見られます。池の中央部にはオオタチヤナギがリング状に生えていますが、この木が生えているところから中央までの草木全てが浮島になっています。この池には、多くの水草が繁殖する湿地という環境から貴重な動植物も多く生息しています。

また、池の周囲は火山岩（アルカリ流紋岩、粗面岩）から成り、島が形成された活発な火山活動時（約500万年前）の火口跡ではないかといわれていましたが、最近の調査によって大規模な地すべりの頭部に水が溜まり出来た池ということが判明しました。さらに、池の周囲の外側は日本海

と火山活動によって形成された急斜面の崖地に囲まれ、全体的に静かなたたずまいを呈しているため、風光的にも自然環境的にも優れた地域です。

島根県の自然観察モデルコースにも指定されており、エコツアーや環境学習にも利用されています。

【油井の池散策マップ】



◆油井の池のトンボ解説

島後には約50カ所の池が点在し、たくさんのトンボが生息しています。中でも油井の池には現在33種類のトンボが確認され、最も多くの種類が生息する貴重な湿原となっています。近年姿が見られなかったコバネアオイトトンボが復活し、これまでまれにしか見ることのできなかった、アオヤンマも多数確認されるようになりました。

また、南方飛来種のハネビロトンボや、数年前からはハラビロトンボも確認できるようになりました。これらは池の保全に取り組んでいることに関係すると思われます。



ハラビロトンボ

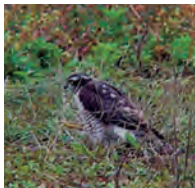
上の写真には、油井の池に棲んでいるトンボ32種となっていますが、前記しましたように、現在ではハラビロトンボも確認され33種類となっています。

2-17 隠岐の野鳥

隠岐諸島には、国の特別天然記念物のカラスバトが生息しています。近年の調査では、島前と島後の採餌行動などに相違が確認されており、それぞれの島の環境の相異などが要因と思われる、今後の興味深い調査テーマにもなると思われます。隠岐諸島では、現在までに約200種の記録がありますが、渡りの時期には未記録種も確認されるようになっていきます。今後調査が進めば、実態が把握でき、隠岐が貴重な中継ルートであることが確認されると思われます。



◆隠岐の野鳥解説



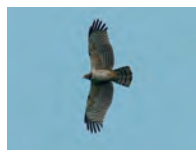
●**オオタカ** 環境省：準絶滅危惧(NT) 島根県：絶滅危惧Ⅰ類。本亜種は、本州・四国のほか、北海道から千島列島・サハリンに分布しています。全長はオスで約50cm、メスは56cmのカラス大の猛禽類で、森林内や森林に接した草地や農地に生息しています。最近になって数力所で営巣地が発見され、島根県内でも繁殖していることが明らかになりました。

●**ハヤブサ** 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 島根県：絶滅危惧Ⅰ類。ハヤブサは、ほぼ全世界に分布しており、このうち亜種ハヤブサは東アジア北部と日本に分布しています。島根県には留鳥として生息し、人の近寄れない海岸や山の断崖の岩棚に営巣しています。島根半島や隠岐諸島の海岸部を中心に、10ヶ所以上の繁殖地が確認されています。



●**カラスバト** 環境省：準絶滅危惧(NT) 島根県：絶滅危惧Ⅰ類。国の天然記念物です。島根県で確実に繁殖しているのは隠岐諸島のみで、島後や西ノ島などの大きな島のほか、大波加島や大森島などの無人島にも生息しています。生息地は照葉樹が生い茂った比較的人の出入りが少ない森林などです。

●**ハチクマ** 環境省：準絶滅危惧(NT) 島根県：絶滅危惧Ⅰ類。ハチクマの全長はオスで約57cm、メスで約61cmとトビと同じくらいか少し小さい程度の猛禽類です。姿はクマタカに似ていますが、本種の方が翼の幅が狭くなっています。島根県内では丘陵地から山地にかけて生息していますが、その個体数は多くありません。



●**コウノトリ** 環境省：絶滅危惧ⅠA類。全長約110cm。体は白くて翼の風切羽が黒いのが特徴です。国内ではまれな冬鳥として、河川や湖沼などの水辺や広い農耕地などに生息します。隠岐(島後)では、2001年に越夏した記録がありましたが、2005年10月22日に再度渡来し越冬しました。このコウノトリは、国内に渡来した野鳥種3羽のうちの1羽で、2005年に産まれた幼生だと思われます。2006年10月には滞在1年を記念して特別住民票が発行され、『隠岐の島 幸』(おきのしまさち)と名付けられました。

2-18 危険な陸上生物

◆危険な動物

自然界には、私たちを楽しませてくれる生物だけがいるわけではありません。中には人間の命まで奪ってしまう動物もいます。隠岐の豊かな自然を楽しんでいただくためにも、危険な生物についての知識を事前に得ておくことが必要です。

また、山登りなどを行う場合には、マムシに咬まれた場合に毒を吸い出す「毒吸い器」などの器具および医療品を携帯することをおすすめします。

■スズメバチ

- 1 巣への接近に対する警戒行動** 巣に近づくと、巣の出入口や表面にいるハチが警戒しだすと共に、一部のハチが巣を離れて周辺を飛び回ります。
- 2 巣への接近に対する威嚇** 巣の周辺の数mから10数mの範囲内を飛び回っていた偵察ハチが近づいて大きな羽音をたてて飛び回り、カチカチという威嚇音を発します。これはスズメバチ特有の警告です。
- 3 巣への間接的刺激に対する攻撃** 巣に振動を与えたりすると、威嚇中のハチや巣から飛び出たハチがまっすぐ飛び掛ってきて刺します。これは、既に巣内に警戒フェロモンが撒き散らされているためなのです。
- 4 巣への直接的刺激に対する攻撃** ハチは威嚇なしに直接飛んできて刺します。興奮の激しい場合は噛み付いて離れず何度も毒針を突き立てます。

一口メモ

ハチに追いかけられたら

- 1. 動かずにじっとしている** ハチは動きの遅いものや静止しているものをうまく判別できない。(ケースバイケース)
- 2. 地面に伏せてかわす** ただし、いったん攻撃に転じたハチはいくら振り払っても執拗に攻撃してくるため、巣の近くに留まるのは非常に危険。



* 野外でよくスズメバチが単独で飛んできて、人の周りを飛び交うことがありますが、この場合、おどし攻撃ではないので追い払ったりせずじっとしててください。そのうち飛び去って行きます。

■ マムシ

大満寺山や鷲ヶ峰一帯は非常にマムシの多いところです。夏には谷川沿いの涼しい場所に多いのはよく知られていますが、尾根筋も涼しい環境にあり注意が必要です。マムシをよく見かける場所は、比較的明るい開けた遊歩道で、もし見かけたら2mくらいの長い木の枝などを探し、枝先で軽く背中やしっぽを触り逃がして下さい。強く叩くと、その場でとぐろを巻いて居座ったり、ジャンプしたりして向かってくるので注意してください。隠岐に生息する毒ヘビは、マムシとヤマカガシの2種います（下表）。

🔴 マムシに咬まれたら

連続して咬まれる場合がありますので、直ちに逃げましょう。咬まれたのがマムシであれば2本の牙の跡がはっきり残りますので、マムシかどうかを確認しましょう。咬まれた所を安静にするのが重要です。また患部を少し高い位置に保つことも有効と言われています。専用の毒吸器があれば吸い出すのが賢明です。口で吸い出す場合、口内に傷がある人などは注意が必要です。タオルなどで患部から10cmほど心臓に近い部分を縛る場合、指が1～2本通る程度にして血行を止めないことに注意が必要です。マムシもヤマカガシも強い毒を持ちますが、おとなしく自ら攻撃してくることはありません。

マムシ	ヤマカガシ
<p>【特徴】</p> <p>頭は三角で、からだに円形の模様がある。尾は短く、からだがずんぐりしている。</p>  <p>【体長】</p> <p>1m以下</p>	<p>【特徴】</p> <p>四角い黒斑があり、からだの前の方は赤みがかった。首筋は黄色い。奥歯に強い毒がある。</p>  <p>【体長】</p> <p>1m以上</p>

◆危険な植物




野外における危険な植物には、食べて中毒を起こすもの、触れて皮膚炎になるもの、花粉症の原因になるものなどがあります。このうち、もっとも事故例の多いのが皮膚炎です。なかでも、ウルシの仲間によるアレルギー性皮膚炎は、遅延型接触皮膚炎と呼ばれ、1～2日後に皮膚炎が起こります。この皮膚炎は、よく「かぶれる」といった言葉で表現されます。島根県内で、この「かぶれ」の原因植物の筆頭はツタウルシとヤマウルシです。

■ツタウルシ

ツタウルシは、ツル性の落葉木で、樹木や岩などに寄りかかるようにして木根を出してはい上がります。葉はだ円形の3枚の小葉からなり、ツタのように一つになることはありません。ウルシ科の植物で、野生のウルシの仲間の中では、かぶれる毒成分の強さがもっとも強いです。

■ヤマハゼとヤマウルシ

かぶれる木として、ハゼやウルシがあることは多くの人が知識として知っていますが、実際にそれらを見分けることができる人は多くありません。島根県内で、自然状態でよく見られるこれらの仲間には、ヤマハゼ、ハゼノキ、ヤマウルシの3種があります（下表）。

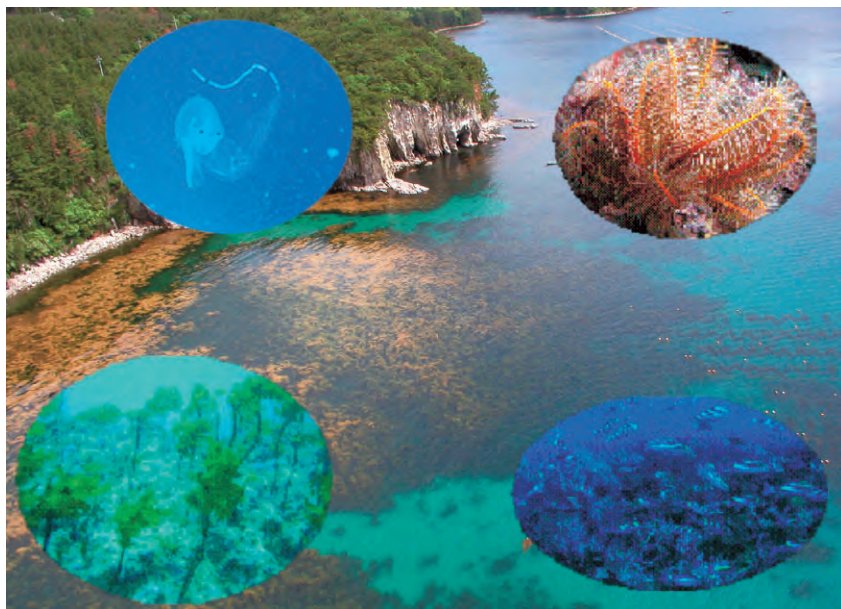
ヤマハゼ	ハゼノキ	ヤマウルシ
小葉は楕円形または卵状。 長さにかんりの差がある。	小葉は広批針形または狭長楕円形。 4～10cm、4～7対、小葉の 長さほとんど差がない。	小葉は卵形または長楕円形。 6～12cm、6～8対、小葉の 長さにかんりの差がある。
葉の両面に短毛が密生。	葉は両面無毛でやや光沢有り。	葉の両面に短毛あり。特に裏面 の脈上に多い。
裏面は緑白色 果実は扁球形で黄色褐色の光沢 あり。	裏面は粉白色 果実は扁球形で白い光沢あり。	裏面は淡緑色 果実は扁球形で黄色な毛を密 生。
		

第3章 隠岐ジオパークの自然環境について（海洋）

3-1 隠岐の海洋生物

島根半島の40-80km沖合に位置する隠岐諸島は、気候や海流の影響を受け、北方系や南方系の生物が見られる等、本土とは異なった生物環境を有しています。砂地海底付近の岩礁にはアミメサングやニホンアワサング、ククメイシモドキなどの造礁性サンゴが生息しています。静穏な湾内の砂地海底には、アマモやタチアマモなどの大規模な海草群落が成立しています。このような藻場には、クロダイやオハグロベラ、メバルなどの魚類をはじめとする多くの動植物が生息・生育しています。

2004年9月2日には隠岐周辺沿岸が、国際的に重要な湿地の保全を目指すラムサール条約の登録湿地の候補地に選定されました。外海域の湿地として藻場が選ばれたのは、我が国54の候補中唯一のケースです。隠岐沿岸では、固有の文化が示す動植物や多様で豊かな自然が残されていますが、開発等により我が国の藻場が減少の一途を辿る現状にあって、隠岐の多様で広大な藻場はきわめて重要な存在となっています。



◆海的环境

自然豊かで広大な隠岐の海。マツバガニ・シロバイ・シロイカ・アワビ・・・この隠岐の海の魅力はこのような水産物だけではありません。

静穏な内湾の海底を棲みかとするウミホタルは幻想的なミルキーブルーの発光物質を体外へ放出します。秋の限られた期間には、海面を発光しながら輪を描くように遊泳する発光ゴカイ。緑色のイルミネーションが綺麗な柔らかいサンゴの仲間であるウミサボテンなど、隠岐には様々な海洋発光生物が生息しています。

また、隠岐沿岸は全国的にみてまだ開発が進んでいないため、多くの自然海岸が残っているのも隠岐の特徴のひとつでしょう。海岸にはホンダワラ類やアマモ類、クロメなどの海藻が繁茂し、広大な藻場を形成しています。

さらには、海藻唯一の天然記念物であるクロキツタという貴重な緑藻も容易に見ることができます。

このように、隠岐沿岸の海にはたくさんの自然が残っています。

気軽な海岸散策、もしくはスキン・スクーバダイビング、シーカヤックなどで隠岐の海を体験してみてください。きっと満足されると思います。

ただ、私たちはこの広大な自然環境を後世に伝えることも考えなければなりません。ゴミの不法投棄、ポイ捨てや必要以上の採取など自然環境の破壊につながるような行為はしないようお願いします。

■ラムサール条約

水鳥の生息地として国際的に重要な湿地およびそこに生息・生育する動植物の保全を促し、湿地の適正な利用を進めることを目的として、1972年2月2日、イランのラムサール（カスピ海沿岸の町）で開催された「湿地および水鳥の保全のための国際会議」において作成されました。

■湿地の定義

天然、人工を問わず、沼沢地、湿原、泥炭地または水域をいい、低潮時における水深6mを超えない海域を含みます。

このことにより2004年9月に隠岐島周辺沿岸域がラムサール条約の候補地に選定されたのです。

2010年2月現在、ラムサール条約の締結国は159ヶ国にのぼり、登録湿地数は1,886ヶ所でその総面積は約185万平方キロメートル。日本では37ヶ所131,027haとなっています。

3-2 日本海の成り立ち

◆昔は湖だった日本海



11万年前の日本海

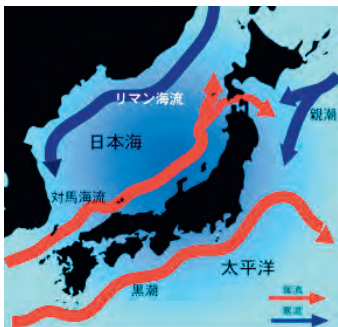
隠岐の海洋環境の特徴を知っていただくために、日本海の成り立ちとその特徴について解説します。

今から4千万年前には、まだ日本海はなく、日本列島もユーラシア大陸の一部でした。2千万年前になると、火山活動の影響によってユーラシア大陸の一部が裂けて東へと移動し、少しずつ日本列島が形成されてます。

上の図のように、11万年前では日本海は大きな湖でしたが、約1～2万年前に日本列島は津軽海峡と対馬海峡で大陸と切り離され、ようやく日本海が現在のような形になります。日本海には、この海にしか生息しない固有種がたくさんいます。この理由としては、日本海がもともと湖だったため、生物たちは隔離された環境に適応しながら種族を増やしていったことがあげられます。

また、日本海に生息する生物の特徴として、各大洋のように特異な器官をもち最初から深海に適応したグループはわずかしきありません。日本海の深海生物のほとんどは、本来沿岸性だった生物が次第に深海の環境に入り込んだ特異な器官をもたないグループなのです。

◆日本海の流れと日本海固有水



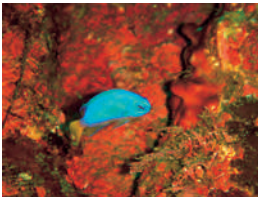
日本海は大きく分けると対馬・津軽・宗谷・間宮海峡の4海峡で太平洋と連絡されていますが、最も深い対馬海峡でも水深140mしかなく、間宮海峡にいたっては水深30m～40mといわれています。このように日本海は隔離された海のため、太平洋側と比べて干満の差が少ないのです。

日本海を流れる海流は、南からの対馬海流（暖流）と北からのリマン海流（寒流）がありますが、日本海の水の多くは対馬海峡から流入する暖水であり、そのほとんどが津軽海峡から流出します。

(エチゼンクラゲが日本海を北上し、津軽海峡から三陸沖へと移動するのは、対馬海流に関係するのです。)

また、北から流入するリマン海流は、寒水域として沿海州などの大陸側の北半分を占めており日本列島に直接影響することはありません。このため、日本海では初夏から晩秋の間は対馬海流の影響が強く表れ、隠岐諸島周辺部でも熱帯の海に棲む生物が見られるのです。しかし、冬場になると大陸から吹く寒冷的な季節風と、日本海の深層に存在する日本海固有水（冷水塊）の影響によって水温が低下するため、夏場に暖流によって運ばれてきた熱帯性の生物は死んでしまいます。この現象のことを死滅回遊と呼び、死んでしまう魚たちのことを死滅回遊魚と呼んでいます。

死滅回遊する魚たち



ソラスズメダイ

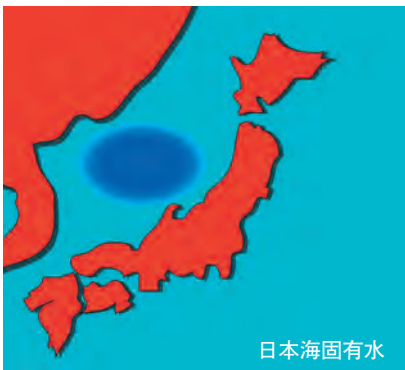


ミノカサゴ



ハコフグ

コラム4 日本海固有水とは



日本海は入り口が狭く浅いのにくらべて、奥が広くしかも深くなっています。（日本海の中央部の水深は3,000m以上あり、最深部では3,717mあります。）

このため、中央部付近の水深が深い部分にある海水は、暖流の影響を受けることもなく海水の入れ替わりもほとんどないので、一年

中低水温を保った海水が停滞しています。

この水深が300m以上にあり、水温1℃の停滞した海水のことを日本海固有水または日本海固有冷水と呼んでいます。

コラム5 日本海は太平洋と比べて干満差が少ない

日本海側の潮汐状況は、太平洋側と完全に異なっています。干潮時刻と満潮時刻が太平洋側とほぼ完全に反転し、干潮と満潮との最大水位差も30cm程度しかありません。太平洋側では干満の水位差が2m以上あることを考えるとほとんどないといっているのかもしれませんが。

日本海は海峡によって太平洋とつながっています。太平洋側が満潮の時には対馬海峡において太平洋と日本海で130cmの水位差ができるため、対馬海峡を通して海水が日本海に流入し日本海側が満潮となります。逆に太平洋側が干潮のときには、日本海側より130cm水位が低くなるため日本海の海水が太平洋へ流出し干潮となります。津軽海峡においてはこの水位差が45cmとなります。

日本海の干潮と満潮は、海峡を通して海水が流入、流出することによって、海水総量に変化するために起こることが明らかになっていますが、海峡の幅が狭く流入、流出する海水の量が限られているため、海水総数量の変化が少なく干満の差が小さいと思われます。

また、太平洋側が満潮のときに日本海に海水が流入し、日本海の水位が上昇し始めるので、日本海側と太平洋側とでは満潮時刻に時間差が生じるのです。

コラム6 海藻とは

実際に何を指しているかを考えたとき「海藻」はかなり曖昧な言葉です。「海にすむ藻」といっても、この「藻」が簡単ではないのです。

しかし、古来日本人が「海藻」と呼んできたのは、特に食用となる大型底生海産藻類であって、珪藻や単細胞性の植物プランクトンまでは含まれていませんでした。海産の藻類グループには、緑藻、褐藻、紅藻の主要3グループの他に、少数ながら藍藻類が知られています。

海藻の主要3グループ



緑藻類 (クロキツタ)

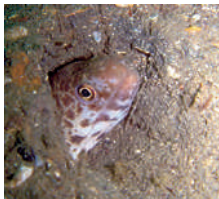


褐藻類 (イソモク)



紅藻類 (カバノリ)

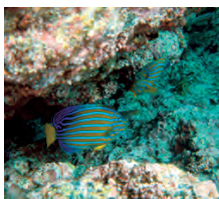
3-3 隠岐の海洋生物の解説



●アミメウツボ

ウツボ科に属し、体長60cmに達します。本種は南日本、インド洋に分布し、日本海においては記録が少ないのですが、隠岐では静穏な湾の砂泥海底に巣穴を掘って生息しています。

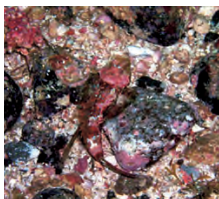
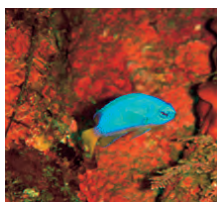
●マトウダイ マトウダイ科に属する魚類で、体長30cmに達します。本種は本州から東シナ海、大西洋などに広く分布し、水深100m前後の海底近くに生息しています。隠岐島後では、冬まれに、水深20m以浅の砂場海底で見られます。隠岐では本種をバトウ、ゴオゴオと呼んでいます。



●キンチャクダイ キンチャクダイ科に属する魚類で、体長は22cmに達します。本種は沖縄を除く相模湾以南、台湾、朝鮮半島、香港に分布し、幼魚と成魚では色彩が著しく異なります。隠岐では夏から秋にかけて、水深10~20mの岩礁域で見られます。

●ソラスズメダイ

スズメダイ科に属する小型の魚類で、体長は8cmに達します。千葉県、新潟県以南、西部太平洋に分布し、隠岐では夏から冬にかけて潮通しの良い岩礁域で見られます。水温が低下する冬には死滅すると思われる。



●ミヤケテグリ ネズツポ科に属する小型の魚類で、体長は8cmに達します。本種は三宅島、高知県柏島、琉球列島などに分布し、隠岐島後では夏から秋にかけて小礫海底で見られます。水温が低下する冬には死滅すると思われる。



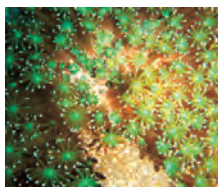
●**ハナハゼ** クロユリハゼ科に属する魚類で、体長は17cmに達します。本種は伊豆大島、千葉県、富山県から奄美大島、朝鮮半島などに分布し、隠岐では水深15m前後のきれいな砂地海底に生息しています。危険を察知するとダテハゼ（写真下）などの共生ハゼの巣穴に逃げ込みます。水温が低下する冬には死滅すると思われるます。

●**ハコフグ** ハコフグ科に属する魚類で、体長は30cmに達します。本種は岩手県から九州南部、台湾に分布し、隠岐では夏から秋にかけて来遊します。体は硬い骨板でできた箱で覆われており、体の表面から粘着毒を分泌します。水温が低下する冬には死滅すると思われるます。近縁種のミナミハコフグの幼魚も隠岐に来遊します。



●**カワリギンチャク科の一種** 体高2～4cmほどに達します。本科は世界中に生息し、一般には水深100mに生息しています。体壁はオレンジ、縁の色はレモンイエローで、口唇が突出しています。隠岐島後では、水深30m前後の潮通しの良い岩礁域に生息しています。隠岐島の限られた地域では、沿岸に生息するヒメイソギンチャクやヨロイソギンチャク、深海で採集される大型種コイボイソギンチャクなどを食する習慣があります。

●**キサソゴ** キサソゴ科に属する非造礁性サンゴ類で、太平洋側の相模湾では普通に生息していますが、日本海で生息が記録されている海域は隠岐だけです。群体の形状は立木・樹木状で、隠岐島後では水深30m前後の比較的潮通しの良い岩礁域に生息しています。本種の仲間であるイボヤギやオノミチサンゴなどが島根県のレッドデータブックの**準絶滅危惧 (NT)** に指定されています。



●**ニホンアワサンゴ** ハマサンゴ科に属する造礁性サンゴ類です。本種は本州中部から九州の浅海に生息しており、骨格から伸び上がるポリープの先端は白くて美しくみえます。隠岐では水深10m前後の岩礁域に生息しています。



●**アミメサンゴ** ヤスリサンゴ科に属する造礁性サンゴ類です。本種はインド・西太平洋域に広く分布し、隠岐が日本における分布の北限とされています。隠岐では、水深10m前後の岩礁域に生息しています。

●**ゾウクラゲの一種** ゾウクラゲ類は日本近海で2科5属12種が知られています。クラゲという名前が付いていますが、クラゲの仲間ではなく、浮遊性巻貝（軟体動物）の仲間（クリオネの仲間）で魚とよく似た形のゼラチン質の体を持ちます。隠岐島後では春から夏にかけてときどき見られます。



●**キイロウミウシ** イロウミウシ科に属する大型の後鰓類で、体長10cm以上に達します。本種は相模湾から沖縄、紅海、南アフリカに分布しており、本種の記録は今から200年も前に遡ります。背面の縁取りが黒色系なのが特徴で、この他にも隠岐にはニシキウミウシ、ポブサンウミウシ、イガグリウミウシなど、生物地理学上注目すべき種も確認されています。

●**発光ゴカイ** 本種は発光する小型の多毛類で、釣り餌に使うゴカイの仲間です。本属の発光現象はアメリカのフロリダ沖にあるバミューダ島や日本海の富山湾などで記録されています。隠岐島後の静穏な内湾では、秋の夜に輪を描きながら緑色の発光物質を放出する姿を見ることができます。



●**ウミホタル** ウミホタル科に属する小型な甲殻類で、体長3mmに達するカニやエビ、ミジンコなどの仲間です。本種は青森から沖縄の内湾に分布します。発光動物でミルキーブルーの発光物質を体外へ放出する状況は、幻想的で大変美しいものです。夜行性なので昼は海底の砂中に生息しますが、夜はゴカイ類や動物の死体などを摂餌します。隠岐島後では静穏で綺麗な砂泥底に多く生息しており、夏から秋にかけて採集容器を用いて容易に採取することができます。

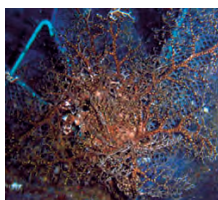
写真提供：小江克典氏



●ムラサキゴカクガニ

コマチガニ科に属する小型のカニ類で、甲幅1cmに達します。本種は相模湾以南に分布しており、ムラサキウニやアカウニに共生し、宿主の裏側の周口部付近に隠れ棲んでいます。甲は額が前方に突出した五角形で、近年隠岐島後でも見られるようになりましたが、水温が低下する冬には死滅するものと思われます。

●ユカリウミシダ ウミシダは名前の通り羊歯植物に似ているところから名付けられましたが、ヒトデやウニ、ナマコなど棘皮動物の仲間です。本種はヒメウミシダ科に属する小型なウミシダ類で、腕の長さは8cm程度です。10本腕と細長くて数のある巻枝が特徴で、短時間ならば左右交互の腕を振って遊泳することができます。本種はこれまでに能登半島、隠岐、沖縄諸島から発見されており、日本固有種とみられます。隠岐島後では、水深10m前後の岩礁域に生息しています。

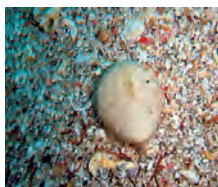


●セノテツルモヅル

本種はテツルモヅル科に属する大型のクモヒトデ類で、相模湾以南の太平洋岸、朝鮮半島南側に分布しています。背面には多数の疣（いぼ）がある個体が多く、隠岐島後では水深20m前後の潮通しの良い岩礁の隙間などに生息しています。

●ヒメカンムリヒトデ タコヒトデ科に属する大型のヒトデ類で、腕の長さは10cm程度に達します。本種は隠岐、奄美大島、沖縄本島、小笠原諸島およびニューカレドニアなどの浅海に分布しており、鮮やかな橙黄色に淡黄色や白色の大きな房が並ぶのが特徴で、腕の数は12～17本です。一般的なヒトデと比べて腕の数が多く、再生中の短い腕を持つ個体が多い。1個体が2つに分裂して繁殖する性質を持っており、隠岐島後では水深10m前後の転石域に生息しています。



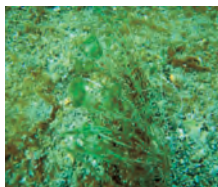


●ネズミブンブク

ブンブクはウニの一種ですが、トゲが短くその形状から心臓ウニとも呼ばれ、一般的なウニのイメージとは異なります。本種はホンブンブク科に属する中型のブンブク類で、体長は8cm未満です。相模湾から鹿児島、沖縄、台湾、フィリピン、スリランカ、モーリシャス諸島などインド・西太平洋域に広く分布しています。背面の棘（とげ）は淡茶褐色で背面ではやや黄色みを帯びています。隠岐島後では水深10m以深の砂地海底中に生息しています。隠岐には本種の他にもヒラタブンブク、オオブンブク、ライオネスブンブク、など多数のブンブク類が生息しています。

●クロキツタ（環境省：準絶滅危惧(NT) 島根県：絶滅危惧Ⅱ類）

イワツタ科に属する緑藻類で、葉の長さは20cmに達します。本種の原産地は中東の紅海で、隠岐では島後と中ノ島、西ノ島に分布しています。クロキツタという名前は、1910年に日本国内で初めて西ノ島町黒木御所前で発見されたことに由来します。紅海周辺のみで生育が確認されていたことから、1922年3月8日に国の天然記念物に指定されました。日本の沿岸海域に生育している海藻約1200種類のうち、国の天然記念物に指定されている唯一の種です。隠岐沿岸では現在のところ島前、島後あわせて13カ所の生育地が確認されています。



●ホソエガサ

カサノリ科に属する小型の緑藻類で全長3cmに達します。本種は本州中部以南、海外ではオーストラリア、フィリピン、ポリネシアなど暖かい海に広く分布しています。貝殻上に生息し、隠岐の西郷湾、蛸木および知夫などの静穏な内湾の砂地海底で見られます。かつてはよく見られたホソエガサも今では絶滅が心配されるようになり、2000年に公表された環境省レッドデータブック「改訂・植物版」では絶滅危惧Ⅰ類に指定されています。

●ヒナカサノリ カサノリ科に属する小型の緑藻類で、本種は本州太平洋岸南部、九州、南西諸島などに分布しています。日本海では隠岐が北限です。隠岐島後沿岸では、水深10～20mのシルトを含まないきれいな砂地海底の礫上の無節サンゴモに生育します。





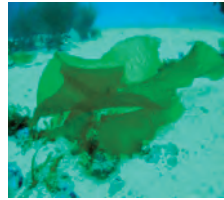
●ツルアラメ

コンブ科の属する褐藻類で日本海特産です。本種は北九州から北海道南部、朝鮮半島などの対馬暖流域に分布し、水深10m以深の岩礁域に群落をつくっています。匍匐根で岩盤に固着し、根の先端に娘株を形成し栄養繁殖を行います。

●クロシオメ

コンブ科に属する褐藻類で、本種は本州太平洋岸中部と日本海南部に分布しています。水深20m以深に生育する稀産種であり、十分な知見が得られていません。茎は匍匐し多年生で、葉は1年生です。隠岐近海では採泥器による藻体の採集が記録されています。

●アオワカメ コンブ科に属する大型の褐藻類で、本種は北海道南部、本州太平洋岸中部、九州、本州日本海岸に分布しています。本種の分布域は広いが、極めて局所的にしか見られません。これは生育水深が深いため、浜辺に打ち上げられた藻体によって分布域が確認されてきたことが一つの原因となっています。隠岐沿岸では水深15m以深に生育しています。

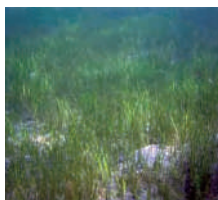


●アマモ

隠岐沿岸は、海草が生育している貴重な場所です。海草はホンダワラ類やコンブの仲間である海藻とは異なり、花も咲くし種も実らせる種子植物で、アマモ科に属する海産顕花植物（海草）です。本種は、北半球温帯域から亜寒帯全域にかけて分布しています。



アマモの種子



●コアマモ

アマモ科に属する小型の海産顕花植物（海草）です。本種は韓国、琉球列島から北海道までと広範囲に分布しています。草体であり、葉は扁平なりボン状で、幅1.5～2mm、長さは50cmから1mに達します。

●**タチアマモ** アマモ科に属する大型の海産顕花植物（海草）です。本種は本州中、北部と朝鮮半島南部に分布する世界最大の海草で、三陸の海岸では7mを超える草丈のものが記録されています。本種の分布地は減少しており、2000年に公表された環境省レッドデータブック「改訂・植物版」では**絶滅危惧Ⅱ類（VU）**として報告されています。



●スゲアマモ

アマモ科に属する海産顕花植物（海草）で、本種は北海道、本州中部・北部、朝鮮半島、中国東北部などに分布しています。これまでに紹介した海草の形態とは異なり、地下茎は伸長せず群がって生えるのが特徴です。

●**ウミヒルモ** トチカガミ科に属する小型の海産顕花植物（海草）です。本種は日本において、石川県以南の日本海沿岸、中部地方以南の太平洋沿岸、瀬戸内海沿岸および南西諸島沿岸に分布しています。現在日本で確認されているウミヒルモの仲間は、ウミヒルモとヒメウミヒルモ、オオウミヒルモの3種類です。隠岐近海において、アマモ場の周辺を観察するとウミヒルモが見られます。アマモよりもやや流動性があり不安定な場所に生育し、アマモ場の縁辺部の砂地海底に群落を形成することが多い。



コラム7 ウミホタルとヤコウチュウ

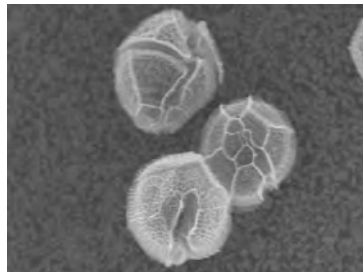
夜の海は暗くなんだか不気味は感じがします。しかし、目が慣れてきたころ夜空を見上げると落ちてきそうなほどの星が輝き、黒い海をのぞき込むとなんだかボワッと青白く光っている生き物がいます。その正体はミジンコに似た体長約3mmのウミホタルという生き物です。

発光生物の代表種といえば陸上に棲むホタルですが、ホタルにも負けず劣らずの発光生物「ウミホタル」が隠岐の海にも生息しています。夏の夜、陸上から海底を覗くと、青白い光雲をたなびかせながら優雅に泳ぐウミホタルの姿を観察することができますが、とても幻想的で感動します。

多くの人がウミホタルとヤコウチュウを混同しているようです。夏の夜、波の動きにあわせて海面で青白く（または緑色のような）チカチカと光っている生物はヤコウチュウで、海中または海底付近で青白く光っている生物がウミホタルです。また、ウミホタルはカニやエビ、ミジンコの仲間であらゆる甲殻類なのに対して、ヤコウチュウは単細胞の原生生物なのでこれら2種の生物はまったく異なった生物なのです。



ウミホタル



ヤコウチュウの顕微鏡写真
(写真提供：小江 克典氏)

■その他の発光生物

隠岐にはウミホタルの他にもいくつかの発光生物が生息していますが、海洋発光生物の生態や発光の意味合いなどはまだ解明されていません。



マツカサウオ



発光ゴカイ



ウミサボテン



ヒカリウミウシ

3-4 危険な海洋生物

海岸散策や磯観察、ダイビングなどを行う際には危険がつきものです。一説によると、人間に対して有毒性を示す海洋生物は数千種いると言われていす。被害を未然に防ぐためにも最低限の知識をもっておく必要があります。海遊びを行うときには以下の点に気を付けてください。

- ・生物は自己防衛と捕食のために毒を持っています。生物をむやみに触らないように心がけましょう。
- ・サンゴやイソギンチャク、クラゲなど刺胞動物の触手には毒があります。触れたり接近すると刺されることがあります。
- ・磯を歩く際には、靴底が厚く（フェルト底など）足首までを覆う靴を履きゆっくりと歩きましょう。（貝やオコゼのトゲは、ビーチサンダルやマリンスーツを突き抜けます。露出する足の側面も危険です）
- ・アレルギー体質の方や心臓疾患のある方は、さらにこれらの対処方法以上の注意と療法が必要です。

* 処置方法については、経験者が適切な判断のもとで行うこと。薬などの投与は医師の指示に従うこと。

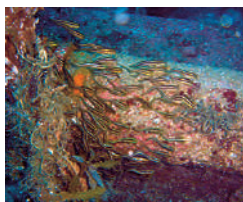
酢酸やアンモニアは原液ではなく、食酢やアンモニア水溶液などの薄められたものを長時間使うこと。



●**アカエイ** ムチのような尾の付け根には毒を持った大きな棘があります。多くは釣り上げたときなどの捕獲時に刺されます。普段は水深のある砂地に生息し、接近すると逃げるため刺される可能性は高くはありません。

【症状】 刺されるとしばらくして患部の激痛・壊死、頭痛、めまい、吐き気、不快感、四肢麻痺などの症状が現れます。

【処置】 傷口を流水で洗う。圧迫止血を行い、熱めのお湯にタオルを浸し患部にあてる。



●**ゴンズイ** 体長15~25cmの大きさで、背ビレや胸ビレに毒があります。ほとんどの場合はこの魚を釣り上げたときに刺されます。釣り上げた際、知らない魚は素手で触らないように心がけましょう。ゴンズイなら痛だけで済むという認識は間違いです。和歌山

県では毒性による心臓麻痺での死亡例が報告されています。

【症状】 しばらくして、患部に痛みと腫れる症状が現れます。毒の棘による刺し傷は患部の激痛、腫脹、しびれ、麻痺などの症状が現れます。

【処置】 傷口を流水で洗い、素早く消毒をする。毒トゲの場合は毒を絞り出す。熱めのお湯にタオルを浸し患部にしばらくあてる。



●**アイゴ** 体長30cm以上に成長し、背ビレや胸ビレに毒があります。ゴンズイ同様、ほとんどの場合はこの魚を釣り上げたときに刺されます。

【症状】 しばらくして、患部に痛みと腫れの症状が現れます。毒の棘による刺し傷は患部の激痛、腫脹、しびれ、麻痺などの症状が現れます。

【処置】 傷口を流水で洗い、素早く消毒をする。毒トゲの場合は毒を絞り出す。熱めのお湯にタオルを浸し患部にしばらくあてる。



●**ハオコゼ・オニココゼ** 背ビレ・腹ビレ・尻ビレのトゲに強力な蛋白毒があり、刺されると激しく痛み医療機関での治療が必要となります。一般にオコゼと呼ばれ良く知られた毒魚です。隠岐沿岸では普通にみられ、水深が浅い岩礁域や砂泥海底に生息しています。あまり活発には泳がず岩の表面や海底でじっとしていることが多いため、海水浴などで気付かずに踏んだりして被害に遭うことがあります。傷口を水でよく洗い、毒トゲの粘膜・表皮などの異物を取り除き、出来るだけ毒を吸い出すか絞り出すようにしましょう。

【症状】 傷は小さいが、強烈な痛みがあります。しびれや全身麻痺、発熱、嘔

吐、発汗、頭痛、呼吸困難などの症状が現れます。

【処置】 毒を絞り出す。熱めのお湯にタオルを浸し患部にあてる。(熱めのお湯に30～60分つける)



●**ミノカサゴ** 本種は背ビレ、胸ビレに毒がありますが、攻撃してくることはごく稀で捕獲しようとしたときに刺されることが多いです。水温が低下する冬には死滅するものと思われます。

【症状】 傷は小さいが、強烈な痛み、しびれや全身麻痺、発熱、嘔吐、発汗、頭痛、呼吸困難などの症状が現れます。

【処置】 毒を絞り出す。熱めのお湯にタオルを浸し患部にあてる。(熱めのお湯に30～60分つける)

●**クラゲ類** **アンドンクラゲ**：日本ではハブクラゲに次いで刺されると危険なクラゲとされています。刺されると“ビリッ”と電気が走ったかのような痛みを感じるため電気クラゲとも呼ばれています。隠岐では8月の下旬になると岸边近くに現れ、夏の終わりを知らせます。普通に泳いでいるときには16cmほどですが、ときには30cm以上にも伸びる4本の触手が持つ毒はかなり強く、このクラゲが出てくると海水浴もできなくなります。



エチゼンクラゲ：本種も毒はあるものの、アンドンクラゲやカツオノエボシなどと比べると強くはありません。日本近海に発生するクラゲの中では最大で、傘の直径が1mを超えるものもいます。その大きさゆえに、成体になったものは他種のクラゲと間違えることはほとんどありません。

東シナ海で生まれると考えられており、対馬海流に乗って日本海を北上し、一部は津軽海峡を抜けて太平洋側でも見られます。最近では、定置網などの漁獲施設に及ぼす被害が多く発生しており、エチゼンクラゲ対策が各地で研究されています。一部地域では、対策として食用として加工しているところもあります。

カツオノエボシ：長い触手には、魚などを捕らえて食べるための強烈な毒を備えた刺胞をもち、人間にとっても危険なクラゲです。烏帽子のような形をした

浮き袋の下に、数メートルにも達する青く長い触手があり、一見、青味がかったビニール袋に似ています。南方系のクラゲで、本州の太平洋岸にカツオが到来する頃に、海流に乗って南海からやってきます。日本海にはあまり来遊しません。

【症状】 クラゲの毒はスズメバチと同じで、アナフィラキシー反応が発生することが考えられています。これは、一度刺されると体に抗体が出来て、二度目に刺されたときに、その抗体によって直後に激しいアレルギー反応が発生します。当然個人差があるので、問題のない人もいると思われるのですが、カツオノエボシなど毒性の強いものに刺された経験がある人は、二度目に刺されるとショックで呼吸困難になり、パニックとなって溺れる可能性がありますので注意が必要です。

【処置】 触手を真水で洗うと毒針を発射することがあるので、海水を使って触手を洗い流し取り除きます。毒によって皮膚が炎症しているので、それを抑えるために氷水で冷やしながら病院に行くようにしてください。



●**イソギンチャク類** イソギンチャクは触手に刺胞毒を持つ刺胞動物の仲間で、岩礁域や砂地海底に生息しています。スナイソギンチャクは水深5m以深に多く、主に夜間触手を伸ばしています。隠岐に分布するイソギンチャク類の中では、スナイソギンチャクの毒

がもっとも強烈です。

【症状】 激痛、腫れ、潰瘍、強いかゆみ、吐き気、みみず腫れや水疱、頭痛などの症状が現れます。

【処置】 こすらずに真水や酢をしばらくかけ続けてください。



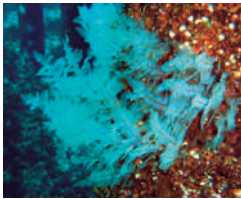
●**ウニ類** アオスジガンガゼやガンガゼは殻径が6～7cm程度で、棘の長さが20cm以上ある黒っぽいウニです。主に夜行性で、昼

間は岩の陰に隠れています。ゴム底のサンダルなどは簡単に突き抜け、刺さっ

たトゲは折れやすく抜けにくいので注意が必要です。また、海水浴場などの砂場海底にはハート型をした長いトゲを持ったヒラタブソクが生息していますが、普段は砂に潜っているため見る機会が少なく、素足で海水浴を楽しんでいると刺されることがあります。

【症状】 大型の鋭いトゲを持ち、刺されるとしばらくして痛みと腫れ、しびれなどの症状が現れます。

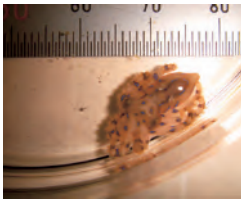
【処置】 毒を絞り出し、熱めのお湯（無い場合は氷水）にタオルを浸し患部にしばらくあてておく。



●**ガヤ類** 潮流がやや速い場所に多く生息し、ダイビング中に気が付かないうちに素肌の部分（特に手首やひじ）に触れてしまうことがよくあります。患部が小さく症状が軽い場合には、症状はかゆみと腫れだけで放っておいても1週間ほどで治ります。シロガヤの大きさは10cm前後で岩に付着しています。体は鳥の羽毛状で植物のように見えますが、イソギンチャクやサンゴの仲間です。軍手や長袖シャツなどを着用すれば、ほとんど防ぐことができます。

【症状】 痛み、かゆみ、発赤、腫脹などの症状が現れます。

【処置】 こすらずに真水や酢、アルコール、アンモニア水をしばらくかけてください。



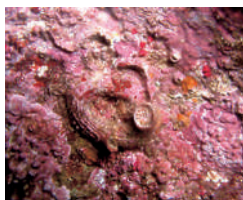
●**ヒョウモンダコ** 綺麗な小型のタコですが、猛毒を持っており死亡例も報告されています。全長12cm前後の小さなタコで、体と腕の全体に綺麗な青色のヒョウ柄模様があります。本来は南の温かい海に生育していますが、近年隠岐でも確認されています。

【症状】 毒は足の付け根の口から分泌され、咬まれると運動失調や全身麻痺、呼吸困難で死亡するケースもあります。咬傷による傷や痛みは小さいですが、次第に患部周辺が麻痺し、しびれや全身麻痺、呼吸困難などの症状が現れます。

【処置】 フグと同じ神経毒のテドロキシシン（猛毒）を持つため、消化器官から毒が体内に吸収されると危険性があります。毒は必ず手で絞り出す

ようにしてください。圧迫し毒のまわりを止め安静にします。意識、呼吸がない場合や、心配停止に陥った場合は心肺蘇生をしてください。

●オオヘビガイ・クロフジツボ・ケガキ



岸辺の岩や石の上には、硬い殻を持った動物が生息しています。サンダルで歩いたり素手のままで岩や石に触れると、これら動物の被害に遭うことがしばしばあります。口部分を上に向けまるで蛇がとぐろを巻いているようなオオヘビガイ、富士山型のクロフジツボ、細い突起が密に生じるケガキなどを波当たりが弱い内湾の藻場で生育していますが、マリンスーツや濡れてもよい靴を履くことで被害を防ぐことができます。



●ウミケムシ 体の両側に、毒をもっている多数の剛毛が生えています。全長10cmに達し、背面の中央には紫色の丸い斑点が並んでいます。本種は夜行性で、夕方から夜にかけて水面を遊泳していてときどき釣れたりしますので注意してください。

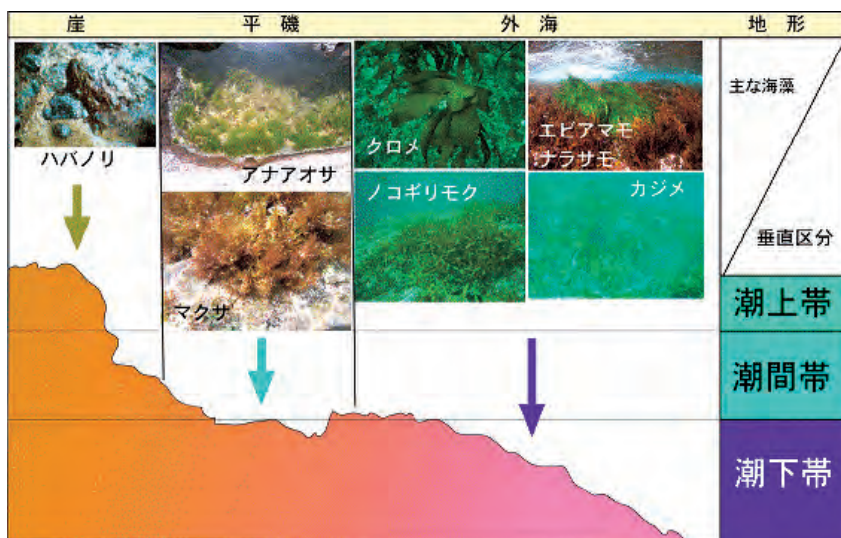
【症状】 刺されると、激しい痛み、かゆみ、発疹、腫れ、しびれなどの症状が現れます。

【処置】 刺されたら、患部をこすらずセロテープなどを使って剛毛をはぎ取るようにしてください。二次感染を防ぐため、アルコールで消毒したりステロイド系の軟膏類を塗るとよいでしょう。

3-5 海藻の植生と採集

海藻の寿命はたいてい1年ですが、ホンダワラ類やアラメのように数年の寿命があるものもあります。海藻は水温が20℃以下に下がる初秋に発芽するものが多く、年末から新春にかけて成長するものもありますが、多くは2～5月が繁茂期となります。6～7月頃になると胞子が成熟して海藻の体から海へと放出され、夏を過ぎ秋に入る頃世代交代が行われ四季が一巡します。このため、新芽が出てくる秋季が海藻が最も少なくなる時季になります。

海藻は春に繁茂するものが多く、ハバノリ、アオサ、アオノリ、ヒジキ、モズク、ワカメなどの多くの海藻が成長します。晩春から夏にかけては、アラメやカジメが成長し、それらの葉が切れて海底を漂うとアワビやサザエなどの餌になります。トコロテンの原料になるテングサ（マクサやヒラクサを総称してテングサと言います。）も夏に採れる海藻です。冬季に採れる海藻の代表は、やはりイワノリです。寒風吹きすさむ磯の波打ち際に生え、冬場の天候の良いときには地域の人々がイワノリを摘む姿を見ることができます。



◆食べられる海藻

ここでは、隠岐で採れる代表的な海藻とその食べ方について、簡単に紹介します。

【緑藻類】



●スジアオノリ（生育場所：潮間帯の岩上や杭）

料理方法：乾物にして吸い物、みそ汁に入れたり、刺身のつまや佃煮などにして食べます。この他にもヒラアオノリやボウアオノリなど数種のアオノリ属が食べられます。

【褐藻類】

●ホンダワラ（生育場所：低潮線から漸深部の岩や転石上）

料理方法：煮豆と一緒に煮しめたり、気泡を吸い物に入れて食べたりします。その他に、新芽の酢の物や刻んで炊き込みご飯にして食べる地方もあります。

●モズク（生育場所：低潮線に生育するホンダワラ類に付着）

料理方法：塩蔵にして保存します。酢の物や吸い物、雑炊などにして食べます。



●イシモズク（生育場所：低潮線から漸深部の転石上）

料理方法：隠岐ではイワモズクと呼んでいます。食感
はモズクより固く、塩蔵にして保存し酢の物や吸い物、雑炊などにして食べます。



●アラメ（生育場所：低潮線から漸深部の転石上）

料理方法：炊きたたのご飯に入れたアラメ飯や、みそ汁、煮物にして食べます。また、乾燥して粉末にしたものをご飯にふりかけても食べます。



●**ワカメ**（生育場所：低潮線から漸深帯の岩上）

ワカメにはいくつかの加工方法があります。

①湯抜きワカメ：生ワカメを2～3株ずつ縄でつるして熱湯に入れ、緑色に変色したところで取り出し冷水に入れてから乾燥します。

②板ワカメ：生で板の大きさに切り、機械を使って乾燥させます。

③灰干しワカメ：生ワカメの表裏に灰をふりかけて乾燥させます。

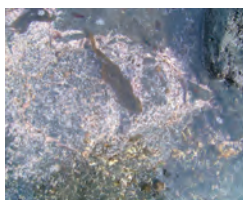
【**紅藻類**】



●**イワノリ**（生育場所：潮間帯上部）

料理方法：ウップルイノリを含む数種のアマノリ属の海藻をまとめてイワノリと呼んでいます。板ノリにしておにぎりやのり巻きにして食べます。生のイワノリを雑炊、みそ汁、雑煮、ナマコの酢の物などに入れて

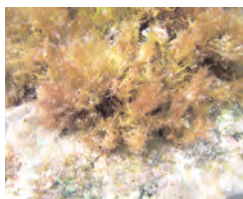
食べます。また、板ノリを火で炙り粉状にしたものをご飯にかけて食べても美味しいですよ。



●**ハバノリ**（生育場所：潮間帯上部）

料理方法：イワノリと同じように、板ノリにしておにぎりやのり巻きにして食べます。生のハバノリを雑炊、みそ汁、などに入れて食べます。隠岐では、ハバノリとイワノリとを混ぜて板ノリにしたものを、火で

炙り粉状にしてご飯にかけて食べます。



●**マクサ**（生育場所：低潮線から漸深帯の岩上）

料理方法：マクサやオオブサなどをテングサと呼びます。乾燥させて、白くなったものを煮て固めたものがトコロテンです。テングサの他に、エゴノリなどを加えて固さを調整したものが寒天です。



●**ユナ**（生育場所：潮間帯下部）

料理方法：ハバノリが採れる頃にユナも採れ、みそ汁、吸い物、雑煮に入れて食べます。隠岐ではユナのことをソゾと呼びますが、ソゾという海藻は別にあります。



●**ウミソウメン**（生育場所：潮間帯下部）

料理方法：みそ汁や生のものに熱湯をかけてから、酢醤油やそうめんつゆにつけて食べます。

コラム8 海中にも林があります

海の中で大型海藻が群落を形成しているところを藻場（もば）といいます。藻場は沿岸域における重要な場所であり、海の生き物の産卵場として、魚介類の幼稚仔の生育場でもあるのです。アワビ、ウニ、サザエなどは、ホンダワラ類やアラメ、カジメなどの海藻を食べて育ちます。また、幼稚仔魚は藻場で身を隠しながら、そこにいる多くの小動物を食べて育ちます。私たちがワカメ、アラメ、ヒジキ、テングサなどを採って食べたりします。

藻場は陸上でいうと森のようなものなのです。地球温暖化の原因となっている二酸化炭素を吸収したり、富栄養化の原因物質であるリンを吸収したりすることで、海洋環境の浄化に役立っているのです。

沿岸の岩礁域に形成される大型藻類の藻場は、ホンダワラ類を中心とした「ガラモ場」コンブ類を中心とした「海中林」に大きく分けられます。また、内湾性の砂泥域にはアマモが生育した「アマモ場」が形成されています。



ホンダワラ類を中心とした
「ガラモ場」



コンブ類を中心とした
「海中林」



アマモが生育した
「アマモ場」

コラム9 海藻と海草

海草も海中に生育し、名前の語尾に「モ」が付くのでまぎらわしいのですが、海草類（seagrass）は陸上の主な緑色植物と同様に立派な花や根を有している被子植物で、海藻類（seaweed）とは明瞭に区別されています。また、呼び方も海藻（かいそう）と海草（うみくさ）とに分けられています。

アマモは太古の昔に海から陸上にあがった植物が、進化の過程でまた再び海に戻ったと考えられている植物です。実は、分類学上のアマモは稲や麦などと同じ仲間の単子葉植物なのです。さらにもっと詳しく分類すると、単子葉類オモダカ目ヒルムシロ科アマモ属という多年草の海産顕花植物になります。コンブやアオサなどの海藻類は孢子で増える植物なので花を持ちませんが、海草であるアマモは花をつけます。花といっても陸上の植物がつける花とは違い、色鮮やかなものではなく花弁などは極端に退化しており、繁殖に必要な雄しべと雌しべだけをもっています。

アマモという名前は海藻（あまも）に由来するという説があります。また、別名には海中にゆらゆら漂う姿から「リュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ」（竜宮の乙姫の元結の切りはずし）という植物の和名の中で最も長い名前をもっています。



海藻（かいそう）類



海草（うみくさ）類

コラム10 磯焼け

磯焼けとは、藻場を形成するアラメ、カジメ、クロメ等のコンブ類やアマモ類、ホンダワラ類などの沿岸の有用海藻が一斉に枯れて、磯が焼跡のような状態になる現象をいいます。磯焼けの原因としては、海流の変化による水温の上昇、藻類の成育に必要な栄養分の不足、ウニ、巻貝、魚類等による食害などの説がありますが、現在までのところ完全には解明されていません。

磯焼けの大規模な例として、太平洋側の相良町から御前崎町にかけての地域をあげることができます。平成に入ってから沿岸の有用な海藻が一斉に枯れて、磯が焼跡のようになる磯焼け現象が目立ち始めました。平成6年頃からはさらに激化し、今まで約8,000haあったとされる海藻群落が、現在はほとんど消失してしまいました。

■藻食性魚類による磯焼け

磯焼けの原因の一つとして魚類による食害があります。この現象はこれまで九州など南方海域で発生していましたが、近年はここ隠岐でもかなり多くの場所で確認されています。海藻類を食べるアイゴ等の魚類は南方系の魚ですが、海水温の上昇によると考えられる生息域の拡大や生息量の増加によって藻場が減少、消失しています。下の写真は隠岐で撮ったものですが、アイゴによる食害がはっきりとわかります。



正常な状態の
アマモ



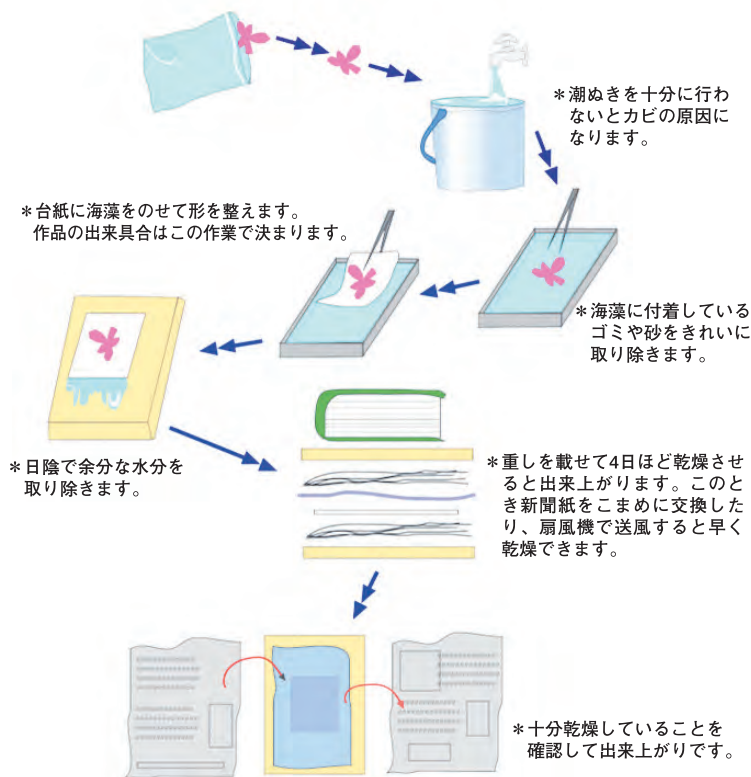
アイゴの食害を
受けたアマモ



藻食性魚類であるアイゴは、最初柔らかい葉をもつアマモ類を食べます。アマモ類がなくなると、次は硬い葉をもつ海藻類を食べるのです。

3-6 海藻アートの作り方

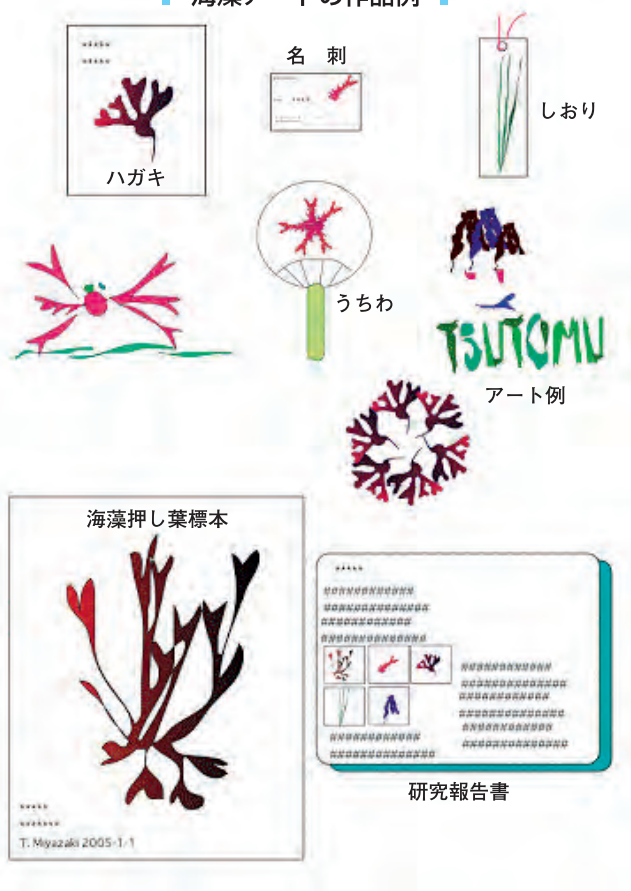
海藻押し葉の作り方



- ・ 採集した海藻は海水をよく切ってポリ袋やバケツに入れ、なるべく太陽光にあてないようにします。
- ・ ゴミや砂、小動物を水道水で洗い落として、さらに水道水を流水にして海藻を洗います。紅藻類は5分程度、緑藻類は10～30分程度、褐藻類は一時間以上、厚く硬い海藻の場合は少し長めにしてください。
- ・ バットや洗面器に水道水を深めに張ります。海藻と台紙を水面に浮かべるように手のひらで支え、海藻の形を水中で整えながらレイアウトします。ピンセットや楊枝を使うと、より細かい作業ができます。
- ・ 海藻をのせた台紙をそのまま水中から押し上げるようにして引き上げます。斜めにしたスノコ板などに海藻をのせた台紙を置き、水分を取り除きます。太陽光に当てないように気を付け、5分程度を目安にして水切りを行います。












- ダンボールの上に吸い取り紙（押し花用のものが市販されています）または新聞紙を敷き、海藻押し葉作品の台紙をのせてさらに布（さらし木綿でも代用できます）をかけ、その上から吸い取り紙（または新聞紙）、ダンボールの順に重ねます。布を重ねることによって、吸い取り紙に作品が張り付くことを防ぎます。
- 作品が多数ある場合はこれを繰り返し重ねていきます。
- 最後に厚い板を置いて、重石をのせます。ダンボールの目を通り抜けるように扇風機などで風を当てると、薄いもので一晩、かなり厚いものでも2～3日で乾燥します。扇風機などを使わない場合は、朝晩に吸い取り紙を交換して1週間程度で乾燥します。
- 完成した作品は、さらにラミネート加工をすると利用方法も広がります。

❖ 海藻アートの作品例 ❖






3-7 隠岐ジオパーク海洋動物カレンダー

隠岐ジオパーク 海洋動物カレンダー

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
アカオビ コテグリ													
		南方系魚類											
アゴ アマダイ													
		危険を察知すると巣穴に隠れる											
イサキ													
		秋には数千匹の大群を作る											
ウスメバル													
		成長するに従い深い海に移動する											
キンチャク ダイ													
		隠岐では数少ないヤッコの仲間											
カンパチ													
ソラ スズメダイ													
		海の宝石											
トウシマ コケギンポ													
		とぼけた顔がチャームポイント											
ハナハゼ													
		砂場に生息する											
マトウダイ													
		寒い時期に浅瀬に移動してくる											
ヒラマサ													
		ダイナミックな遊泳に圧巻											

隠岐ジオパーク 海洋動物カレンダー

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ミナミ ハコフグ													
		泳ぎ方が愛らしい南方系魚類											
ミノカサゴ													
		美しい魚には毒がある											
タコクラゲ													
		白い水玉模様が特徴											
エチゼン クラゲ													
		社会問題にもなった大型クラゲ											
オワン クラゲ													
		発光クラゲ											
アミガサ クラゲ													
		美しいクラゲ											
ウリクラゲ の一種													
		飛行船のようなクラゲ											
ゾウクラゲ の一種													
		よく見るとかわいい貝の仲間											
サキシマ ミノウミウシ													
		小さいが美しい											
ムラサキハナ ギンチャク													
		砂地に生息する大型なイソギンチャク											
フトアシ ウミシダ													
		ジュラ紀からの生き残り											

隠岐ジオパーク 海藻・海草カレンダー

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ホソエガサ 												
	絶滅危惧Ⅰ類											
クロキツタ 												
	絶滅危惧Ⅱ類：国天然記念物											
アカモク 												
	食用種											
ジョロモク 												
アラメ 												
	食用種											
クロメ 												
ツルアラメ 												
	日本海特産											
アオワカメ 												
	食べると意外に美味											
キボシ ガラガラ 												
アマモ 												
	イネに近いグループです											
エビアマモ 												

コラム11 アメフラシとウミウシ



アメフラシ

隠岐ではベコ（アメフラシ）を食べますが、このアメフラシはサザエやアワビ、タコやイカなどの軟体動物の仲間で、貝殻が退化している巻き貝の仲間です。（後鰓類：こうさいるい）

よくアメフラシと間違われるウミウシも軟体動物の仲間なのですが、こちらは全く貝殻を持たない裸鰓類（らさいるい）であり、食べられません。



ウミウシ

3月初旬から4月にかけて海藻を沢山食べたベコは、やわらかく、また歯ごたえもあってとてもおいしく、隠岐では醤油で甘辛く煮たり、湯がいたベコを酢みそで食べたりします。このベコを食べる習慣がある地域は、朝鮮半島、隠岐、島根半島の一部、能登半島の一部であると言われています。



ベコの料理例

その他の珍味として、イソギンチャクを食べる地域もあります。独特な食感で美味しいとのこと。





第4章 隠岐ジオパークの歴史について

4-1 隠岐の歴史～概要～

隠岐の歴史は旧石器時代から始まり、縄文・弥生・古墳時代を経て奈良・平安、中世・近世、明治期までの非常に長い間の記憶を留めています。また、神社や祭りについても同様に伝統的で歴史的に古いものが数多く伝わっています。古代から伝わる隠岐の気風を神社や祭りを通して感じてみてください。

4-2 隠岐を取り巻く歴史～神話の時代から～

◆神話伝承

『古事記』（712年）の国生み神話の中で、隠岐は「隠伎之三子島」（おきのみつごしま）またの名を「天之忍許呂別」（あまのおしころわけ）とあり、『日本書紀』（720年）の本文には「億岐と佐渡を双子」、一書には「隠岐の三子洲」（おきのみつごしま）とあります。イザナギ・イザナミにより3番目（古事記）あるいは4番目（日本書紀）と最初の頃に造られた島であると考えられます。

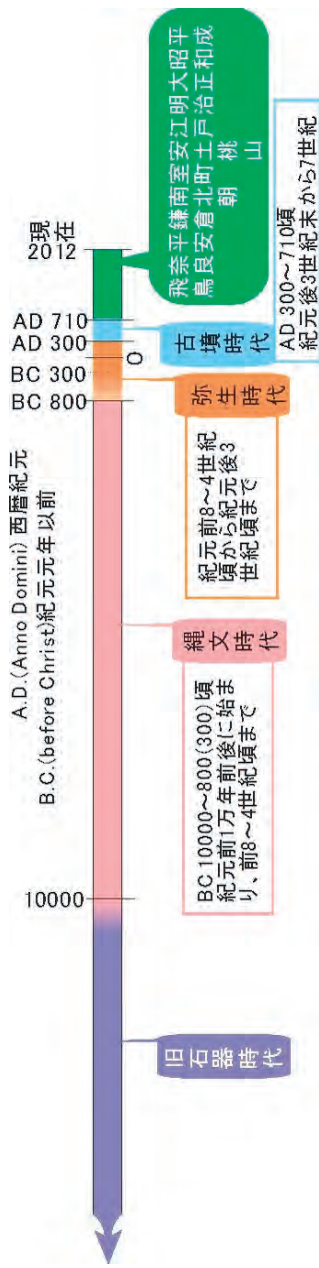
平安時代（794～1185年）初期の書物「先代旧事本紀」の国造本紀には、応神天皇の時代（270～310年）に十埃彦命（とおえひこのみこと）を隠岐国造に任命したとの記録があり、播磨国風土記の飾磨郡の飾磨御宅条には、隠岐・出雲・伯耆・因幡・但馬の国造の事が記載されています。このことから、隠岐は日本の歴史の曙から重要な地であったと言えるでしょう。

◆縄文・弥生・古墳時代

隠岐の島町久見（旧五箇村）で出土する黒曜石は国内随一の品質で石器の材料として使用されました。その分布範囲は東が新潟県、南は四国の北部、西は山口県西部など広範囲に及んでいます。久見産の黒曜石が、3万年前の兵庫県春日七日市遺跡や鳥取県門前第二遺跡から出土しています。旧石器・縄文時代には生活の道具として、弥生時代には戦争の武器として、古墳時代には祭祀の道具として各地で使用された隠岐の黒曜石は今でも隠岐の宝物です。



◆日本の歴史年表



【旧石器時代】：紀元前1万年頃まで

【縄文時代】：紀元前1万年～紀元前800(300)年頃まで

【弥生時代】：紀元前800(300)～紀元後300年頃まで

【古墳時代】：紀元後300年～710年

【奈良時代】：710年～794年

【平安時代】：794年～1185年

弥生時代後期の海士町竹田遺跡からは、銅剣・鉄槍・土器などが出土しています。また、同町の他の遺跡からは環濠集落跡も発見されており、この時代にかんがりの規模の集落が存在していたことを示しています。竹田遺跡の銅剣は荒神谷の銅剣よりも古く、古代国家の中でも隠岐が重要な地であった事を示しています。隠岐の島町の大城遺跡で発見された四隅突出型墳丘墓は、山陰地方や中国山地の一部と北陸地方の日本海側にしか存在せず、隠岐との間で海を隔てて同じ文化を持つ民族の共同体が存在していたと考えられます。

日本最古の四隅突出型墳丘墓は出雲の青木遺跡で、ルーツは朝鮮半島とも中国大陸とも言われていますが、対馬海流の影響を考えると、この文化を持つ渡来人が最初に渡って来た場所は隠岐の可能性が大きいと思われます。また、大城遺跡からは吉備や伯耆を中心として分布する波形文様のあるスタンプ文土器が出土しており、幅広い交流があったことも推測できます。



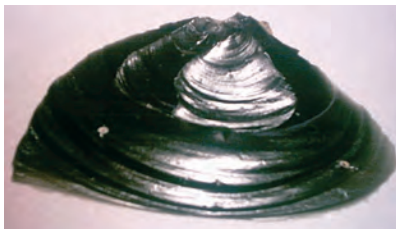
発掘直後の四隅突出型墳丘墓
(大城遺跡)



復元された四隅突出型墳丘墓
(大城遺跡)



スタンプ文土器 (大城遺跡出土)



黒曜石は鹿の角を用いて加工しますが、割れた模様が馬の蹄ににていることから馬蹄石とも呼ばれています

コラム12 古事記と日本書紀

●古事記（こじき、ふることふみ）

和銅5年（712年）太朝臣安萬侶（おほのあそみやすまろ、太安万侶）によって献上された日本最古の歴史書であり、上・中・下の全3巻に分かれている。

稗田阿礼が暗記していた『帝紀』（天皇の系譜）・『旧辞』（古い伝承）を太安万侶が書き記し編纂したものであり、勅撰の正史ではない。

その構成は、

1. 上つ巻（序・神話）

天地開闢から日本列島の形成と国土の整備が語られ、天孫が降臨し山幸彦までの神代の話を記している。

2. 中つ巻（初代から15代天皇まで）

初代神武天皇から15代応神天皇までを記している。神武東征に始まり、ヤマトタケルや神功皇后の話など神話的な説話が多い。

3. 下つ巻（第16代から33代天皇）

16代仁徳天皇から33代推古天皇までとなっている。

●日本書紀（にほんしょき、やまとぶみ）

奈良時代に成立した日本の歴史書であり日本における伝存最古の正史である。

舎人（とねり）親王らの撰で、養老4年（720年）に完成した。神代から持統天皇の時代までが記述されている。全30巻、系図1巻。

コラム13 応神天皇

第15代天皇（在位：270～310年）

第14代仲哀天皇と神功皇后との第四子。

別名：誉田天皇・誉田別尊（ほむたわけのみこと）。

実在性が濃厚な最古の大王（天皇）とも言われており、神功皇后の三韓征伐の帰途に福岡県糟屋郡宇美町で生まれたとされており、神功4年（204年）に立太子となり、応神元年（270年）に71歳で即位し応神41年（310年）に111歳で崩御したといわれている。『古事記』では130歳で崩御となっている。

コラム14 四隅突出型墳丘墓と隠岐黒曜石

四隅突出型墳丘墓は、弥生時代後期の山陰地方（中国山地の一部を含む）・北陸地方に見られる墳丘墓で、方形墳丘墓の四隅がヒトデのように飛び出した特異な形をしています。その突出部に葦石や小石を施すという墳墓形態で、その技術は古墳時代に行われたものと遜色ないものが多く、以前は広島県三次が国内での発祥の地と言われていましたが、平成16年（2004年）に出雲の青木遺跡から弥生時代中期後葉（紀元前1世紀）頃の最古型式のものが発見されています。

発祥が出雲だとすると、そこから内陸や海岸沿いに鳥取から北陸地方へ広がり、更に富山へ伝わっていったと考えられます。現在、日本海側を中心に約90基が確認されており、源流は今のところ判明していませんが朝鮮半島説、中国大陸説などがあります。過去に北朝鮮に渡航した人が同型の墳丘墓を確認したという情報もあります。

墳丘墓側面には石を貼りめぐらし、サイズは後の前期古墳時代のサイズに近づいているなど、古墳時代以前の墓制ではもっとも土木技術が駆使されており、日本海沿岸という広域で墓形の規格化が進んでいたことが推測されます。

このことから、山陰～北陸にわたる日本海沿岸の文化交流圏ないしは大和朝廷以前に成立していた王朝を想定する方もいます。また、島根県安来市（旧出雲国）に、古墳時代前期に全国的にも抜き出た大型方墳が造営されていますが、四隅突出型墳丘墓の延長線上に築かれたものと考えられる方もおり、古代出雲の謎を解く鍵と言われてしています。

更に興味深い発見としては、隠岐の黒曜石の分布範囲と四隅突出型墳丘墓の分布範囲が非常に似通っていることがあげられます。このことは、隠岐の黒曜石が運ばれたルートを使って四隅突出型墳丘墓の文化が伝えられたことを示しているのかもしれませんが。



古墳時代には島内に多数の古墳が築られました。全長48mの平神社古墳をはじめとする前方後円墳が10基余の他、円墳が約200基、方墳はわずかですが古墳時代後期の横穴墓を含めると島後だけでも300基以上にも及びます。海士町新開古墳からは近畿地方の特色を持つ土器が、同町郡山西古墳からは鉄器を作る素材の鉄挺が出土しています。隠岐の島町久見の横穴墓、西ノ島町立石古墳、海士町唯山古墳、隠岐の島町下西などでは朝廷から送られたと思われる金銀で飾る大刀が出土しています。また、西ノ島町珍崎の聖岩からは朝鮮半島南部の伽耶土器が出土しており、この時代の半島との交流を示しています。他にも、隠岐の島町東笠根一号墳（旧五箇村）からは但馬や播磨地域で見られる+印や×印の付いた須恵器が金銅鈴、鉄斧などと共に出土しています。近年の発見では、隠岐の島町西田の大座西二号墳から隠岐産の青メノウや水晶で作られたと思われる勾玉と共に、中国から伝わったと考えられる銅椀（仏具）が出土しています。



大座西二号墳から出土した勾玉



大座西二号墳から出土した銅椀

以上の事から、古代の隠岐は文化の中継地点であり、日本海を隔てて朝鮮半島や大陸と隠岐との間で人々の行き来があったと思われます。そして国内では西日本を中心に文化が広がっていったのでは内でしょうか。

古事記にある「隠伎」の「伎」の文字は“技術を持った人”の意味があり、「天之忍許呂別」は「中国から来た忍・許・呂の国の人」とする説もあります。銅椀や四隅突出型墳丘墓の発見がそれらを証明しているのではないのでしょうか。

何れにしても、隠岐の歴史は一般的に思われているより遥かに古いのです。

◆奈良・平安時代

隠岐が遠流の地と定められたのは聖武天皇の時代、神亀元年（724年）で、江戸中期になって一般の罪人が流されるまでは天皇や公家、役人などの政治犯が配流となりました。遠流の地となり、隠岐に最初に流されたのは柿本人麻呂の息子である躬都良（みづらお）と言われていますが、残された文献がないため伝説であると思われる。流人に小野篁や後鳥羽上皇・後醍醐天皇など歴史上の有名人が多いのが特徴です。

10世紀の和名抄に「国府在周吉郡」とあり隠岐国の政治の中心は隠岐の島町能木原にある甲ノ原遺跡周辺であったと考えられています。同町尼寺原遺跡からは多数の堀立柱建物跡や瓦などが出土しており、国分尼寺跡と合わせ隠岐国にも国分寺と国分尼寺が建立された事を今日に伝えています。

隠岐国の各郡役所跡ははっきりとは分かっていませんが、海士町の矢原遺跡・郡崎遺跡では墨書土器の多倍などが出土しています。また、藤原宮・平安宮で出土した木簡（荷札）は100点以上にもなり隠岐国の郡・郷・里の名前や氏族名、送られた産物名などが分かります。中でも干し鰻（あわび）は天皇家への献上品や役人達のボーナスとして使われていました。他にもアワビの産地はありますが、中国から伝わった陰陽道の思想により、都から吉祥の方角（北西）にあたる隠岐のものが最上級とされていました。

延喜式神名帳では式内社に16座、そのうち名神大社に4座と隠岐の神社の格付けがなされています。出雲に大社が2座（熊野大社、出雲大社）しかないので推測すると、朝鮮半島との緊張関係や地方の有力豪族の力が背景としてあったといわれています。

中央政府は渤海や新羅と盛んに交流を行ないましたが、漂流や難破などの事故も多数あり隠岐への漂着もありました。この時代も中央との深い繋がりを示す史実が残されているのです。

763年10月6日	渤海からの帰路、学生高内弓、入唐学問僧ら隠岐に漂着（続日本紀）
799年2月10日	渤海使遣帰路に隠岐国に漂着（日本後紀）
825年12月3日	渤海国使の高承祖ら103人隠岐に来着（類従国史）
861年1月	渤海国使の李居正ら150人隠岐經由島根半島に着く（三代実録）
888年10月3日	新羅国人35人が隠岐国に漂着（日本紀略）
889年2月26日	隠岐国に漂着した新羅国人に米塩を与える（日本紀略）
942年11月15日	隠岐国に新羅船7隻が来着（日本紀略）

コラム15 最高級品であった隠岐の干鮑

隠岐は鮑の産地として、平安時代から有名だったことが文献から分かります。また、『延喜式』の規定からは隠岐の鮑が最高級品であったことが分かります。

【文献から】

- 平安時代の『新猿楽記』に各地の名産が記載されており、「隠岐は鮑」となっている。
- 室町時代の『庭訓往来』に各地の名産が記載されており、「隠岐鮑」となっている。
- 『出雲風土記』（733年）の記載では、「鮑は出雲郡よりも優れり。捕わふる者は、いわゆる御崎の海子（あまこ）なり。」

【延喜式の規定から】

●天皇即位の踐祚大嘗祭（せんそだいじょうさい）

「およそ神御の雑物は膳職に備えよ。多加須伎80枚。隠岐鰯、烏賊各14両、煎海鼠15両、（中略）東鰯いれたるはこ5合、隠岐鰯はこ16合、（中略）佐渡鰯はこ4合（以下略）」

●外国使節の送別会の宴『玄蕃寮式』より

「（前段略）酒肴を給うべし。更に使人を付せ。その肴すべて隠岐鰯6斤、（以下略）」

●高級役人の臨時手当

参議以上：隠岐鰯5両 東鰯1両2分

正五位以上30人：隠岐鰯4両2分 東鰯1両2分

正六位以下260人：東鰯2両

コラム16 遠流の島『隠岐』と小野 篁

隠岐は聖武天皇の時代、神亀元年（724年）に遠流（おんる）の地として定められてから、多くの罪人が流されています。

◆聖武天皇：第45代天皇。在位724年～749年。

聖武天皇の詔（741年）により、全国に国分僧寺や国分尼寺が建てられました。

◆小野 篁：802年～853年。平安時代前期の学者、歌人。

遣隋使を務めた小野妹子の子孫で、孫に三蹟の一人である小野道風がいます。また、小野小町の祖父ともいわれています。

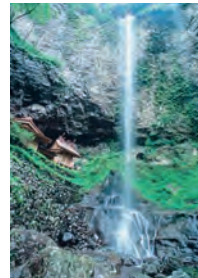
承和元年（834年）に遣唐副使に任せられますが、承和5年（838年）に正使である藤原常嗣とのいさかいから、病気と称して職務を拒否したため、嵯峨天皇の怒りを買って隠岐に流されました。隠岐では、海士町豊田にある金光寺に滞在した後、隠岐の島町那久にある光山寺に滞在しました。



金光寺



現在の光山寺



都への帰還を願った
壇鏡の滝

わたの原 八十島かけて 漕ぎ出でぬと
人には告げよ 海士の釣り船（百人一首11番）
は、小野篁が隠岐に流されるときに詠んだ歌とされています。

●正使藤原常嗣と副使小野篁とのいさかい

正使である藤原常嗣は、自分が乗る船より副使である小野篁の船の方が立派であったため船を取り替えました。これに反抗した篁は、病気と称して唐に行くことを拒んだのです。

コラム17 小野 篁と島の娘との悲恋物語

小野篁は、那久光山寺に滞在中、五箇地区にある願満寺からの依頼によって仏像を彫りに通っていました。途中にある都万目の集落で休憩をしていた篁は、村の娘阿古那（あこな）と恋に落ち子どもも授かりましたが、赦免になると都に帰ることになり、別離の悲しみに泣き崩れる阿古那を哀れんで、一体は自分で一体は阿古那だとし二体の木像を刻み、その木像を残して隠岐を離れました。

二人の間に生まれた子どもも幼年で亡くなったといわれており、阿古那亡き後地蔵堂が建てられ二体の木像が祀られたのですが、いつしか“あこな”が“あごなし”となまり、歯痛に靈感あらたかということで信仰となりました。

また、この木像を拝むと歯痛が治るといわれたことから、大阪方面にも持ち出されたこともあり、今日でも大阪方面からあごなし地蔵を訪れる方も見かけられます。



小野篁が仏像を彫りに通った願満寺
(隠岐の島町 小路地区)



あごなし地蔵が祀られている小堂
(隠岐の島町 都万目地区)



盆踊りが行われる広場

阿古那の供養のため、毎年旧7月23日に盆踊りが行われる地蔵堂わきの広場。

この盆踊りが隠岐島で最後に行われることから「踊り納め」と言われています。小野篁と阿古那の物語は盆踊りの歌詞にもあり、今でも島の人々によって二人の悲恋は語り継がれています。

◆中世の隠岐

鎌倉時代の建久4年（1193年）近江源氏（佐々木氏）の佐々木定綱が隠岐の地頭職となり息子の広綱をはじめとする一族が隠岐を治めました。以後、隠岐は戦国時代まで近江源氏（佐々木氏、京極氏）が支配します。当時隠岐の大きな出来事としては、承久3年（1221年）の後鳥羽上皇の御配流、元弘2年（1333年）の後醍醐天皇の御配流があります。

戦国時代になると、中国地方は守護大名で近江源氏系列の尼子氏と戦国大名である毛利氏の争いが起きます。当時、島後の国府尾城にあった佐々木宗清は、尼子氏と血縁が深かったことから尼子氏の援軍を受け、在地勢力を打倒し隠岐を支配しました。（隠岐氏を名乗る）

しかし、三代後には、毛利と尼子の戦いに巻き込まれた佐々木氏は尼子方に付くも内紛もあって滅亡し、隠岐は毛利一族の吉川氏に支配されるようになりました。

コラム18 隠岐に流された二人の天皇

隠岐には後鳥羽上皇、後醍醐天皇の二人が流されています。

●後鳥羽上皇：第82代天皇（在位1183年～1198年）

建久9年（1198年）に土御門天皇に譲位し、以後3代23年間に渡り上皇として院政を行います。承久3年（1221年）に時の執権北条義時追討のために起こした承久の乱に敗れ隠岐に御配流となりました。（隠岐に流される直前に出家し法皇となる。）

後鳥羽上皇は最初海士町の崎の港に上陸された後、中里にあった源福寺に住まれ、在島19年の後、延応元年（1239年）に同地で崩御されました。（死後の仁治3年（1242年）に後鳥羽院に改められています）中世屈指にして日本史上有数の歌人であった後鳥羽院は、建仁元年（1201年）に藤原定家に命じて『新古今和歌集』の編纂を行っていますが、実質的に後鳥羽院が選者の一人であったとも言われています。

●後醍醐天皇：第96代天皇

文保2年（1318年）に31歳で即位。

元弘元年（1331年）に笠置山で倒幕の挙兵を行うが敗れ、元弘2年（1332年）に隠岐に御配流となりました。（元弘の変）

元弘3年（1333年）に名和一族の協力により隠岐を脱出し、建武の新政を行いました。隠岐での行在所については島前の黒木御所説と島後の国分寺説がありますが、最初に到着された場所は知夫村の仁夫であったと伝えられています。

◆近世の隠岐

江戸時代の初めは京極忠高が隠岐の守護職でしたが、忠高の死後隠岐は天領になり松江藩預かりとなりました。海士の村上助九郎は京都・大阪・長崎と隠岐間で廻船業を営み、その財力によって島内や能義郡の新田開発を行ないました。長者番付に東の関脇として載るほどの豪商でした。

現在、国の重要文化財に指定されている建築物の多くがこの時代に建てられています。玉若酢命神社は寛政5年（1793年）、水若酢神社本殿は寛政7年（1795年）、西ノ島町の焼火神社の拝殿は寛文13年（1673年）、同本殿は享保17年（1732年）の造営で、本殿は大阪で加工した建築材を船で運び米子の大工が現地で組み立てました。隠岐の島町釜の佐々木家住宅（天保7年：1836年）は漆塗りの客間を持つ豪華な造りで一般の民家でこれだけのものは数少ないと言えるでしょう。かぎ座敷や礎石の配列など隠岐独特の古民家造りでもあります。

18世紀の後半からは、隠岐は北前船の風待港として栄えました。それ以前は帆が弱く短い距離しか移動できなかった北前船ですが、大阪で繊維技術が発達し丈夫な帆が開発されたため、佐渡～隠岐～下関ルートが可能となりました。

北前船は商いをしながら大阪から松前までの間を西回りで行き来をした買積船で、隠岐でも品物を買付けていました。中でも干し鰯、煎海鼠（いりこ＝ナマコ）、鰯（するめ）は長崎俵物として中国へ輸出され幕府の重要な財源となりました。西郷湾には多い年には二千隻以上の舟が停泊し、風待港としての賑わいを見せました。



今津の白鳥神社に奉納された模型

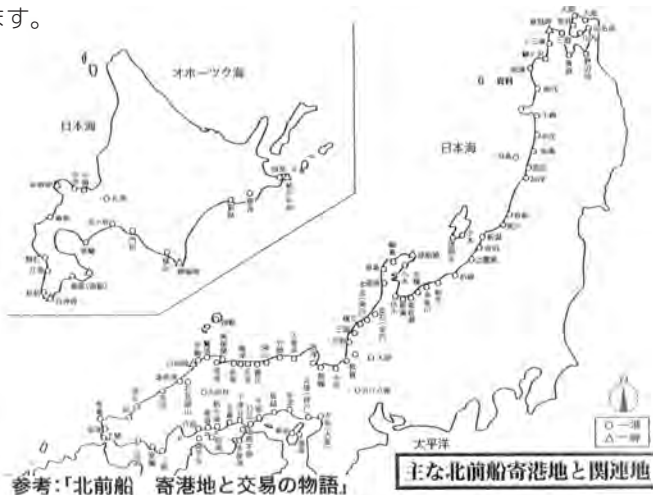
コラム19 北前船と隠岐 ～風待ちの港 西郷港～

隠岐は江戸時代の半ばから明治30年頃まで、北前船の寄港地として栄えました。北前船とは、大阪を出て西回りで瀬戸内から日本海を行き来し、買積船といって港々で商品を売り買いしながら今の北海道まで往復していた船の呼び名です。

北前船が隠岐へ頻繁に来るようになったのは、18世紀の中頃に大阪で繊維技術が発達し、1785年に松石衛門帆という丈夫な帆が開発されてからです。それまでは帆が弱く、強い風に耐えられなかったため日本列島を小刻みにしか移動できませんでした。そのため、年間に大阪と北海道を1往復（1航海）しかできませんでしたが、松石衛門帆が使われるようになってからは佐渡－隠岐－下関という沖乗りルートとなり、風待ちや物資の補給基地として隠岐島内の各港が利用されました。その頃は年間2往復、明治になると西洋式の船も導入されたため年間4往復できたそうです。

多い年には西郷港だけでも年間2千隻以上、隠岐全体では4千5百隻もの船が停泊したといわれています。中でも西郷港は間口が狭く東西に奥が深いうえに水深もあり、多くの北前船が寄港して賑わいました。

上りの船は西郷湾の東に停泊し、下りの船は湾の西側に停泊していたため、現在も「上り待ち」が訛った「のぼりま」という地名が残っており、他にも「溜まり場」が訛った「たーま」という地名が西郷港の周辺に残っています。



北前船が運んだ物としては北海道の昆布やニシン粕、東北地方の米や大豆などが有名ですが、隠岐からも海産物をはじめ桐や桑などの木材も多く運ばれました。中でも千鰻（ほしあわび）煎海鼠（いりこ・干したなまこのこと）は、長崎俵物として中国へ輸出され幕府の財政を潤したといわれています。

隠岐の廻船問屋たちも北前船との商売をしていましたが、後鳥羽上皇のお世話をしたことで有名な海士の村上助九郎は江戸時代の長者番付にも載るほどの富を得ました。



北前船の建造費は150 t 積みの千石船で2千両（約2億円）かかったそうですが、儲け大きく1航海で1千両（約1億円）の純利益があったといわれています。

風待ち港として賑わった西郷港には、当時の活気を伝える話が数多く残っています。船乗り達を持てなすための百畳の宴会場があったり、芸者さんも百人いたといい、北前船関係者の日記には西郷の商店に舶来のコウモリ傘（イギリス製）が売っていたという記録があり、その繁栄振りに驚かされています。

また、小泉八雲（ラファディオ・ハーン）が隠岐を訪れた際には、境港より西郷港が発展していて驚いたことや、日本食を食べようと食堂に入ると、八雲が外国人であったためか店主から『ビフテキが用意出来ます』と言われて興奮してしまったことなどが紀行文に残されています。

このように、八雲の予想を超えるほど『西郷の港』は発展していたのです。他にも当時を伝える物として、隠岐各地の神社には航海の安全を祈願した船絵馬や寄進された仏像などが残っています。

コラム20 北前船と隠岐民謡

北前船は売り買いをする品物だけではなく、全国各地の民謡も隠岐へ運んできました。『隠岐は民謡の宝庫』ともいわれていますが、中でも新潟県の柏崎にある専福寺の盆歌が元歌となっている「隠岐しげさ節」や、荷物の積み下ろしの際に歌われたといわれる労働歌「どっさり節」は隠岐民謡の代表格として現在も歌い継がれています。

西郷周辺の散策や隠岐民謡を通じて、北前船の名残を感じてください。



西郷港近くの出雲大社分院にある石灯籠。松江や隠岐の商人が寄贈した物であり、北前船が西郷港に入港するときには燈台として利用されました。滑車で火を吊り上げる仕組みとなっており、同様の石灯籠が那久岬にも設置されています。



清久寺（通称：地藏院）に残る江戸時代の「不動明王」は、北前船関係者が航海の安全と商売繁盛を祈願して寄進したものです。北前船の船乗りと恋仲になった島の娘が、時化で船が止まる（足が止まる）ように草履を供えて願をかけたことから「足止め不動」と呼ばれるようになりました。

今でも「不動明王」の脇には草履が供えられています。



天然の良港【西郷港】



白鳥神社に奉納された船絵馬

コラム21 流人と隠岐の人情

江戸時代になると、一般の重罪人も隠岐に流されるようになってきました。遠島は死刑に次ぐ重罪とされ、西日本で罪を犯した人が隠岐へ、東日本で罪を犯した人は佐渡へ流されたのです。

これら流人を島人の一人として受け入れた隠岐の人情を表すものとして、流人安兵衛の墓があります。安兵衛は酒を飲んで博打をしたあげく口論となり殺されてしまいますが、不憫だと思った村人が光山寺の境内に手厚く葬っています。この墓は島後に唯一残る流人の墓なのですが、光山寺の住職の墓と思われる立派な墓石に並んで建てられており、村人の優しさがうかがえます。



光山寺



流人安兵衛の墓

流人の法度（禁止事項）として四つの決まりがありました。

1. 離村してはいけない（流人は村々にあずけられた）
2. 博打（ばくち）をしてはいけない。
3. 結婚してはいけない。
4. 船に乗ってはいけない。

しかしながら、寛政12年（1800年）からの3年間だけは流人の結婚が認められ、島の娘たちと結婚した流人は長生きをしたという記録も残っています。また、財産を持てるようになったという記録も残っています。これらのことも、流人を島人として受け入れた証なのではないでしょうか。

ちなみに、流人がしなければならなかったこととして、火の見櫓に登って交代で火の見番をすることがありました。

◆隠岐維新 ～世界に先がけた自治国家の樹立～

幕末の動乱期、隠岐でも尊皇攘夷運動が高まり慶応4年（1868年＝明治元年）に隠岐維新が起こりました。一般的には隠岐騒動と呼ばれていますが、松江藩から独立しパリコミュンより三年も早く自治政府を樹立した世界にも稀に見る出来事だったのです。

島後の島民三千人が武装決起し、西郷にある陣屋に詰めかけて郡代や代官たち役人を書面の提出と議論によって追い出しました。武士が相手であるため武器は所持しましたが、餞別に酒や米を贈るといった優しい革命でもありました。

隠岐維新の要因は、ペリーの来航より数十年も前からあった隠岐周辺での外国船の出没、天明以降の飢饉が度重なり物価高騰と重税に島民があえいでいたこと、隠岐出身の儒学者『中沼了三』の思想的影響、中沼了三が孝明天皇の命令で十津川村に建てた学校（文武館）を、隠岐にも設置しようという嘆願を郡代が却下したことなどがあげられます。

幕末、日本海でも黒船の出没が頻繁となり、文久元年（1861年）には鳥取藩に「松江藩を助けて隠岐の防御を講ずべし」との朝命が下っていました。3年後の元治元年（1864年）の4月に鳥取藩の景山龍蔵が西郷に入り、有事に備えるために犬来村の海岸を調査していたとき、黒船が1隻突如西郷港に入ってきました。

この時、松江藩の代官であった枝元喜左衛門は一人で黒船の検分に行くことができず、鳥取藩の景山に付き添ってもらいようやく艦内に入ったのですが、引き揚げる際に帯刀を置き忘れるという失態を犯してしまいました。また、その帯刀を自分で取りに行かず西郷の町人に取りに行かせたため、松江藩の役人達の無能振りが評判となったのです。

元来、隠岐島民は勤王の念が深く、後鳥羽上皇・後醍醐天皇の遠流の地であったことが影響してか、国学・道学を究める者が多くいました。中でも、幕末期に島民の勤王思想の根幹的存在となったのが、隠岐の島町中村出身の中沼了三でした。彼は後に孝明天皇や明治天皇の侍講となるほどの人物で、この時すでに京都で一門をなし勤王の志士たちと交わっていました。

中沼了三に師事していた十津川郷士が文武館を創設し、ついに勤王軍となったという話が隠岐に伝わり、中沼の弟子であった中西毅男（なかにしはたお）は、加茂村の庄屋であった井上齟介（いのうえしゅうすけ）と島民自らの手で尊皇攘夷という、文武両道を学ぶべき拠点としての文武館設立を松江藩に嘆願

することを決意しました。

そして、慶応3年（1867年）5月に、島後の同志73名の連署による嘆願書が新任の郡代である山郡宇右衛門（やまごおりうえもん）に提出されましたが、二度に及ぶ嘆願はいずれもすげなく却下されました。

「崎門学」（きもんがく）は17世紀に活躍する山崎闇斎が起こした学問で江戸時代の儒学の主流であり、全国に広まっていました。また、闇斎は吉田神道を発展させた独自の垂加神道（すいかしんとう）を開き強烈な尊王攘夷論を説きました。後の廃仏稀釈（廃仏騒動）において隠岐と十津川が全国の中でも一番の激しさだったといわれているのは、崎門学や垂加神道の影響が大きかったと思われる。



中沼了三の肖像画



隠岐の島町中村に建てられた顕彰碑

山崎闇斎学派の学問の系統

山崎闇斎 — 浅見綱斎

若林強斎 — 西依成斎

山口菅山

梅田雲浜

有馬新七

鈴木潤斎

鈴木遺音

吉田東篁 — 橋本左内

中沼了三

慶応4年（1868年）2月13日には、京へ直訴しようとして島民11名が隠岐を脱出したのですが、時化に遭ったため石州浜田外ノ浦（島根県浜田市）に入港し、そこで長州藩の取り調べを受けました。既に徳川慶喜追討令の下ったことを聞かされた島民達はやむなく帰島したのですが、彼らは隠岐がすでに天朝御料となった今、郡代を追放すべきだと同志達に檄を飛ばしたのです。

また、山陰道鎮撫使総監西園寺公望（さいおんじきんもち）が、親藩でありながら進退不明確な松江藩を取り調べるために「隠岐の庄屋方へ」と表記した書状を出したのですが、郡代がかってに開封してしまいました。この事が郡代追放の気運に油を注ぐ結果となり、3月15日に上西村の庄屋であった横地官三郎宅などで島後の庄屋職が会合を開き、鎮撫使からの御用状を開封した郡代の罪を追求すべく議論を交わしました。意見は、松江藩の支配を脱し天朝の直接支配を望む請願運動主張派と郡代追放強硬派とに分かれましたが、やがて郡代追放で意見が一致しました。

尊皇攘夷過激派の中心は島後の庄屋と神官たちであり、自らを「正義党」と称し、翌3月16日に再度正義党同志が横地宅で集会を行ったときには、同志の数は100名近くになっていました。

郡代追放の決行は慶応4年（1868年）3月19日と決まり、決行当日の夜明けを待って横地宅を出発するときには、同志島民の数はなんと3,000人以上にものぼりました。おのおの鳶口、竹槍などを携えて整然と西郷に入り、調練場に陣を敷きました。総指揮役は忌部正弘、応接役（軍事・外交）として横地官三郎、書記役（文部・科学）は井上齧介でした。



隠岐騒動「島民決起」の想像図 広瀬貫川作（隠岐汽船所蔵）



応接役（軍事・外交）
横地官三郎



総指揮役（総会所頭取）
忌部 正弘



書記役（文部・科学）
井上 整介

この時陣屋に詰めていた松江藩士は数名にすぎず、郡代一行は屈服状を差し出し隠岐を離れていきました。

ついに松江藩の支配を脱し、公務を行う総会所を陣屋に設けての自治が始まりました。「文事・軍事方」「撃剣・武具方」「兵糧方」など見事な組織が完成し、郡代宅跡には立教館を設け、中西淡斎（たんさい：毅男の父）を教授とする大学を開きました。

しかし、自治組織づくりには成功したものの朝廷からの認可を得ていなかったため、4月1日に中西毅男他2名が上京したのですが納得のいく回答の得られぬまま閏4月をはさんで約2ヶ月が過ぎてしまいました。

こうした状況の中、太政官からは松江藩に対して「旧幕府時代から預かっていた隠岐は、当分の間松江藩が取り締まりをすべきだ」という書状が渡っていたのです。しかも「取り締まりは厳重にし、農兵どもが役所へ対して不法の所業あれば、厳しく取り締まること」と併記されていたのです。

この書状を受け取った松江藩は、閏4月27日から5月9日にかけて藩士を続々と西郷に送り込んで陣屋を包囲し、島民に陣屋からの退去を迫りました。島民は「京よりの直接の達しを待ちわびているのだ。太政官の書状を示されようと、松江藩の指揮は絶対に受けない」と明言し、総会所の守りを一層固めました。

5月10日、小競り合いの続くうち突如松江藩兵が発砲し、これをきっかけとして、藩兵は総会所に乱入していきました。この時、島民は武装解除をしていたこともあり、たちまちにして陣屋は奪回され、島民の死傷者は22名、捕縛入牢者は19名を数えました。（80日間の自治政府）

事件後、戦死者の収容や変乱を鎮めるために、美保の関で船待ちをしていた鳥取藩の藩士を津戸村の八丁櫓船が迎えに行き、鳥取・長州・薩摩の三藩による介入によって松江藩は兵を撤退させました。

監察使の取り調べは島民達の有利に進み、6月には総会所において島民自らの手で設けた役割構成とほとんど変わらないかたちで自治政府が復活したことは、14人の犠牲者の魂を大いに慰めたことであろうと思われます。

こうして、80日間の自治は消え去りましたが、陣屋跡に立法府である会議所、内閣・行政府である総会所、司法府である目付役を置き、明治政府に先取りした三権分立の制度を取り入れました。この近代的な政治システムは地方自治の先駆けとも言えます。



隠岐騒動勃発の碑



郡代追放を再現した隠岐コミュニオン祭

【隠岐騒動の余談として】

大阪奉行の大塩平八郎が一揆を先導した、いわゆる大塩の乱に関わった西村利三郎の息子（西村常太郎）が隠岐へ流され、騒動の間も隠岐に暮らしていました。御赦免になった後、医師として活躍した西村常太郎は、後年、新聞社からの依頼によって自伝を残したのですが、その中で隠岐騒動について詳しく記載されており、常太郎は副大将として騒動を指揮したと書かれています。

しかし、流人であった常太郎が実際に騒動に関わったとは考えられず、隠岐にもそうした文献や言い伝えは残っていません。つまり、常太郎は隠岐の騒動に関わったことを自慢話として自伝に残したであろうと思われます。明治時代には、隠岐騒動が明治維新の流れの中での出来事であり、尊皇攘夷運動の一つとして国民から支持されるような出来事であった証拠とも言えるのではないのでしょうか。

【一口歴史ガイド】



1. 海を渡った隠岐の黒耀石



縄文時代に石器として使われた隠岐の黒耀石は西日本随一の産地を誇り、今の中国・近畿地方をはじめ南は四国の瀬戸内側、東は北陸地方や新潟県の糸魚川辺りまで運ばれていました。古くは三万年前の旧石器時代にも石器として使われており、弥生時代に鉄器が導入されてからも戦争の武器として矢じりなどに加工されていました。古墳時代になってからは祭祀の道具として使われており、古代人の黒耀石へのこだわりが伺われます。

黒耀石の運ばれたルートは後の街道や海道になっており、現在の国道や県道の多くは、元々は黒耀石が運ばれた道だったのです。山陰から山陽側へ向かう道路沿いの遺跡からは隠岐産の黒耀石が出土しており、黒耀石が運ばれたルートを調査することによって「道路」の成り立ちも見えてきます。このように、黒耀石を求め多くの古代人達が隠岐への道を行き来したと考えられ、物流や文化の中継地点として隠岐は栄えていたのではないのでしょうか。

隠岐は小さな島国でありながら古墳や神社の数が多く、古事記の大八島の一つにも数えられています。また、国生みの四番目の島として登場するのも、こうした黒耀石文化があったからだと考えられます。更には、遠流の島として小野篁、後鳥羽上皇、後醍醐天皇などの貴人が隠岐に流されたのは、黒耀石による高い文化水準を持っていたからだという推測もできます。

※本来黒耀石という文字を使用しますが、古代人が光り輝いた石に興味を持ったと考え、隠岐では黒耀石と表示することもあります。

2. 高級品であった隠岐の干し鮑



隠岐は現代も魚介類の産地ですが、奈良時代から盛んに作られた隠岐の干鮑は超高級品で、隠岐は鮑の産地として広く知られていました。平安時代の書物にも『隠岐は鮑』となっています。

海藻も良く育つ海域に恵まれているためアワビの味も良かったのですが、当時の陰陽道の思想で隠岐は都から吉祥の方角（北西の方角）にあたり最高級とされ、天皇の即位式の供え物や高級役人のボーナスとして支給されていました。

また、隠岐が北前船の風待ち港として栄えた時代（江戸時代中期～明治30年頃）には、隠岐の干し鮑（竹島で水揚げした鮑も含まれていました）が長崎出島に運ばれ、長崎俵物三品（干し鮑、干しナマコ、フカヒレ）の一つとして中国との貿易の主要品となっていました。

このことから、隠岐の鮑が幕府の財政を潤したとも言われています。

3. 流人をも受け入れた隠岐の人情



隠岐は奈良時代（神亀元年＝724年）に遠流の地として定められてから、幕末まで流刑の地として数多くの罪人が流されてきました。江戸時代中期までは天皇や公家、役人などの高貴な人たちが流されましたが、その後は一般の罪人も多く流されました。

流人は隠岐のそれぞれの村預かりとなり、下記の禁止事項が決められていました。

- | | |
|----------------|----------------|
| 1. 離村をしてはいけない。 | 2. 博打をしてはならない |
| 3. 結婚してはいけない。 | 4. 船に乗ってはいけない。 |

しかしながら、寛政12年（1800年）からの3年間だけは流人の結婚が認められ、島の娘たちと結婚した流人は長生きしたという記録も残っています。また、天保年間に流された流人「安兵衛」は、酒を飲んで博打をしたあげく口論となり殺されてしまいますが、不憫に思った村人たちは小野篁が配流されたことで有名な光山寺の墓所に手厚く葬りました。平安時代や鎌倉時代の身分の高い人のお墓と思われる五輪塔や多宝塔と並んで建てられた四角い墓石には、安兵衛の名前と共に亡くなった年月日も刻まれており、島人の優しさをうかがい知る場所となっています。隠岐は人情の島と言われるゆえんです。

4. 世界に先がけた自治国家の樹立



隠岐でも尊皇攘夷運動が高まり、明治維新に先がけ慶応4年（1868年）に隠岐維新が起こりました。要因の一つとして飢饉による物価高騰などがあり一般的には隠岐騒動と呼ばれていますが、尊皇攘夷運動による思想的背景や外国船の度重なる出没による世情不安が大きな要因となっています。

当時、隠岐は天領であり松江藩預かりになっていましたが、松江藩の役人を追い出しパリコミュンより3年も早く自治政府を樹立した世界にも稀に見る出来事でした。

島後の島民三千人が武装決起をしましたが、武力ではなく書面の提出と議論によって役人たちを追い出し、餞別に酒や米を贈るといった優しい革命でもありました。

松江藩の反撃にあい、島民たちの夢であった自治国家の樹立はわずか80日間の出来事でしたが、立法院である会議所、内閣・行政府である総会所、司法府である目付役を置き、明治政府に先取りした三権分立の制度を取り入れた近代的な政治システムは地方自治の先駆けでもありました。

4-3 隠岐の神社

隠岐は離島でありながら立派な神社が数多く、総数は150社以上にも及びます。鎮座や創建の歴史は古く奈良・平安時代よりも遡るものもあります。延喜式神名帳には式内社として16座を数え、そのうち4座は名神大社の位を頂いています。本殿の造りは八幡造や神明造など様々ですが、隠岐造と呼ばれる出雲大社・伊勢神宮・春日大社の建築様式を合わせた独特の本殿を持つ神社もあります。国重要文化財指定のものも多く、大祭も県無形民俗文化財指定の珍しい神事が幾つか伝えられています。

また、巨木を御神体とする荒神さんや、大山神社に藁で編んだ大蛇を巻くといった古来からの風習も隠岐各地に残されています。

集落の中や近くには必ず神社がありますので、身近で隠岐の歴史の古さに触れることができます。

コラム22 延喜式神名帳（えんぎしきじんみょうちょう）

延長5年（927年）にまとめられた『延喜式』の巻九・十のことで、全国の神社の一覧です。延喜式神名帳に記載された神社を「延喜式に記載された神社」の意味で延喜式内社、または式内社といい一種の社格となっています。

『延喜式神名帳』に記載された神社の数は全国で2,861社あり、鎮座する神様の数は3,132座でした。

●式内社と式外社

式内社は、延喜式神名帳に記載されていた神社のことで、当時すでに存在していたはずなのに延喜式神名帳に記載されていない神社のことを式外社（しきげしや）といいます。

延喜式神名帳に記載されなかった（式外社）理由としては、朝廷の勢力が及ばなかったことや独自の勢力を持っていたことが上げられます（熊野那智大社など）。また、神社でありながら神仏習合により仏を祀っていたことや、僧侶が管理をしていた神社であったこと（石清水八幡宮など）、正式な社殿を有していなかったこともその理由となっています。

●式内社の社格

式内社は官幣社と国幣社とに分けられます。毎年2月の祈年祭に神祇官から幣帛（へいはく）を受ける神社を官幣社といい、その国の国司から幣帛を受ける神社のことを国幣社と言います。

・官幣大社・国幣大社・官幣小社・国幣小社

コラム23 延喜式（えんぎしき）

平安時代中期（延喜5年：905年）に、醍醐天皇の命により藤原時平らによって編纂された施行規則（格と式で構成されている）のことをいい、三代格式の一つとなっています。三代格式のうちほぼ完全な形で残っており、細かな事柄まで規定されていることから重要な文献となっています。時平の死後は藤原忠平が編纂に当たり、延長5年（927年）に一応完成しましたが、その後も改訂され40年後の康保4年（967年）より施行されています。

全50巻からなり、巻9・10は神名帳（延喜式神名帳）となっています。

●三代格式

平安時代に編纂された弘仁格式・貞観格式、延喜格式の三つの格式のことを言います。それぞれの格式が編纂された年号から名前が付けられていますが、実際の完成には時間がかかっています。

【弘仁格式】：嵯峨天皇が藤原冬嗣に命じて編纂したものです。

弘仁格：大宝元年（701年）から弘仁10年（819年）の間の法令（格）を編纂したもので一部現存している。

弘仁式：大宝元年（701年）から弘仁10年（819年）の間の施行細則（式）を編纂したもので一部現存している。

【貞観格式】：清和天皇が藤原氏宗に命じて編纂したものです。

貞観格：弘仁11年（820年）から貞観10年（868年）の間の詔勅（しょうちやく：天皇の意思を示した文書）および貞観11年（869年）に完成した法令のことで、現存していない。

貞観式：貞観13年（871年）に完成した施行規則で、現存していない。

【延喜格式】：醍醐天皇が藤原時平に命じて編纂したものです。

延喜格：貞観11年（869年）から延喜7年（907年）の間の詔勅を編纂したもので、延喜8年（908年）に施行された。

延喜式：延喜5年（905年）から編纂され延長5年（927年）に完成した施行規則のことで、康保4年（967年）から施行された。全50巻。

●**格式**：格式とは、法律（律令）を補うために出された法令集のことを言います。格（きやく）は法律の修正・補足のための法令をさし、式は法律の施行細則をさす。

◆島後の神社

【玉若酢命神社】（たまわかすのみことじんじゃ）

隠岐の島町下西

～二千年の時を見守る八百杉（やおすぎ）～

主祭神＝玉若酢命

○配祀神（はいしかみ）＝大己貴命・須佐之男命・稲田姫命・事代主命・須世理毘賣命

○境内神社・祭神＝若宮（十揆命）、池宮（淤迦美命）

○神紋＝五七桐

○本殿：隠岐造

○其他主たる建物：随神門、神庫



国重文の随神門



国重文の本殿



国重文の駅鈴



国天然記念物
八百杉

隠岐の総社として創建された神社で、創建の年代は不詳ですが延喜式神名帳では式内社に列せられています。島の開拓にかかわる神と考えられている玉若酢命を主祭神とし、大己貴命・須佐之男命・稲田姫命・事代主命・須世理姫命を配祀しています。社伝では、景行天皇が皇子を各国に分置し、隠岐国に遣わされた大酢別命の御子が玉若酢命であると伝えています。本殿は隠岐造りと言われる独特のもので、屋根は茅葺き。境内には高さ29m、樹齢2,000年と言われる天然記念物の巨木、八百杉（やおすぎ）があります。また、宮司を代々務める億岐家は隠岐国造（おきのくにみやつこ）の末裔といわれ、宝物殿には億岐家に伝わる駅鈴二個と隠岐倉印一個があり、国の重要文化財に指定されています。毎年6月5日に行われる例祭「御霊會風流（ごれえふりゅう）」では、神馬入れや流鏝馬の行事が行われます。（別項参照）

～ 隠岐一宮～

主祭神＝水若酢命

○配祀神＝鈴御前・中言神 ○社紋＝菊

○本殿：隠岐造 ○幣殿：石畳庭上 ○拝殿：切妻造



国重文の本殿



奉納相撲が行われる神社の土俵



拝殿横にある六世紀の古墳



幕末に尊皇攘夷の思想を広めた私塾「鷹徴館」跡の碑

水若酢神社（みずわかすじんじゃ）は、延喜式神名帳では名神大社に列せられる隠岐国の一宮です。旧社格は国幣中社。火災・水害などにより旧記を失っており、創建の由緒は未詳ですが、社伝によると仁徳天皇の時代の創建と伝えられています。

隠岐島後北部の重栖川上流に位置し、周囲には小規模な古墳もあり、神社周辺は古くから隠岐北部の中心であったと考えられます。

国史では、承和9年（842年）に隠岐国の他の3社とともに官社に預かったと続日本後紀に見えるのが最初です。祭神は水若酢命で隠岐国の国土開発と日本海鎮護の任務に当たられた神様と伝えられています。伝承によれば、古くは五箇村であった伊後の磯辺に海中よりあがられ、大峯山を越して五箇村に入られたと伝えられています。配祀神として中言神と鈴御前を祀っています。

大宮司を称する社家の忌部氏は、天文年間（1532～1554年）には隠岐国

造の末裔である隠岐氏の支配に対して、地元の勢力を味方に付けて反抗したとの記録があります。

幕末には社内に私塾「鷹鷹館」（ようちょうかん）を設けて尊皇攘夷を広め、これが後の隠岐騒動（隠岐維新）につながるようになりました。

本殿の造りは、妻入りの大屋根の前面いっばいに向拝（ごはい）が片流れでつく隠岐造と呼ばれる型式となっています。寛政7年（1795年）の竣工で、平成4年に玉若酢命神社本殿とともに、国の重要文化財に指定されました。

例祭は、西暦偶数年5月3日に行われます。（別項参照）

●中言神（なかごとのかみ）＝名草姫命

中言とは、神と人との間を取り持つ意味で、名草姫命はシャーマン（巫女）であったと思われます。名草彦命・名草姫命は和歌山地域の王であったことから、二柱を祀る中言神社は和歌山地域にいくつかあります。

コラム24 続日本後紀

続日本後紀は天長10年（833年）から嘉祥3年（850年）までの17年間を20巻にまとめたもので、貞観11年（869年）に完成しています。六国史（りっこくし）の中では『日本三代実録』に次いで記事は詳しいとされています。

【六国史（りっこくし）】

古代の日本の国家が編纂した下記の6つの正史のことをいいます。

（古事記は正史とはされていません）

- ◆日本書紀：神代から持統天皇まで（～697年）の時代が記述され、720年に完成。全30巻。
- ◆続日本紀：文武天皇から桓武天皇まで（697年～791年）の時代が記述され、797年に完成。全40巻。
- ◆日本後紀：桓武天皇から淳和天皇まで（792年～833年）の時代が記述され、840年に完成。全40巻。
- ◆続日本後紀：仁明天皇の時代（833年～850年）が記述され、869年に完成。全20巻。
- ◆日本文徳天皇実録：文徳天皇の時代（850年～858年）が記述され、879年に完成。全10巻。
- ◆日本三代実録：清和天皇から光孝天皇まで（858年～887年）の時代記述され、901年に完成。全50巻。

～ 久見神楽～

主祭神＝伊勢命

○境内神社・祭神＝愛宕神社（軒匂突命）

○社紋＝七五桐 ○本殿：隠岐造 ○通殿：切妻造 ○拝殿：入母屋造



随神門



本殿

続日本後紀によると「仁明天皇嘉祥元年、明神の列に預かりし趣名記せられ延喜の制に於いては名神大に列せられた」とあり、出雲大社より先に名神大社の位を頂いた古社です。

伝説によれば「一夜神光、海上より輝き来り、字仮屋の地に止り、以来夜々止まず。偶々神託を蒙る者あり、以って伊勢明神を奉斎せしより神火の出現甫めてやめたりと、此地は北西風強烈なるため間もなく現社地にせしり。」と伝わっています。県の無形民俗文化財「久見神楽」が、大祭のある西暦奇数年は7月25日に行われ、西暦偶数年には7月26日にそれぞれ行われます。

■隠岐の神楽

明治の文明開化で全国的にも途絶えてしまった神楽は、神事的な神楽と祈禱的な神楽が行われていました。隠岐の場合は海に囲まれた島国であったためか、無事に航海できることを祈願して行われたことも多かったようです。江戸時代、松江藩から役人が視察のために来島する際に、関係者は神社に集まり視察団の航海安全を願って神楽をあげたと伝えられています。

当時、神楽を専業とした神楽師を「社家」（しゃけ）と呼んでいました。一般の人たちが勝手に演じることはできず、代々社家から社家に正確に伝授をお願いする者（願主と呼ぶ）は、あらかじめ役所に届けることになっていました。

隠岐の神楽は島前神楽と島後の周吉（すき）神楽、穩地（おち）神楽に大別され、全盛期には全島で15以上の社家がありました。神社の祭りや遷宮から、豊作・大漁祈願、雨乞いや疫病退散の祈願など年中様々な場所で行われました。

島後神楽の特徴は、舞う広さが大変狭くほぼ畳二枚分の広さに決まっているところです。これは、本来神楽殿で舞われる神楽の伝統を忠実に守っているからだといわれています。また、石見神楽に代表されるような「見せる神楽」ではなく、見る人たちに背を向けて舞う古い形式を残しているところです。舞台の高い所から棚が設けられて、餅や御神酒などが供えられた神座が作られます。舞う人はこの神座に舞を捧げる形で行われ、観衆に媚びるようなやり方はあまりしないことです。

明治以降は社家制度が衰退し、一般の人たちが地域の行事として継承する傾向が強くなり、今津、東郷、代、福浦など各地で開催されてきました。現在は周吉神楽系譜の西村神楽と穩地神楽系譜の久見神楽が島後では双壁となって、毎年定期的に行われています。

夕方から始まり、夜を徹しての神楽は、時には酒を酌み交わしながら演ずる人と見る人たちが一緒になって、伝統的な御注連（おしめ）神楽や動きのある儀式三番八乙女神楽などを披露してくれます。



鹿 島



鹿 島

【久見神楽】

久見神楽は、隠岐神楽のうち島後の穩地神楽の系統のひとつです。久見神楽も江戸時代には社家により行われていましたが、明治以降の諸制度の改革や社会の変化により徐々にその維持が難しくなり、各集落の住民によって行われるようになりました。この久見神楽は、同じ穩地郡の油井（旧都万村）にあった和田社家から久見の住民が伝習し、現在まで続けられてきたものです。

舞には、各種の祈禱の際に行われる御注連神楽や、神社などの祭礼の際に行われる儀式三番八乙女神楽などがあります。現在は、年に一度伊勢命神社の例祭に儀式三番八乙女神楽を行っています。



恵比須



湯立



御座清



八神



湯立

参考として久見神楽のタイムスケジュールを下記に示しますが、その年によって変わりますのでご注意ください。

21:36	1 寄せ楽 (00:09)	23:40	6 花舞 (00:11)	02:54	10 随神 (00:29)
21:45	(終了)	23:51	(終了)	03:23	(終了)
21:46	2 神途舞 (00:09)		—寄付の披露—	03:52	11 恵比須 (00:13)
21:55	(終了)	00:08	7 八神 (00:25)	04:05	(終了)
22:06	3 入申し (00:08)	00:33	(終了)	04:28	12 鹿島 (00:23)
22:14	(終了)		—餅投げ—	04:51	(終了)
22:15	拝礼・膳		—寄付の披露—	05:00	13 御座の舞 (00:07)
22:37	(終了)	01:27	8 先払 (00:18)	05:07	(終了)
22:45	4 御座清め (00:12)	01:45	(終了)	05:11	14 剣舞 (00:04)
22:57	(終了)	01:57	9 湯立 (00:35)	05:15	(終了)
23:11	5 意趣の舞 (00:13)	02:32	(終了)	05:18	15 神納め (00:05)
23:24	(終了)		—寄付の披露—	05:23	(終了)
	—寄付の披露—				

～ 津戸の百手祭り ～

主祭神＝木華開耶姫命

○配祀神＝猿田彦命・十羅刹姫命・金山彦命

○神紋＝三葉柏 ○本殿：春日造 ○拝殿：入母屋造

○其他主たる建物：随神門、宝庫、参籠所

言い伝えでは、甲斐国浅間神社の分霊とされています。猿田彦命は都万戸ノ坂に鎮座の道祖神、十羅刹姫命は津戸の西小路に鎮座の宮崎神社、金山彦命も津戸西小路に鎮座の金比羅神社を明治41年に合祀しています。



随神門



拝殿

毎年3月28日、花生神社の例祭日に百手の神事が行われますが、この起源は隠州記によりますと、五郎王子を慕う祭りとして始められたと伝えられています。氏子の中から弓引きをする役主という男子2人（昔は長男のみであった）を選出し、祭日の10日前から師匠付きで弓の練習をします。3日前になると役主は袴を付けて練習し、祭礼の当日は朝早く海で禊ぎをした後、袴と刀を着け扇子を持って社務所で朝膳に座ります。

この席には役主2人、師匠2、神主3、氏子総代3、楽人8、先払い3、区長の計22人が同座します。魚、サザエ、ナマコを肴にそれぞれ一杯ずつ酒を飲み、次ぎにサザエのみそ汁でご飯を食べます。

海岸に設置された御旅所まで御輿により御分霊を奉遷して神事を行い、その後御旅所の前の浜で百手の神事が始まります。この神事は悪魔祓いであり、氏子全員の厄を背負って立った役主が弓を引き、矢を放って悪魔退散を祈る意味をもっています。役主のうち大前という年長者が、まず「カンの矢」(神の矢)という大声で叫びながら東西の山を目指して二本の矢を放ち、里の外に悪魔を追い払う儀式を行います。



御旅の出発前



大前による「カン」の矢

次に小前という役主も加わって、約20m離れた直径2mの的に向け二本組した矢を3回、計6本の矢を射ます。神事では的に当たることもさることながら、作法が最も重視されています。役主の射礼が終わると経験者が3人出て2本ずつ矢を射ますが、この時は作法はあまり重視されません。(三度弓といい、余興のようなものです)

この弓行事が終わると、御輿の行列は前と別の道を通って神社へ帰ります。神社での神事後、師匠は弓の弦と房を外し役主に与え、役主はこれを家に持ち帰り縁側から家に上がって神棚に弦と房をお供えし、子孫に家の誇りとして伝えます。



的に当てることよりも作法が重視される弓引き

—余談として—

役主は袴を付けると、本番中はもちろんですが練習中も言葉を喋ってはいけません。朝膳の時も、じっと正座をして朝膳が終わるのを待っています。神事が終わり弦と房を持って家に帰り縁側から家に入りますが、この時も喋ることは出来ないので家の人縁側の戸を開けてくれるまで待つこともあります。

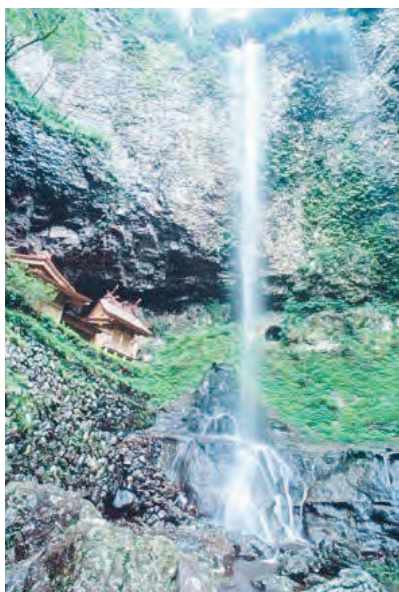
役主は弦と房を神棚に供え、袴を脱いで初めて、無事大役が果たせたと息を吐くのです。

～ 八朔牛突き大会 ～

牛突きの起源は、承久の乱（承久3年：1221年）で隠岐に流刑となった後鳥羽上皇を慰めるために始められたといわれています。以来島民の娯楽として全島で行われてきましたが、現在では島後にのみ残っています。島後の各所で催される牛突き大会の中で、旧都万村壇鏡神社の八朔祭り（9月1日）に開かれる奉納牛突き大会が最も伝統を持つ大会です。

大会の日には島内各地から盛装して集まった牛たちが、大勢の観衆に見守られながら東西に分かれて土俵入りを行います。本番に入ると、頭取の合図で仕切りに入り、しばらく見合った後激しい突き合いが始まります。

勝敗をにぎる綱取りのかけ声に、鋭く削った角で突き合い、巨体をぶつけ合いながら時には1時間にも及ぶ戦いを繰りひろげます。そのスリルと興奮は、一方の牛が悲鳴をあげて逃げ出した瞬間頂点に達し、勝った牛のまわりに人々が我先にと集まり、争って牛の背中に飛び乗ります。



壇鏡の滝も有名な壇鏡神社



土俵入りの状況



迫力ある横綱戦



戦意を失って逃げたら負け



勝ち馬に乗るのではなく、勝ち牛に乗る

旧都万村の上那久から那久川に沿って車で15分ほど山間を登り、駐車場から徒歩で5分あまり杉林を入ると壇鏡の滝と壇鏡神社へたどり着きます。屏風のような岩壁の中央に壇鏡神社があり、両側には高さ40mの二条の滝（雄滝、雌滝）がしぶきをあげて流れ落ちています。

この壇鏡神社の例祭が八朔祭りです。八朔とは旧暦の8月1日のことですが、太陽暦になってからは9月1日に行われるようになりました。この祭りで奉納されるのが八朔牛突き大会です。

780年余りも島民の楽しみの一つとして続けられてきた年中行事には、島外からも大勢の観光客もつめかけます。

また、壇鏡の滝の水は“勝利の水”ともいわれ、大会当日の夜中にはこの滝の水を汲み、牛に力水として与えるのです。

～ 長尾田の百手祭り～ (なごうだのももてまつり)

百手(ももて)祭りは悪魔退散、厄払いを行う神事のことで、元々二本一組(一手)で二百本(百組:百手)の矢を射ることからその名前が付けられたとされています。しかし、長尾田で行われる百手祭りは他の地域で行われる百手祭りとは異なっており、役主が化粧をしたり女の人が男装して祭事を行います。また、夫婦3組6人が役主を務めるところが特色の一つとなっています。

増補隠州記(貞享4年:1687年)には「長尾田 福浦の人家より拾五町余、山の後江南の方西に大海を受けて海岸に有人家十二三但北方分共交り居す」とあり、江戸時代から十数戸の集落であったようですが、この小さな集落にこのような百手祭りが今なお伝えられていることは驚くべきことではないでしょうか。

祭事は膳部式から始まりますが、この膳部式も他の地域と異なっており本膳(ご飯)が最初に出されます。次ぎに椀の蓋で計八回の酒を頂き膳部式が終了し、役主は海岸で二回目の禊ぎをした後、齊宅で化粧などの身支度をします。

一方、宮司、楽人は白山神社に登殿し祭典を行い、祭典終了後齊宅に集合します。一同が揃うと、先払いを先頭にして祭り場所へ移動し百手神事が始められます。

男三人による的射が行われ、その後女三人による的射が行われますが、途中「タモ振り」という玉網(タモ)を持った女の役主が面白い仕草をしながらの「汚れふき」「締め直し」の式が行われ、役主全員が九回ずつ的射を行います。最後に「タモ振り」(女の役主)が的に描かれた鳥・鼠を矢で滅多突きにして豊作豊漁祈願をし、更にタモで鳥・鼠をすくい取る仕草をして百手的神事が終了します。



～ 布施の山祭り ～

島後の東に位置する布施地区の中心部から西に1kmほど入った場所にある、巨木信仰の神社です。社殿はなく鳥居をくぐると御神体である樹齢400年の杉の大木があり、一山全体が神社として祀られています。祭礼は4月の初丑の日（現在は2年に1回西暦偶数年）に山の神の御霊を鎮めるために行われる、いわゆる山開き行事です。

祭礼の前日、若者たちが御神木に巻く葛を山から切り出してくる帯裁ち（おびたち）の神事が行われ、その後4m近い大柵を担ぎ集落を練り歩く大柵捲り（おおさかきまくり）で祭りの道中や地域を清めます。



大柵捲りは合計4回行われ、地域や道中を清めます。

翌朝、春日神社に集まり朝祝いを行った後、大山神社へ徒歩で移動し帯締め（おびしめ）の神事が行われます。



祭りが始まる春日神社



神事は酒盛りで始まります。

若者たちは大かずらを手に、御神木の横に一直線に並びます。太鼓にあわせて木遣りを歌いながら大かずらをゆすり、気合いのそろったところでかけ声とともに一気に御神木に7巻き半巻き付けます。そして、最後に巻き上げたかずらに、男の子を持つ住民が小さな幟を奉納します。



大山神社の御神木

合計三箇所です締りめ神事が行われますが、大山神社での神事が一番力が入ったものとなっています。

文政8年（1825年）の古文書に、「何時の時代から始まったのかは分からないが、昔、深山に魔神が棲んでいて、魔神による災難が多く人々は恐れて山の仕事が出来なかった。そこで、南の谷に大山祇之神社を祀ったところ、山は鎮まり人々は山の作業に就くことができた。老人の言い伝えをここに書き印す。」とあります。



多い年で30人以上が参加します。

勢い余って列から飛び出すと、子ども達から落ち葉を大量にかげられます。文字通り葉っぱをかけるのです。



一口メモ

7巻き半という数字は神様の数字を表しているともいわれています。神の使いである大蛇がとぐろを巻いて寝ている時、大蛇は7巻き半のとぐろを巻いているのです。

神事が行われる春日神社では不思議な自然環境を見ることができます。春日神社の境内に生えている黒松に、南方系の植物であるナゴランが着生して自生しているのです。（沖縄県名護市で見つかったことからその名が付けられており、隠岐ではフウランと呼ばれています）

そして、道路を挟んだ海岸では北海道・東北などの海岸で見られるハマナスが咲いているのです。このような道路わきでも隠岐の不思議な自然環境を体験することができます。

また、春日神社の鳥居の中央に、朝日が昇る光景を見ることが出来ます。“朝起きは三文の得”という諺がありますが、一度早起きをして、鳥居の中央に昇る朝日を体験してみたいはいかがですか？



ハマナス



ナゴラン（オキフウラン）

***ハマナス**：バラ科の植物で北海道、東北などの海岸でよく見かけられます。ハマナスという名前は、花が終わった後に出来る実が「梨」に似ていることから付けられた名前です。「ハマナシ」がなまって「ハマナス」になったということです。

～ 宇屋のだんじり舞 ～

隠岐の島町東町にある御碕神社に伝わるダンジリ舞は、全国的にも珍しい形式のダンジリです。ダンジリと呼ばれるものは全国的に多く、特に西日本各地に見られますが、「ダンジリ舞」と呼ばれるものは数が少なく、御碕神社のダンジリ舞は町指定の無形文化財になっています。享和3年(1803年)の神社遷宮に奉納されたのが始まりで、当地に流刑となった大阪の奉行と東町の庄屋との合作と伝えられています。

♪ところがるなる港から 出船入り船たえまなく

波静かなる時津風 真帆に嬉しき世渡りなりや

ヨーサイタ チョーサイタ

隠岐は西郷で西郷は隠岐で 栄えて賑わう港から

チョーサイタ♪

若者が声を張り上げて歌い、ダンジリに結び付けられた四人の子どもが太鼓をたたきながら合いの手を入れます。若者たちがかけ声をかけてダンジリを舞うように揺すり、ダンジリそのものがひとつの踊りとなって練り歩くのです。



東町にある御碕神社



ダンジリに結び付けられた子ども



ダンジリを揺する担ぎ手



踊りながらの行進

主祭神＝別雷命

- 配祀神＝素盞鳴命・玉安姫命 ○神紋＝双葉葵
- 境内神社・祭神＝大山祇神社(大山祇命)
- 境外神社・祭神＝大山祇神社(大山祇命) →神尾に鎮座
- 本殿：隠岐造 ○通殿・拝殿：入母屋造
- その他主たる建物：随神門、参籠所、神興庫



随神門



拝殿

寛保2年の賀茂神社伝記に「隠州賀茂大明神は、則ち山城国賀茂別雷皇大神宮と同徳一致の神なり」とあります。

賀茂大明神延喜式に「周吉郡加茂那備神社と号す」とあり、寛保2年の伝記に、隠州賀茂明神の鎮座は孝謙天皇の御宇天平年中、玉安姫隠岐国に到る。時に12月30日、舟を賀茂浦に繋ぎ神明を守り来て今の社地に宮を建立し給仕久しく終に卒す。」とありますが、玉安姫については詳細は不明です。

素盞鳴命は宇津宮から合祀されています。昔は加茂を本郷とし、西田、岸浜、箕甫、蛸木を枝郷として、それぞれの氏神である、切明、巖島、花生、姫宮の四社を摂社としていました。

延喜式内社として名神小社に列し、明治4年に村社に列格されており、毎年3月11日には、その年の新小学一年生の男子が弓を射る百手祭が行われます。

明治以前には2月11日に行われていたことから、今でもこの祭りを称して「二月祭り」とも言います。

また、玉若酢命神社の馬入神事では、拝殿前の馬入や境内での陣取りなど特権が与えられています。

主祭神＝大屋津媛命・抓津媛命・譽田別尊

○配祀神＝息長足媛命・玉依媛命・塩土老翁・建御名方命

○境内神社・祭神＝武内神社（武内宿爾・真人神・春日大社）

○社紋＝天健（あまたけ）：蔓あり三ツ柏 八幡宮：左廻り三ツ巴

○本殿：八幡流造 ○拝殿：入母屋造

○その他主たる建物：神饌所、収蔵庫、社務所、随神門、鳥居、塀



拝 殿

延喜式神名帳隠岐国三座の一つです。

素盞鳴命の子である大屋津媛命・抓津媛命は、兄の五十猛命と共に八十木種を植えて隠岐の国土を開き、抓津媛命は狭山にある幣の池の涌泉に鎮座し、大屋津媛命は大屋の仙洞に鎮座していたといわれています。

社伝によると、延喜6年7月13日に隠岐国周辺にやって来た新羅の船を天健金草神（あまたけかなかやかみ）が嵐を起こして沈めた事や、時化で避難した神功皇后を五十猛神の託宣で大屋津媛命・抓津媛命が出迎えたなどの記録があります。

神功皇后の船が暴風に見舞われたあたりを吹浦湊（ふくうらみなど。現在は福浦となっています。）、風が凪いだ浜を諾浦濱（なぎうらはま。現在は那久（なく）となっています。）、上陸された海岸を王着汀（おおつくはま。現在は大津久（おおづく））と呼んだという地名の由来も記されています。大屋津媛命・抓津媛命の名が大屋や都万の地名の由来となったといわれています。

また、隠岐に流された後醍醐天皇が都への帰還を願った神社ともいわれています。

◆島前の神社

【宇受賀命神社】（うつかのみことじんじゃ）

海士町大字宇受賀

主祭神＝宇受賀命

○配祀神＝太田命・大宮姫命

○境内神社・祭神＝早苗開の神事（神饌田田植際）

○本殿：春日造変態

○幣殿：木造瓦葺

○拝殿：木造瓦葺

○その他主たる建物：参籠所



鳥居



本殿



本殿

創立については詳しく分かっていませんが、資料に初めて登場するのが仁明天皇の時代、承和9年（842年）に「9月隠岐国智夫郡（ちぶぐん）由良比女命神、海部郡宇受賀命神、隠地郡水若酢命神」（続日本後紀）とあります。

次に延喜式には「海部郡二座〔大一座、小一座〕奈伎良比売命神社、宇受加命神社〔名神大〕と載せられています。」

祭神については、続日本後紀および延喜式では「宇受賀命神」となっていますが、元禄16年の島前村々神名記には「宇受加命神社名神大、倉稲魂命、宇受賀大明神」とあり、隠岐国神名記（年代不詳）には「宇受賀大明神、所祭神三座倉稲魂神大五穀神ナリ、大宮姫、大田姫」とあり、いつの頃からか三座奉られていることになっています。

海士町における神社で祭神数が複数のものは明治期に合祀したものが大部分ですが、宇受賀神の場合は合祀の記録がなく、三座となった経緯が不明です。おそらく宇受賀命が古典にない土着の神様であったため、近世になって二座を加えて奉るようになったと思われる。

主祭神＝大日貴尊（焼火大神）

○境内神社・祭神＝大山神社・弁天社・船玉社・雲上宮・東照宮・五郎王子社・金重朗社・オノ神社あり、雲上宮は明治までの本地佛

○社紋＝三つ火紋

○本殿：権現造、木造銅板葺　　○幣殿：権現造　　○拝殿：権現造

○その他主たる建物：神饌殿、客殿、社務所、倉庫



岩穴に建てられた本殿

「焼火山（たくひやま）」は元々「大山（おおやま）」と呼ばれ、知夫郡美田郷の最高峰（452m）で古くより神奈備山（かなびやま）として信仰されていました。平安末より中世にかけて、修験者によって山頂岩穴に社殿が造られ焼火権現として奉られていたと考えられますが、縁起書（万治2年）によると、一条天皇の時代、焼火山の南海岸の海中より神火が現れ、山中に入ったのを里人が追って入ったところ、現在の社殿背後の奇岩を発見し、これを神として大山権現、又は石尊権現として奉ると記されています。

また、「たくひ」という神名は、承久の乱により隠岐に流された後鳥羽上皇が、隠岐に渡る途中夜になり方向が分からなくなったとき祈願をすると神火が現れ無事に到着したことから、感謝のため神社に参拝し、それまで大山と呼んでいたのを「たくひ」にするよう仰せになったことから「焼火（たくひ）」になったと記されています。

しかし、栄花物語（巻36）の中に「たくひの神のしるしばかりに」という歌が出ていることからすると、少なくとも平安末期にはすでに「たくひ」という神名が中央にも知られていたことが分かります。

このように、焼火神は海上生活者が難船に及ぶとき、祈願を込めると神火が

現れるという出来事によって中世以降は益々その信仰は盛んとなりました。特に近世、日本海航路の発達とともに信仰圏はより広くなり、日本海沿いはもちろんですが太平洋岸の船人まで信仰されました。

北前船の時代に海上安全の神として各地に焼火権現の末社が点在したため、安藤広重・葛飾北斎等の版画「諸国百景」では隠岐国の名所として焼火権現が数多く描かれています。(ただ、実際に焼火神社を訪れたのではなく、伝間によって描かれたようです。)

神火が由来とされる籠灯祭りという神事が行われ、以前はその時に隠岐島全体から集って神社の社務所に籠り、神火を拝む風習がありました。現在もその名残を留め、旧正月の5日から島前(どうぜん)の各集落が各々日を選んでお参りする「はつまいり」が伝承されています。

例大祭は7月23日・24日の2日間行われます。

社殿は隠岐で最も古く、享保17年(1732年)に改築されたもので国の重要文化財に指定されています。大阪で作成された部材を船で運び、米子の大工が現地で組み立てるといふ当時としては画期的な建築方法で建立されました。



初参りのお札を受け取る



直会(なおりい)の膳

主祭神＝由良比女命(須勢利姫命)(旧郷社)

○境内神社・祭神＝伊勢之宮(天照大神)・恵比須社(事代主大神)・豊受宮(豊受大神)・出雲大社(大国主命)

○社紋＝丸に並び矢

○本殿：大社造変態桧皮葺(春日造変態) ○幣殿：木造銅板葺造

○拝殿：入母屋造木造銅板造

○その他主たる建物：祭器庫、随神門、社務所



拝殿



本殿



灯籠のイカ



拝殿のイカ

延喜式の名神大社で仁明天皇の承和9年に鎮座。国内神名帳に従三位上由良比売大明神で仁明天皇の承和15年、陽成天皇の元慶元年に祈禱ありとあります。『土佐日記』にも「ちぶり神」とある。平安時代に隠岐国一ノ宮に定められました。例大祭は二年に一度7月28日、29日に行われます。巻き網運搬船三隻を連結した神船に御輿を載せ大漁旗をたなびかせながら海上渡御をする華やかな祭で、初日は御輿が若者達に担がれ「チョーヤサ、チョーヤサ」のかけ声とともに町を練り歩いた後、神船に乗せられ由良の港から浦郷湾をゆっくりと巡航し、御旅所に向かいます。翌日は還御祭があり神社拝殿に納められます。また、神社前の浜は大量のイカがうち上がる「イカ寄せの浜」として知られており、拝殿や境内の灯籠には江戸時代の見事な彫刻が施されています。

～ 一宮神社 ～

主祭神 = 天佐志比古命

○本殿：春日造変態 ○幣殿：木造瓦葺 ○拝殿：木造瓦葺

○その他主たる建物：社務所、神饌所、祭器庫、芝居小屋



参道



拝殿



本殿



神社脇にある後醍醐天皇腰掛の石

知夫村の人々からは一宮神社(いっくうじんじゃ)と呼ばれており、縁起書(延応元年：1239年)によると、用明天皇の時(585～587年)に新府郡(にぶり：現在の仁夫里)の南にある中之島に現れた神様であると書かれています。知夫郡由良郷の先住者によって祀られた神であると思われます。続日本後紀に「承和15年2月隱岐国天佐自比古神従五位下」とあり、延喜式には知夫郡七座の内の小社「天佐志比古神社」とあります。

近世になってからは、元禄16年(1703年)の「島前村々神名記」には「天佐志彦命神社 知夫村一宮神社」とあり、すべての書物に「一宮大明神」と記載されていますが、西ノ島にある由良比女神社が島前地区の一宮(いちのみや：総氏神)とされているので、一宮(いっくう)神社は知夫村の一宮として現在も信仰されています。

4-4 島前の祭り

◆由良比女神社の船祭り（西ノ島町）：西暦奇数年7月末の土日

西ノ島町浦郷に鎮座する由良比女神社は、延喜式の名神大社です。この神社の例大祭で隔年の7月末に行われる神幸祭は、神輿を御船にのせて渡御するいわゆる「船祭り」です。船祭りの型が出来たのは資料によると江戸時代の安永二年（1773年）になってからと思われます。初期の頃は手漕ぎの漁船であったと思われますが、船が大型化するとともに、「御船」もだんだんと大きくなり現在のような型になりました。

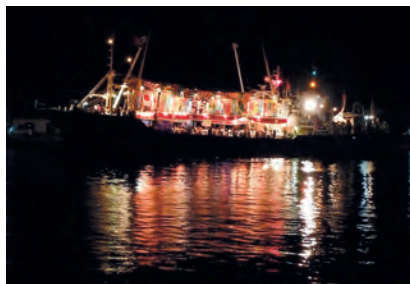
神社を出発した神幸は、境内を出ると陸路をねってから神輿を御船に乗せるのですが、その間八重櫓を持った役員が神輿のまわりに付いて見守ります。御船は3艘の大型船を横三列につないで、その中央の船に神輿をのせます。

神輿が御船に乗ると出航となります。港を出て約1時間程の沖合いまで巡幸し、この間、神輿の前では神楽舞が奉納されます。着岸すると御仮所までの間神輿ねりがあって、御仮殿に入れます。そして一夜御仮殿に留め、翌日還幸があって祭りが終了します。島前地区にはこの外にも別府鎮座の「海神社」でも船祭りが行われています。海神社の船祭りの始まりは詳しく分かりませんがこの社に残されている「御船祭中興帖」（弘化4年：1847年）には祭りの次第が詳しく記載されています。

島前の祭礼には、神輿による「神幸祭」が各社で行われていますが、その殆どが明治以降であり、明治以前からの社は焼火神社、由良比女神社、海神社の3社だけです。



御輿ねりをする男たち



御輿を乗せた船

◆日吉神社の庭の舞（西ノ島町）：西暦偶数年10月

日吉神社は西ノ島町の浦郷に鎮座しています。残されている伝承によると、元々、近江国滋賀郡真野庄に祀られていたようですが、後白河法皇の時代（1169年～）にそこの領主であった真野宗源が戦乱を避けるために隠岐に逃れたとき、日吉神社に仕える神主とともにこの地に奉遷したということです。

ここの日吉神社に伝わる山王祭は、①真言 ②庭の舞 ③神の相撲 ④十方拝礼（田楽） ⑤神楽 の五つの舞が奉納されることから、いつの頃からか「五本の祭り」とも呼ばれるようになりました。

「庭の舞」と名付けられる芸能は他の地域には見当たりませんが、その内容から雅楽の「東遊」（あずまあそび）であったと思われます。

また、舞の名称から、初期の頃は庭上（外）で舞われていたものと考えられます。

この「東遊」は、現在でも京都の加茂神社（上、下）石清水八幡宮などでも奉納されているように、関西の神社ではよく見かけられることから、日吉神社が近江国に祀られていた頃から奉納されていたものと思われます。

六人の舞人は各々侍烏帽子、白狩衣姿で手には扇を持ち、拝殿両側に3人ずつ座り座前に白幣を置いて一人ずつ順番に舞います。6人全部が舞い終わると今度は一同が立って神座に面して二列縦隊となり、交互に歌いながら舞が行われます。

美田八幡に奉納される十方拝礼とともに、平成4年に国の重要無形民俗文化財に指定されています。



庭 の 舞

◆美田八幡の十方拝礼（しゅうはいら）（西ノ島町）：西暦奇数年9月15日

美田八幡宮と日吉神社の祭礼に奉納される田楽は「十方拝礼」と呼ばれ、平成4年（1992年）に国の重要無形民俗文化財（美田八幡宮田楽）に指定されています。いつの頃から行われていたかについては定かではありませんが、美田八幡宮に残る「八幡宮祭礼式書」によると、室町時代（1338～1573年）末期にはすでに行われていたと思われます。

美田八幡に伝わる「十方拝礼」も「近江田楽」の系統で、日吉神社に伝わる「庭の舞」と同時期に伝えられたと言われていますが、どのような形で伝えられたのかははっきりとしていません。

美田八幡宮の祭礼は現在、隔年の9月15日に行われていますが、旧暦の頃は8月15日に行われていました。祭礼は「神の相撲」「獅子舞」「田楽」の三種類によって構成されており、旧美田村の各里ではそれぞれ田楽に関連した役割を分担しています。市部里は賄い方、小向里は囃し手（はやして）と神の相撲、大津は踊り手などといった分担をしていますが、その中でも一番の主役は大津の踊り手です。選ばれた踊り手は旧暦の8月1日（八朔）から習礼に入り、祭礼の前日には笠揃いと称して本番と同じ衣装を着けて習礼を行います。

当日は、八幡宮の拝殿前に設けられた棧敷で、「獅子舞」「神の相撲」が行われた後「田楽」が奉納されます。



美田八幡の田楽（十方拝礼）

◆島前神楽：西ノ島町、海士町、知夫村

隠岐には素朴で古風な神楽が伝えられています。特に隠岐の神楽の場合はその担い手が出雲や石見と違って、「社家」と呼ばれる神楽専門の人々によって伝えられてきました。島後東部の旧周吉郡（すきぐん）では七社家、西部の旧穩地郡（おちぐん）では六社家、島前では五社家が神楽を行っていましたが、現在では一般の方による保存会によって行われています。

隠岐神楽の場合、島後の周吉神楽、穩地神楽、島前神楽の三種類に分かれています。 「祈禱の神楽」として伝えられたため巫女が重要な役割を果たしていることも特徴となっています。

島前と島後の神楽では、島後神楽の悠長な囃子に対して島前神楽は速めで賑やかな囃子であること、大蛇退治の「八重垣」は島後神楽にはなく島前神楽だけの演目である、同じ演目でも内容が異なるなどその芸風に違いがあります。

島前神楽では、毎年西ノ島町美田の焼火神社で開催される神楽が有名ですが、同町浦郷の由良比女神社のものは、船上で舞われる点が島前神楽の中でも特徴となっています。

この島前神楽は、①巫女による神懸りの形が保存されている、②出雲神楽の元の形が残されている、と思われる点があり、古い形態のまま保存されている、③演戯のみでなく、神事の要素も保存されている、ということから、昭和36年（1961年）に島根県の無形民俗文化財に指定されています。



神 途 舞



巫 女 舞

◆シャアラ船流し（西ノ島町）：西暦奇数年9月中旬

シャアラ船とは精霊流しをする船のことをいい、西ノ島の場合「ショウリョウ船」がなまって「シャアラ船」になったとされています。精霊流しは盆に迎えた祖先の霊を送る行事で、海岸や川の近くでは船を作って供物を乗せ流すのが一般的です。西ノ島でも8月16日に行われていますが、東部地区と美田、浦郷地区とではそれぞれ方法が異なります。

東部地区では各戸がそれぞれ供物を直に海に流し、シャアラ船を作るのは初盆の家だけなのに対して、美田、浦郷の地区は集落で大型のシャアラ船を作って16日の早朝に流します。その規模は3～10mと大きく華麗な形をしています。

以前は8月に入ると子どもたちが集落内の一戸一戸から寄付や材料となる麦藁竹を集め、集会所などに泊り込みでシャアラ船作りを行っていたこともあったようです。シャアラ船は、キール、フレームなど船の骨格部分は木と竹、外板は小麦藁で作られます。美田の船越で作られる船が最も大きいのですが、派手さを競うために年々大きくなっていったようです。

また、船型は北前船をモデルにして作成したといわれていますが、洋式の帆船に似ています。帆をかたどって張られた縄には経文を書いた無数の色紙幡が結び付けられていて、海に浮かべるとちぎり絵を見るような美しさです。



海に浮かぶシャアラ船



珍崎地区のシャアラ船

◆古海地区の蘇民将来（うるみちくのそみんしょうらい）（知夫村）：毎年1月12日

知夫村の古海地区には大変興味深い風習が残っています。毎年1月12日の地区の「お日待ちの日」に、地区に出入りする7ヶ所の道路沿いに「蘇民将来末社小神」と書いた長さ30cmほどの柳の枝を刺していきます。この風習は、地区に悪い伝染病が入ってこないようにするためなのですが、近年全国各地の発掘調査で「蘇民将来」と書かれた古代～中世の呪符木簡が発見されており、古海に伝わる「蘇民将来」符は現代に伝えられた呪符として注目されています。

「昔、北の海にいた武塔の神が、南の神の娘を妻に迎えようと思いかけたところ日が暮れてしまった。一夜の宿を借りようと思いきや豊かな弟に頼んだが断られ、兄の蘇民将来は貧しかったにもかかわらず快く宿を貸した。年がたつて武塔の神が八柱の御子を連れて帰るときに、兄の蘇民将来に、『お前に報いよう。お前の子孫はいるか』と尋ねたところ『娘と妻がいます』と答えた。武塔の神に茅の輪をつけよといわれたのでそのとおりにすると、その夜、蘇民の娘一人以外を皆殺しにしてしまった。武塔の神は『私はスサノオの神である。今後、疫病が流行った時に蘇民将来の子孫であると言って、茅の輪を腰に着ければ疫病から逃れることができる』といわれた」という言い伝えによって現在も行われていますが、隠岐の中でもこの古海地区にだけ見られます。



準備された木杭



立てられた木杭

4-5 島後の三大祭り

◆水若酢神社の大祭／山曳神事（旧五箇村）：西暦偶数年5月3日

水若酢神社は延喜式の名神大社で隠岐国一の宮です。鎮座は隠州視聴合記によると崇神天皇の御代と記され、言伝えによると仁徳天皇の御代といわれています。

祭礼風流のなかでも、7歳くらいまでの男の子が引く山曳神事は独特のもので、鶴亀を乗せ蓬莱山に見立てた山車を無病息災の願いを込め子供達が引きます。

その起源は500年ほど前の明応年間（1500年頃）に神社が大洪水で川下に流されてしまい、御神体を山車に乗せ引いて帰った事に由来します。河口近くから数キロも上流へ、南方（みなみかた）、北方（きたかた）の氏子たちが旗を立てて笛を吹き太鼓を叩き御神体と共に社地まで引き上げたと言われてい

ます。他に、流失した御社殿を再建するためのご用材を山から運び出した行事にちなみ、貞享5年（1688年）頃より始まったとも伝えられています。

例祭の記録は、享禄年間（1530年頃）の文書には陰暦9月9日。寛文4年（1664年）の文書には、今までは5月1日に行っていたが3月3日に改めたとありますが、明治4年、国幣中社に列格されてから5月3日になり今日に至っています。この大祭は「水若酢神社祭礼風流」として島根県無形民俗文化財に指定されています。御旅所では神楽や獅子舞が奉納され同時に流鏝馬も行われます。流鏝馬は平安時代から続いているといわれています。古式を残す神事から古い伝説が感じられます。



山曳の出発



神楽の猿田彦の舞



願満寺に伝わる獅子



獅子舞の最中に行われる流鍋馬



浦安の舞



戻り山

◆御霊会（ごれえ）風流：毎年6月5日

隠岐の島町下西の玉若酢命神社は隠岐国の総社で隠岐国造億岐家が代々宮司を勤めています。

毎年6月5日の例祭を御霊会（ごれえ）と称し、馬入れの勇壮な神事が行われます。御霊会とは悪霊退散の儀礼から来る名で、祭日が旧暦では5月5日の端午の節供の日であることから、諸処の悪霊を祓い清めて豊作を祈る祭事となりました。現在は、悪霊退散の儀礼の要素は少なく豊穰を願う意味の祭となっています。

6月1日から祭りまでの間、馬付（うまづき）達は食事の火と寝床を家族とは別にして、社務所や集会所などで寝起きを共にして潔斎を行います。祭り当日は午前10時頃本殿祭が始まり、本殿祭が終わる頃、各地の氏神を奉斎した神馬が準備を整え当社周辺の休憩所に集結します。午後2時頃、神幸祭準備完了の鑿（どう）が打ち鳴らされると、神馬は大鳥居めがけて集合します。境内に陣を取っていた加茂・西田の神馬が鳥居の外まで下るといよいよ馬入が始まります。以前は8頭が連なって馬入を行っていましたが、あまりにも危険な為、現在は先ず4頭が別々に行い、後の4頭が連なって馬入を行います。馬入れは境外末社、宮司宅内庭、祭場（御旅所）でも行います。馬入りの後祭典があり、続いて御旅所までの巡幸（神幸祭）が始まります。御旅所に馬入をした後、宮人という翁、姥、嫡息役の小学生3人が杉の葉を稲に見立てて田植え式を行います。御旅所前の道では草競馬の他、三個的的に十二矢を射る流鏝馬を行い悪霊退散と豊作を祈ります。御霊会風流は勇壮な中にも古式を伝える神事です。

昔、馬入は48頭の神馬が馳せ入ったと伝えられています。



上西・下西の神馬



西郷の神馬



東郷の神馬



大久の神馬

御霊会では8頭の神馬が馬入れを行います、西四匹（西郷、上西・下西、原田）の馬付きは袴を着けるのに対して、加茂と東三匹（大久、東郷、飯田）の馬付きは袴を着用しません。



馬入れ神事が終了し御旅が出発する



御旅所近くでの草競馬



御旅所では田植え神事が行われる



御旅所近くでの流鏝馬

◆武良祭（むらまつり）風流：西暦奇数年の10月19日

隠岐の島町の中地区に伝わる武良祭風流の武良の名は、承平7年（937年）に編纂された『和名抄』に、この地域を武良郷とあることから由来します。

参加する地域は西村・湊・中村・元屋・旧布施村大字飯美・布施です。祭の起源は建久4年（1204年）、幕府より隠岐地頭を拜命した佐々木定綱が隠岐を訪れたことに始まると言われています。

佐々木定綱が隠岐を訪れた際、隠岐の気候は不順、五穀も不作、人畜ともに病災で人々が苦しんでいたとされ、その実状を救済することが地頭の責務であると考えた定綱は、本国近江の国より日月そのほかの神々を勧請し日神を元屋の八王子神社に、月神を中村の常楽寺（現在、月神は中村の一之森神社に奉斎されている）に奉斎するなどして日月陰陽和合の祭事を行いました。

すると人畜は無病息災、五穀は豊作になったと言われています。10月7日、祭の大役を決定する頭宿（とうやど）始めを行います。役が決定するとすぐに、陰陽胴、楽人、行事役神相撲、占手、巫女舞の練習が始まります。そして16日には村総出で準備を行う「らちん」、役付は自分の祭典を作る「與飾」をし、流摘馬の人々は八幡社へ参籠練習となります。

迎えて18日は神々の参集夜宮、翌日19日は本祭です。武良祭は、神々の打ち別れが行われる20日まで、延々14日を要す一大行事です。祭りの最大の特徴は、主斎神である日神・月神の御神体（地元では御尊像と呼んでいる）を1丈4尺4寸（約4m）の竿を頭上に捧げてそれぞれの神社から御幸し、通りで出会った後、別々の路地から祭場（御旅所）に入り参加した全地域の神様が同時に祭りを行うことです。

御尊像は、仏教の十二天部の日天・月天の手に捧げる宝珠を形どり、直径2尺余（約60cm）の円盤に日神は三本足のカラス、月神は白ウサギを浮き彫りにしています。神事は化粧した若者が「ヘンヨー」と掛け声をかけ太太鼓の舞打を行う「陰陽胴」や小学生が相撲を奉納する「神相撲」、青年2人が刀の礼拝等を行う「占手」、その他「流摘馬」「競馬」「巫女舞」などが行われます。



太陽と月が交わる陰陽和合祭



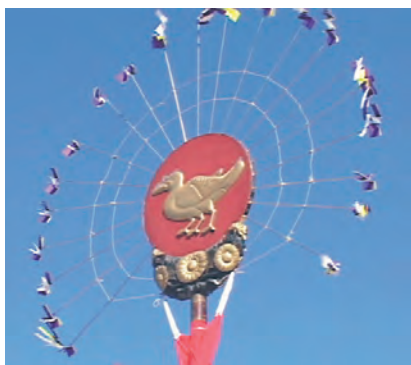
相撲の神事の神相撲（こずま）



浦安の舞



祭りの進行を知らせる陰陽胴



八王子神社の御神体「ヤタガラス」



一之森神社の御神体「白兔」

4-6 島後の祭り

◆隠岐国分寺蓮華会舞 ～天平文化を今に伝える～

国分寺は、741年（天平13年）聖武天皇の詔により建てられた官寺で、国ごとに僧寺と尼寺が建てられました。隠岐国分寺（真言宗）は、出雲国国分寺とほぼ同じ時期の768年頃の建立と考えられています。また、後醍醐天皇の行在所と伝えられており、境内奥には天皇が過ごしたという国分寺旧本堂跡の礎石が並び国指定の史跡となっています。

倒幕に失敗し捕らえられた後醍醐天皇は、1332年（正慶元年）に隠岐に流され一時期国分寺で過ごされたと言われています。1950年（昭和25年）に再建された本堂は、2007年（平成19年）2月25日に宝物と共に火災によって焼失してしまいました。

毎年4月21日に催される隠岐国分寺蓮華会舞（国無民）は、かつては120の舞を奉納したと云われますが、現在は眠り仏・太平楽・山神貴徳・竜王などの七演目の舞が演じられており、舞楽系の流れを今に伝える隠岐独特の芸能です。

1977年（昭和52年）5月には国の重要無形民俗文化財に指定され、蓮華会舞の面は1974年（昭和49年）12月に県指定の文化財になっています。

〈蓮華会舞の解説〉

隠岐国分寺の「蓮華会舞」は、毎年、弘法大使の月遅れの忌日、4月21日に行われる舞楽奉納です。「眠り仏之舞」「獅子之舞」「太平楽之舞」「麦焼きの舞」「竜王之舞」「山神・貴徳の舞」「仏之舞」の7曲が演じられます。舞の前に顔見せの「行道」という行列が練り歩き、舞の後には音楽だけ奏される終了の曲「入れ舞」があります。国分寺本堂の前に設置された仮設舞台は、舞手や楽人達自ら組み立てます。木組みで出来ている舞台は舞手の足の運びによって表情豊かな響きを聞かせ、楽とのコラボレーションとなり「蓮華会舞」に音響効果を与えています。隠岐の「蓮華会舞」とルーツを同じくしていると云われているのが大阪四天王寺の聖霊会舞楽ですが、今から千年以上も前の奈良時代か平安時代に盛んだった会舞が都から隠岐に伝えられたのではないかと考えられています。特に「眠り仏」「獅子之舞」「仏之舞」は、現在の伝統的な舞楽の中には見当たらず古い伎楽の名残を留めているものといわれています。



行道



眠り仏

【行道】

舞の始まる前に「行道」と呼ばれる顔見せの行列が、舞台の周りを行進します。行道とは仏教の儀式で、仏の周りを経を唱えながらまわることがありますが、蓮華会舞では舞手と楽人達やその他の参加者が舞台の周りを時計回りに回るものです。先祓いの猿田彦を先頭に舞台を三周する間、装束をつけた楽人たちも、笛、太鼓（大胴）、妙鉢（シンバルの形をしたもの、鏡鉞、銅鉞とも呼ぶ）を演奏しながら一緒に回ります。猿田彦は何故か舞には参加しませんが、悪魔を退散させる行道の先祓い役です。

舞楽では最初に演じられる「振鉞」がその先払いの役目を担っており、鉞をもった舞人が鉞で地面をならすような舞振りがあります。日本各地に伝えられる舞楽の多くは「振鉞」に相当する舞が見られますが、蓮華会舞では「振鉞」は行われていません。

【眠り仏之舞】

「眠り仏之舞」は小学生低学年の男子二人によって舞われます。腰にサンダワラという俵を二つ付けた二人の仏が居眠りをしている滑稽な場面から始まり、仏のサンダワラを舞台の下にいる獅子が噛んで起こすと、二人の仏はあわてて相撲を取る場面へと変わります。獅子の噛んだほうが勝ち、二回の取り組みで一勝一敗でおわります。「眠り仏」の二人は、白い布を頭に巻いた上に菩薩のような仏の面を付け着物を着てモンペ風の袴を着装（足首で袴の裾を絞る）し、足には白足袋を履いています。



獅子舞



太平楽

【獅子之舞】

「眠り仏」にも加わる獅子が舞台上上がり舞います。舞台上で大きく体を揺すったり足を上げながら舞った後、舞台の四隅に立っている幟を立てた笹に噛み付きます。東西南北の四方を清める意味もありますが、幟に書かれた「国家安康」「家内安全」「天下泰平」「五穀豊穰」を祈願するとも云われています。

「獅子舞」は日本全国各地に見られる民俗芸能の代表的なものですが、蓮華会舞の獅子頭は日本の民俗芸能に見られる獅子顔と違いインドネシアのパロングダンスに登場する獅子頭に似ており、頭上に角が一本あり耳が立っています。大阪四天王寺に登場する「獅子」も同系統で伎楽の獅子に似ています。蓮華会舞の獅子は大阪四天王寺の獅子が伝わったものと考えられています。

【太平楽之舞】

「蓮華会舞」の中で唯一、面をつけてない舞です。「太平楽」は宮内庁楽部や四天王寺でも演奏されますが、各地に伝わる舞楽でも舞われています。舞楽や四天王寺の「太平楽」は、古代中国の戦士のいでたち（甲、鎧、脚絆などを装着する）に刀や槍などの武具を持って舞う勇壮な舞ですが、地方に見られる「太平楽」でこうした装束で舞うところは殆どありません。蓮華会舞の「太平楽之舞」は、四人の少年たち（小学生と中学生）が薄化粧をし、直垂に袴を持ち、白足袋を履いて鳥甲を頭に刀を腰に差し槍を持って舞います。途中で刀を抜いたり槍をもって舞うのは舞楽のほかの「太平楽」と似ていますが、音楽は異なり、小中学生が舞うため勇壮というより可愛らしい舞です。



麦焼き



山神貴徳

【麦焼き之舞】

「麦焼き之舞」は田楽の名残を残すもので農作業の様子を表現しています。面は黒い翁の面で腰を曲げ年老いた人を表現していますが、舞っているのは小学生です。茶色の布で頭の後ろ包み頬かむりした上に面を付けています。装束は袖口を縛った薄茶色の格子規様の袴をつけ足首を縛っています。白足袋を履き右手に白い扇子をもって舞います。舞の中でひざまずいて種を蒔くしぐさがあり、「蓮華会舞」の中でも島の生活に馴染んだ舞といえます。

【山神・貴徳之舞】

この舞は元々「山神」と「貴徳」という二つの舞いが一緒になったものです。「山神」は「散手」が訛ったものと考えられ、隠岐独特の表現となっています。舞楽では、「散手」（左舞・赤色装束）と「貴徳」（右舞・緑色の装束）はそれぞれが鉾と太刀を持ち、竜甲を被って舞う一人舞で、「散手」の次に「貴徳」が舞われるのが一般的です。蓮華会舞の場合はどちらかの曲が伝承されなくなったときに、残ったほうの曲と一つにまとめられたと思われます。この舞の一番の特徴は二人の舞人が舞台の上で最初から最後まで鏡のような動きをすることです。舞台に向かって左の舞人は「山神」で、赤い面をつけ赤い布で頭を覆い先に赤い房のついた鉾を持っています。右の舞人が「貴徳」で緑の面をつけ緑の布で顔を覆い先には緑の房がついた鉾を持っています。山神と貴徳が鉾をもってゆっくり舞う部分と鉾を置いて舞う速度の速い部分から構成され、「麦焼き之舞」と同じように農作業をあらわす様な舞の振りも見られます。



竜王



仏の舞

【龍王之舞】

龍王之舞は中国から伝わったといわれ、舞楽の「陵王」をもとにしていると考えられています。日本各地に伝わる舞の中にも「陵王」という曲は多く見られますが、隠岐だけは「龍王之舞」という名称が使われています。王が竜の面を着けて舞うので蓮華会舞では「龍王之舞」と呼んでいます。

舞人は赤い袍（ほう）の上に赤色系の裯襦（りょうとう：打掛のこと）を着用し、カラフルな赤色系の袴を着け舞います。舞楽の「陵王」は右手に金の短い桴（バチ）をもちますが、隠岐では両手に銭太鼓を持ち白足袋で舞います。この舞だけが途中で無伴奏になり、激しく床を踏み鳴らしながら舞台を一杯に使った豪快な舞いは、無言の仮面劇とも呼ばれ「蓮華会舞」の中でも一番の見所となっています。

【仏之舞】

「仏之舞」は二人の大人が白い着物の上に紫色の千早という短い上着をはおり、白足袋姿で舞います。白い布を頭に巻きつけ上にかぶる面は伎楽の菩薩面を思わせます。全体にゆっくりとした舞で二人の仏は向き合い同じ動きをしたり、背中合わせになり別々の方向を向いたりします。龍王之舞と打って違って優雅で荘厳な舞です。右手に白い扇子を持ち左手は人差し指一步印だけを伸ばしたまま舞いますが、途中で扇子を懐にしまい二人が両手を取り合って舞う場面もあります。テンポの速い旋律が奏し始められると、二人の仏は扇子を再び開き、扇ぎながら舞台を廻ります。当時の都の優雅さを伝える舞の一つです。

【入れ舞】

全部の舞が終了すると、最後に「入れ舞」という行列が舞台の周りを行進します。この入れ舞は舞楽の「長慶子」にあたるといわれています。「眠り仏之舞」の音楽が繰り返され、舞人達は最初の「行道」と同様に舞台の周りを時計回りに三回周り退場します。舞人と楽人の全員が本堂に引き上げ「蓮華会舞」の全ての演目は終わります。

◆今津のとんど

独特の「とんど」が伝わる今津は、隠岐の島町の南西部にある漁村です。「とんど祭り」は、正月飾りを燃やし無病息災を神聖な火に託すという平安時代からの全国的行事です。

1月15日、海岸に4本の神木（竹）を立てて、それに横木を2本渡したところで正月飾りを積み上げて火をつけます。燃え上がった神木（竹）が海に倒れ込むのを待ちかねた男達が東西2組に分かれ、下帯ひとつで厳寒の海に飛び込み奪い合います。

勇壮さにおいては他に例がなく、神木（竹）の数の多さとともに今津地区の「とんど祭り」の特色となっています。



海岸に立てられた神木



海に倒れる神木



慶事のあった家に運ばれる神木

4-7 隠岐古典相撲

～男のプライド、そして地域の期待を背負って～



大会の様子



行事口上

隠岐では、神社の屋根の葺き替えや町の記念事業、大型公共事業の竣工を記念して、「古典相撲」と呼ばれる夜を徹しての相撲大会が行われます。

古典相撲という呼び方は新しく、元々は神への奉納相撲「宮相撲」として行われていました。いつの時代から隠岐に相撲が伝わったのか分かりませんが、江戸時代には勸進相撲（神社仏閣の修繕や遷宮のためのチャリティー相撲）が行われていたようです。また、奈良時代から伝わる隠岐国分寺の蓮華会舞（れんげまい）の演目である「眠り仏」が相撲を取る舞であることや、鎌倉時代に隠岐に伝わったとされる武良祭風流（むらまつりふりゅ）にも「神相撲」（こずま）「占手」（うらて）といった相撲の儀式があることから、その頃には既に相撲が伝えられていたと考えられます。相撲の起源からするともっと古くから隠岐に相撲が伝わっていたのかもしれませんが。

隠岐の古典相撲の特徴として

1. 神社の遷宮や大型公共事業の完成記念として開催する。
（銚子ダム、隠岐空港、隠岐病院）
2. 夜を徹して行われる。（夕方から始まり、終わるのが次の日の午後）
3. 大きな大会では力士が200人以上参加する。
4. 取り組みは、割り相撲、五人抜きなど数百番行われる。
5. 最高位が大関である。
（元々横綱という地位はなく、隠岐は古い形を残している）
6. 二番勝負で行われる。（一番目の勝者は、二番目に勝ちを譲ります）
7. 役力士（大関、関脇、小結）には、荣誉の品として土俵の柱が与えられる。
8. 土俵は三枚土俵である。
（鏡餅のような形をしていて、高くなっていることから見やすくなっている）



地域毎の土俵入り



力士に降りかかる塩



柱に乗っての凱旋

9. 前日には五穀豊穡を願い土俵祭りが行われる。
10. 力士も塩を撒くが、応援者も大量に力士に塩を浴びせる。
11. 行事の口上が1時間近く行われる。

大会が近づくと、地取りと呼ばれる練習が各地で毎晩行われます。大会当日の朝は、出陣式を行った後神社へ必勝祈願に出かけます。島後の有木地区では、神社で必勝を祈願し力士たちが江戸時代に活躍した力士の墓参りも行います。

古典相撲は夕方から始まり、最初に行事の口上が行われます。大会を行う理由や参加力士の数、神社の遷宮の場合は祀られている神様のことなども説明するので口上だけでも1時間近くもかかります。その後、力士の土俵入りが行われるのですが、力士の数が多いので土俵入りだけでも2時間近くかかってしまいます。こうして、最初の取り組みである「草結び」が行われるのは、大会が始まってから3時間後となるのです。

取り組みの途中では振る舞い酒や「相撲踊り」などが披露され、島一番の娯楽を楽しみます。夜を徹して行われた相撲大会の最後の取り組みである正大関の取り組みが終わると、力士や行司たちが土俵に上がり、直会（なおらい：神様と一緒に神酒や供物をいただくこと）を行います。その後土俵の柱が解かれ役力士に贈られるので、役力士は地域の人たちが担いだ柱に乗って凱旋します。

贈られた柱は力士の家の軒先に掲げられ、家の増築や新築の時に重要な場所の柱の材料として使用されます。

ちなみに、凱旋した後は、地域上げての宴会が夜遅くまで開かれます。

第5章 主なジオサイト

5-1 主なジオサイトマップ

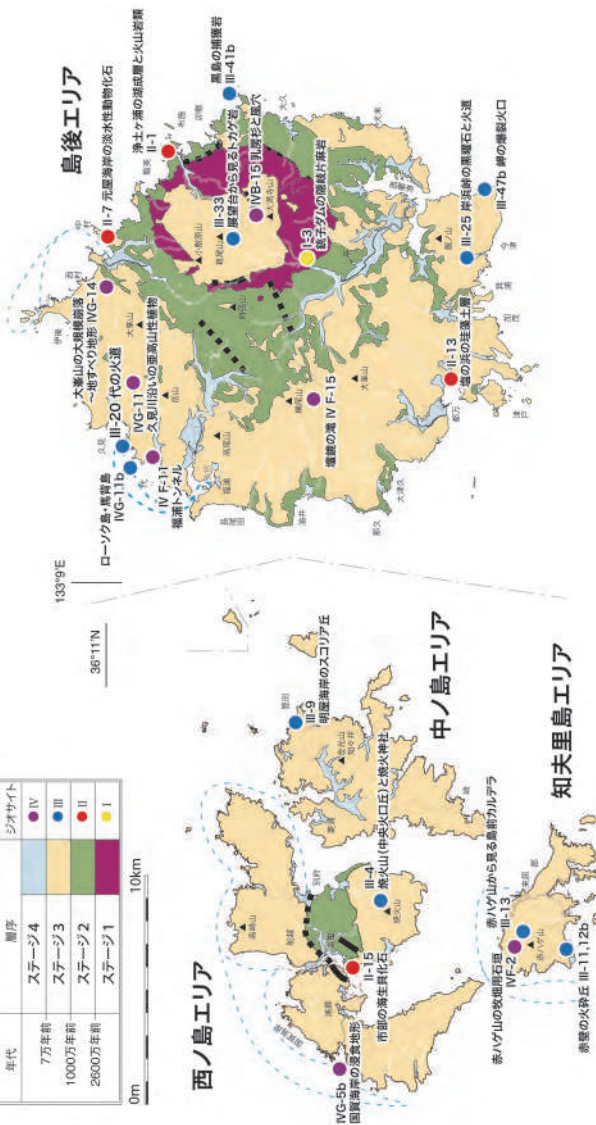
隠岐ジオパークでは、隠岐諸島の成り立ち（大地の成り立ち）を分かりやすく紹介するため、下記の4つのステージに区分しています。

- ①ステージ1：大陸の時代 2600万年～1000万年前
- ②ステージ2：日本海形成の時代 1000～7万年前
- ③ステージ3：火山の島の時代 7万年前～現在
- ④ステージ4：半島から孤島へ 7万年前～現在

主なジオサイト

年代	副序	ステージ	ジオサイト
7万年前	IV	ステージ4	IV
1000万年前	III	ステージ3	III
2600万年前	II	ステージ2	II
	I	ステージ1	I

ここでは、各ステージ毎の主なジオサイトについて紹介します。



5-2 大陸の時代

◆銚子ダムの隠岐片麻岩（Ⅰ-3）：島後エリア



道路に面した崖の岩は、約2.5億年前に地下深く（約15km）で形成された変成岩です。岩肌の縞模様は石英や長石、雲母などの鉱物が平行に配列して形成されたものです。白色の縞は片麻岩の一部が溶けたもので、白黒の平行な縞を突き抜けるようにして流れた縞も見られます。長い年月を経て地下から上昇してきたこの岩石には30億年前のジルコンが含まれていて、大陸の破片であることを示しています。黒い縞の中に見られる小さな赤色半透明の粒はガーネットです。（ガーネット：1月の誕生石）

5-3 日本海形成の時代

◆浄土ヶ浦の湖成層と火山岩類（Ⅱ-1）：島後エリア



浄土ヶ浦では多島海と松が山水画のような美しい景観を形成しており、島後を代表する景勝地として知られています。

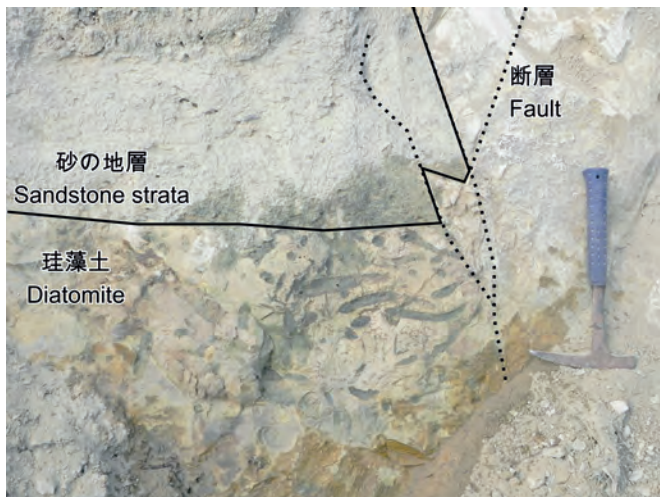
隠岐が1963年（昭和38年）に「大山隠岐国立公園」に編入されたときには、記念切手のデザインにもなりました。浄土ヶ浦の波食棚や海食崖では、約3,000万～2,000万年前の日本海ができる前に大陸縁辺の湖に堆積した湖成層の砂岩の斜交層理や、その時代の活発な火山活動による溶岩および火山角礫岩を観察することができます。

◆元屋海岸の淡水性動物化石（Ⅱ-7）：島後エリア



元屋海岸では、約1,900万～1,700万年前の砂岩の中からコナラなどの温帯環境を示す植物化石やタニシ類などの淡水性貝化石などが見つかっています。これらの化石は、日本海誕生前に隠岐が大陸縁辺における湖や河川の環境であったことを示しています。

◆塩の浜の珪藻土層（Ⅱ-13）：島後エリア



塩の浜は夕陽の美しい海岸ですが、県道を挟んで向かい側の崖には、珪藻の遺骸からなる岩石（珪藻土）が露出しています。ここの珪藻土は約1,500万～1,000万年前のもので、日本海ができた後、急激に深海化した海洋環境を物語っています。

露頭の上部では、珪藻土を不整合で覆う約500万～700万年前の砂岩も見られ、不整合面には、珪藻土に向かって掘りこまれた巣穴の化石も見られません。

◆市部の海生貝化石（Ⅱ-15）：西ノ島エリア



島前西ノ島の市部には、約1,200万年前の浅い海に堆積した砂岩が露出しています。この層からはイタヤガイの仲間を始めとした貝化石が数多く産出され約20種が認められています。この貝化石群には暖流系種が少なく、多くは北西太平洋に分布し、本州西部を南限とする温帯性種です。また、寒流系とされている種や他の地域では見られない固有種も含まれていることから、当時の隠岐周辺は日本海へ入り込む暖流の影響が弱かったと考えられており、同時代の暖流系種を主体とした本州側の貝化石群と大きく異なっています。

5-4 火山の島の時代

◆焼火山（中央火口丘）と焼火神社（Ⅲ-4）：西ノ島エリア



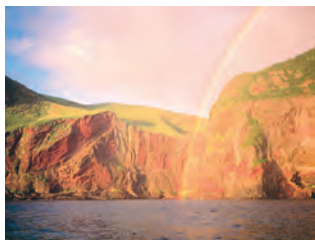
島前地域の中央に位置する焼火山（たくひさん）は、約630万年前から540万年前の間に噴火した島前カルデラの中央火口丘です。この中央火口丘は粗面岩質の溶結～非溶結火砕岩で形成されており、焼火山の大部分を構成する火砕岩は火口の内側に堆積したものと考えられています。焼火山の山頂近くには焼火神社があり、火砕岩の岩体に開いた岩屋に本殿が建立されています。

◆明屋海岸のスコリア丘（Ⅲ-9）：海士エリア



中ノ島の明屋海岸では、約280万年前に噴火した火山の断面を見ることができます。海岸の崖は赤褐色で多孔質の玄武岩質火山礫や火山岩塊、火山弾の集合体となっています。赤褐色は、噴火の際に数百度の高温のまましぶきとなって飛散したマグマに含まれる鉄が酸化したためです。このようにして堆積した噴出物をアグルチネートと呼びます。

◆赤壁の火砕丘（Ⅲ-11, 12b）：知夫エリア



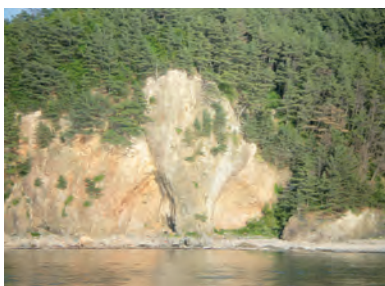
知夫里島の西海岸は高さが10m～200mの崖となっていて、その南部の崖は約1kmにわたって赤・黄・茶色などの鮮やかな色をしています。崖を彩る赤い色は、マグマのしぶきが酸化したものであり、火砕丘の中央には粗面玄武岩～玄武岩質粗面安山岩の岩脈が貫入しています。この岩脈は噴火の際の火道であったと考えられています。

◆赤ハゲ山から見る島前カルデラ（Ⅲ-13）：知夫エリア



島前地域では630万年前頃になると焼火山を火口とした火山が形成され、粗面岩溶岩の噴出によって島前カルデラが形成されました。島前カルデラは一辺約10kmの四角形に近い輪郭をもち、外輪山の最高点とカルデラの最深部の比高は約500mとなっています。540万年前頃になるとカルデラ中央部で中央火砕丘が形成され、この火砕丘が現在の焼火山です。古いカルデラはカルデラ地形を残さないことが多いのですが、島前カルデラは明瞭なカルデラ地形が残った例として日本の地質百選にも選定されています。

◆代の火道（Ⅲ-20）：島後エリア



島後の中央部～東部を除く全域には、約600万年前から530万年前にかけて噴出したアルカリ流紋岩と粗面岩の溶岩と火砕岩が見られます。代港南側の崖に見られる粗面岩の岩脈は、その火山活動における噴火口のひとつです。

この岩脈の向かって左側には流紋岩溶岩、右側には流紋岩質凝灰角礫岩が存在しており、これらを貫く岩脈の両縁には急冷相を確認することができます。この岩脈は粗面岩マグマが通った火道で、火道にマグマを残したまま固結した岩脈です。このような岩脈をフィーダー岩脈と呼びます。

◆岸浜峠の黒曜石と火道（Ⅲ-25）：島後エリア



島後の今津港岸浜峠では、約600万年前から530万年前にアルカリ流紋岩マグマが上昇してきた火道があります。この火道は火砕岩によって埋められていますが、火砕岩中には流紋岩マグマの急冷によって作られた数種類のガラス質岩石が含まれています。

貝殻状の割れ口をしている黒色の石は黒曜石、渦巻き状の割れ目をもったものが真珠岩。暗黒・暗緑・暗紫などの色をして松脂光沢をしたものを松脂岩とよびます。これらは、流紋岩マグマが上昇する過程において、水分の少ないマグマの芯の部分が黒曜石となり、水分の多い外側が松脂岩、さらにその外側は破砕された火砕岩へと変化することを示しています。

◆展望台から見るトカゲ岩（Ⅲ-33）：島後エリア



島後北東部の中谷駐車場から上がった展望所では、まるで長さ30mの巨大トカゲが崖を登っているような風景を見ることができます。この岩はトカゲ岩と呼ばれており、日本の三奇岩の一つとされています。

この岩は、ほぼ垂直で円柱状をした粗面岩岩脈の一部で、垂直方向と水平方向の節理が発達しているため、節理に沿って岩石が崩落した結果、このような奇岩が誕生したと考えられています。また、この岩脈を作っている粗面岩は著しく高い濃度のアルカリ元素を含んでいて、その濃度は日本の火山岩類中最も高いと考えられています。

◆黒島の捕獲岩（Ⅲ-41 b）：島後エリア



島後の東海岸沖に浮かぶ黒島は、約330万年前に噴出した玄武岩で形成されています。柱状節理の発達した玄武岩の中にはオリーブ色のかんらん石からなるかんらん岩、緑黒色の輝石からなる輝岩、あるいははんれい岩などの岩石片が含まれています。

これらは、約30km以深の上部マントルで発生した玄武岩マグマが、上昇してくる途中の岩石を取り込んだもので捕獲岩と呼ばれます。この捕獲岩の研究によって、島後の地下のマントルは大陸的な性格と海洋の性格を持つものと考えられています。また、黒島を形成しているマグマの発生深度は70kmよりも浅く、捕獲岩を含む玄武岩マグマの上昇速度は秒速10m以上と推定されています。

◆岬の爆裂火口（Ⅲ-47 b）：島後エリア



島後の西郷湾入り口西側には、高さ約100～50mの崖が連続しており、その上部は緩やかに傾斜した台地となっています。

この台地は約55万年前に噴出した玄武岩溶岩からなる溶岩台地であり、崖は玄武岩溶岩と火砕岩で形成されています。この崖を海上から見ると、大きなお椀を半分にしたような地形をみることができます。これは噴火口の東側半分が水蒸気爆発によって吹き飛ばされた跡で、火口の大きさは直径約250m、高さ100mです。

5-5 半島から孤島へ

◆国賀海岸の浸食地形（IVG-5b）：西ノ島エリア



摩天崖からの風景



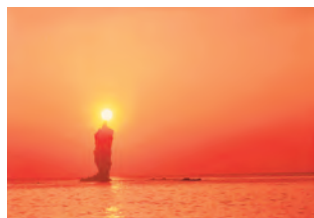
海上からの通天橋



海上からの観音岩

西ノ島西部の国賀海岸では、海岸浸食の様々な地形を見ることができます。陸上からでも、海食崖（摩天崖）、アーチ（通天橋）、離れ岩（天上界）など発達した海岸景観を楽しむことができますが、遊覧船による海上からの景色は違った迫力を体験することができます。

◆ローソク島・馬背島（IVG-11b）：島後エリア



ローソク島



馬背島

島後の観光名所としてローソク島と呼ばれる奇岩があります。海上に浮かんだ巨大なオブジェとその周辺の岩場は海岸浸食で形成されました。岩の上には小さな突起があり、それがまるでローソクの芯のように見えます。遊覧船からですと、夕陽がローソク島に灯る瞬間を撮影することができますが、陸上からの展望台では夕陽と重なる瞬間を見ることができません。

また、ローソク島遊覧では、近くの馬背島や鉄砲の形をした鉄砲岩などの奇岩とともに、海岸の侵食地形と前のページで紹介したフィーダー岩脈なども見ることができます。

◆大峯山の大規模崩落～地すべり地形（IVG-14）：島後エリア



島後北方の大峯山は平坦な山頂をもち、いくつもの馬蹄形をした急な崖に囲まれた特異な姿をしています。この山を構成する約500～470万年前の浅海成～河川成層と470～410万年前の玄武岩溶岩の重なりが、緩い角度で斜面方向に傾斜しているため地すべりが発生しやすくなっています。大峯山北麓の幅約2 kmの馬蹄形の急崖（写真奥）は470万年前以降の古い大規模地すべりの崩落崖の跡で、この時崩落した土砂は海まで達しました。

◆久見川沿いの亜高山性植物（IVG-11）：島後エリア



久見地区の集落に入る手前で、沢沿いに走る町道脇の北斜面では亜高山性の植物、南斜面では南方系の植物を見ることができます。斜面の崖を構成する岩石は赤白の流理構造が美しいアルカリ流紋岩です。隠岐諸島では、亜高山性植物と南方系植物が混在する不思議な光景をいたるところで観察することができますが、この場所では斜面の向き（おそらく日照量）によって棲み分けがされていると考えられます。

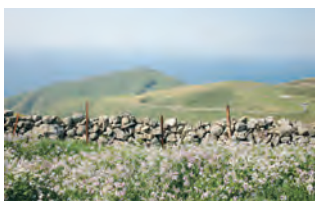
写真に写っているクロベ（黒檜）は亜高山性の植物ですが、この場所は海拔20mほどです。この他にも、オオイワカガミ、ミズナラ、ツシマナナカマド、ミツバイワガサ、ヨコグラ、モミなどもこの場所で見ることができます。

◆乳房杉と風穴（IVB-15）：島後エリア



その形から威厳さえも感じられる乳房杉ですが、その周辺を見渡すとさらに面白いことが分かります。杉の周囲は巨礫が転がった地形であり、そのすき間から風が吹き出す「風穴」となっています。また、温度、湿度の異なる空気がぶつかる場所であるためか湿度が常に高く、周囲には沢沿いや水場周辺を好む植物が多く分布しています。乳房杉の樹齢は八百年と推定されていて、岩倉神社の御神木ともなっています。乳房杉の裏手が、隠岐の最高峰大満寺山（608m）です。

◆赤ハゲ山の牧畑用石垣（IVF-2）：知夫エリア



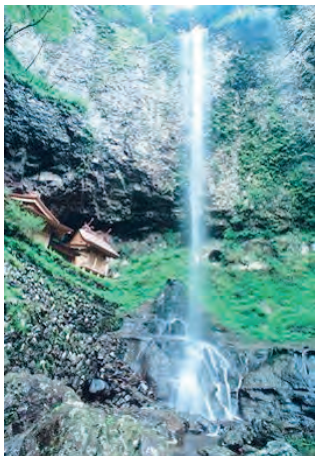
赤ハゲ山展望台に行く途中で見られる石垣は、島前地区において中世から1960年代後半まで行われていた独特の農業形態である牧畑の石垣で、ミョウガキ（西ノ島ではアイガキ）と呼ばれていました。土壌の薄い痩せ地を活用する工夫として、システムのな一次産業が営まれていたことは驚くべきことです。知夫里島では牧畑が大規模に行われており、島をこのような石垣や木柵でいくつかに分けて、ローテーションで作付けを行っていました。

◆福浦トンネル（IVF-11）：島後エリア



明治時代に掘られた二つのトンネルが並んでいます。海側の小さなトンネルは手掘りのトンネルで細（こま）トンネルと呼ばれ、陸側の大きいトンネルは手掘りとダイナマイトを使って掘られました。明り取り用のトンネルも掘られているおり、窓（まど）トンネルと呼ばれています。これらのトンネルは、徒歩→駄馬→自動車へと移り変わった交通手段の変遷を反映したものであり、人の営みと土木技術の推移を関連付けて見ることができることから、2005年に日本土木学会が定める土木遺産に選定されました。

◆壇鏡の滝（IV F-15）：島後エリア

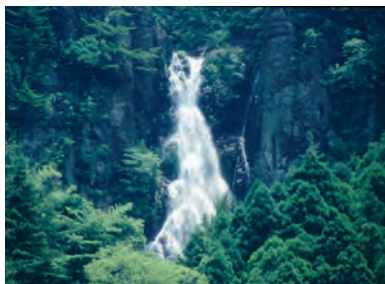


島後の西側には断崖絶壁が多く、そこにはしばしば滝が見られます。これらの断崖や滝は、火山活動によって島が形成された時代の火山岩が浸食、崩壊して形成されたものです。

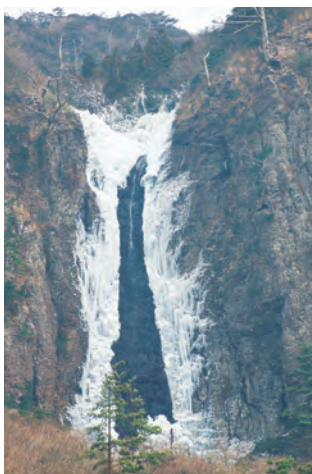
壇鏡の滝もその一つで、ここの水は古くから特別な水として信仰されてきました。滝の水を飲むと勝負事に勝つ「勝ち水」と言われ、今日でも島内で行われる伝統的な牛突きや相撲の試合の前日に関係者が水を汲みに訪れます。また、隠岐に流された小野篁（おののたかむら）が都への帰還を願って打たれた滝としても知られています。



雨の日に見られる三水の滝



深浦の滝



凍結した那智の滝

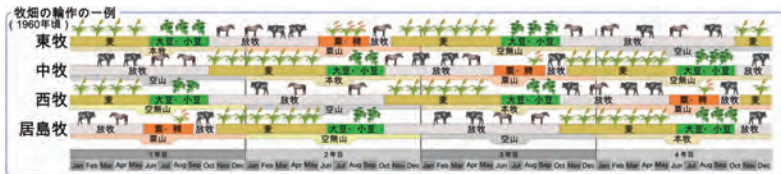
コラム25 伝統的農牧文化

隠岐諸島の本州よりの3島（西ノ島、中ノ島、知夫里島）は島前（どうぜん）と呼ばれ、西ノ島の焼火山（たくひさん）を中心としたカルデラを形成しており、「島前カルデラ」として日本地質百選にも選定されています。

島前地域ではこの特異な地形を利用して、日本海の荒波から守られた穏やかな内海側に港が発達し、漁業の盛んな地域となっています。

漁業に比べ、農業の方は平地が少ないため稲作を行うことが難しく、さらに、火山島であることから表土が薄く痩せた土地であったため、昔の人々は「牧畑」と呼ばれる四圃式（よんぼしき）農業を始め、山の頂上付近まで畑を耕しました。

牧畑では、区画を「アイガキ」や「ミョウガキ」などと呼ばれる石垣で分け、集落ごとに共同管理して、4年のサイクルで麦や小豆、アワ、ヒエなどを順番に栽培していました。また、休耕地に牛や馬を放牧し、排泄する糞を自然の堆肥とすることで痩せた土地の力を維持していました。このような方法は、日本国内の他の地域では見られず、驚くべきことに遠く離れた中世ヨーロッパで見られた三圃式農業と非常に似ています。現在では、こうした牧畑は行われていませんが、残された石垣や段々畑などが当時の風景を思い起こさせてくれます。



第6章 付 録

6-1 大山隠岐国立公園区域

隠岐諸島は「大山隠岐国立公園」に指定されています。

大山隠岐国立公園は、昭和11年2月1日に「大山国立公園」として指定を受け、昭和38年4月10日に隠岐島、島根半島、三瓶山、蒜山地域を編入し、名称も「大山隠岐国立公園」と変更されました。

大山隠岐国立公園位置図



大山隠岐国立公園の地種区分別面積（単位：ha）

特 別 地 域					普通地域	合 計
特別保護地区	第一種	第二種	第三種	小 計		
2,234	4,780	10,851	12,905	30,770	4,283	35,053
6.4%	13.6%	31.0%	36.8%	87.8%	12.2%	100.0%

海域公園地区	合 計
6地区	57.5ha

6-2 隠岐における国立公園区域

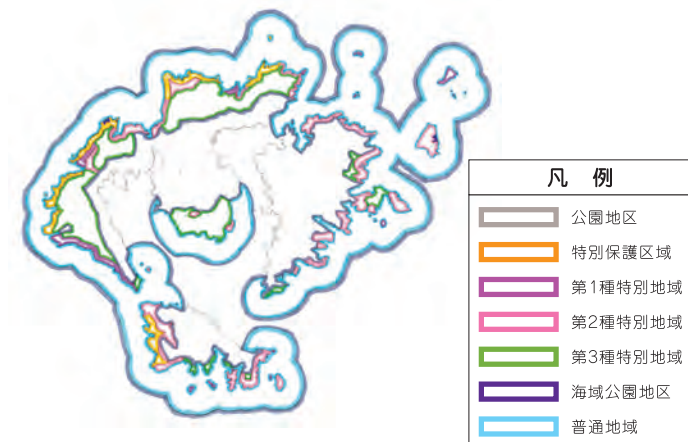
隠岐諸島の地種区分別面積（単位：ha）

特別地域					普通地域	合計
特別保護地区	第一種	第二種	第三種	小計		
553	352	2,161	4,475	7,541	29	7,570
7.3%	4.7%	28.5%	59.1%	99.6%	0.4%	100.0%

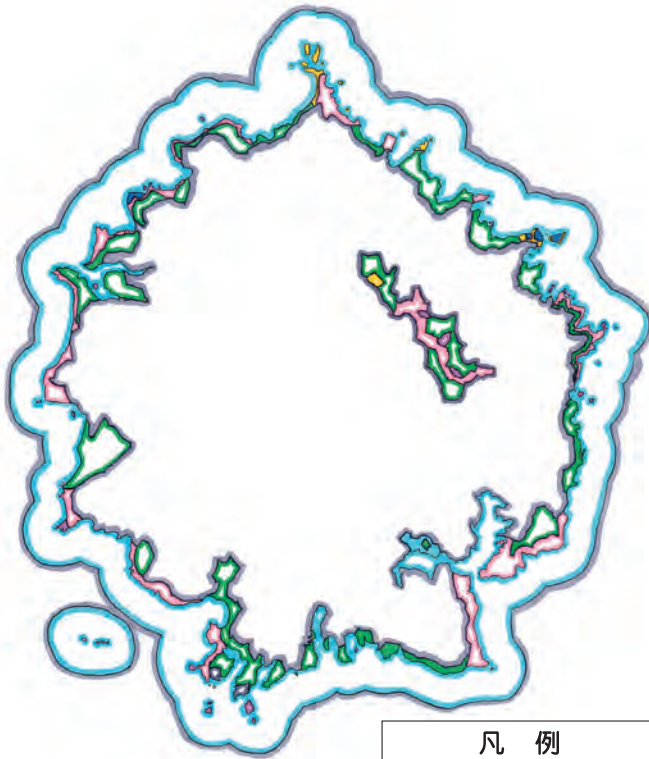
海域公園地区	合計
5地区	50.5ha

隠岐島が大山隠岐国立公園に指定されていることから、一般的に隠岐全域が国立公園区域だと思われませんが、そのほとんどが海岸線沿いに集中しており、概ね海岸線から300mまでの範囲と島前地域では焼火（たくひ）神社を中心とした一部、島後地区では大満寺山を中心とした一帯が公園区域に指定されています。

島前地区の国立公園区域



島後地区の国立公園区域



凡 例

	公園地区
	特別保護区域
	第1種特別地域
	第2種特別地域
	第3種特別地域
	海域公園地区
	普通地域

メモ

※1 国立公園と国定公園

国立公園、国定公園とも自然公園法に基づき、日本を代表する自然の風景地を保護し利用の促進を図る目的で環境大臣が指定する。国立公園は国（環境省）が管理するのに対して、国定公園は管理を都道府県が国（環境省）より委託される。

2012年3月現在、国立公園は全国で30箇所指定されている。

※2 国立公園の地種区分

国立公園内では、開発や過剰な利用から保護することを目的として、三つの地種に分けられている。

・特別地域・海域公園区域・普通地域

※3 特別地域

工作物の新築・改築、樹木の伐採、好物の採取、河川・湖沼の取水・排水、広告の掲示、土地の埋立・開墾、動植物の捕獲・採取、施設の塗装色彩の変更、指定区域内への立入、指定区域内での車の使用などの行為には環境省の許可が必要となる。

また、特別地域は用途に応じて区分されている。

【特別保護地域】特別地域内で、特に重要な地区。特別地域での行為、樹木の損傷・植栽、家畜の放牧、物の集積・貯蔵、たき火などは許可が必要。

【第1種特別地域】特別保護地区に準ずる景観を有し、特別地域の内では風致を維持する必要性が最も高い地域であって、現在の景観を極力保護することが必要な地域。

【第2種特別地域】特に農林漁業活動についてはつとめて調整を図ることが必要な地域。

【第3種特別地域】特に通常の農林漁業活動については原則として風致の維持に影響を及ぼすおそれが少ない地域。

※4 海域公園地区

海中の景観を維持するための地区。工作物の新築・改築、鉱物の採取、広告の掲示動植物の採取、埋立・干拓、海底の形状の変更、物の繁留、排水は許可が必要。

※5 普通地域

特別地域や海域公園地区に指定されていない自然公園の地域。工作物の新築・改築、特別地域の河川・湖沼へ影響を及ぼす事、広告の掲示、水面の埋立・干拓、鉱物の掘削、土地や海底の形状の変更には環境省への届出が必要。

※6 罰則規定

違反行為に対して、自然公園法及び隠岐の島町の条例により罰則が設けられている。

6-3 隠岐ジオパークの指定文化財

◆自然遺産

指定別	区分	分野	名 称	所在地
国	名	景観	隠岐布施海岸	隠岐の島町
国	名・天	地質	隠岐白島海岸	隠岐の島町
国	名・天	地質	隠岐国賀海岸	西ノ島町
国	名・天	地質	隠岐知夫赤壁	知夫村
国	天・名	地質	隠岐海苔田の鼻	隠岐の島町
国	天	鳥類	沖ノ島オオミズナギドリ繁殖地	隠岐の島町
国	天	鳥類	星神島オオミズナギドリ繁殖地	西ノ島町
国	天	海藻	クロキツタ（別府湾）	西ノ島町
国	天	海藻	クロキツタ（菱浦湾）	海士町
国	天	植生	高尾暖地性闊葉樹林	隠岐の島町
国	天	銘木	玉若酢命神社の八百杉	隠岐の島町
県	天・名	地質	鷲ヶ峰およびトカゲ岩	隠岐の島町
県	天	鳥類	大波加島オオミズナギドリ繁殖地	知夫村
県	天	植生	元屋のオキシクナゲ自生地	隠岐の島町
県	天	植生	焼火神社神域植物群	西ノ島町
県	天	銘木	岩倉の乳房杉	隠岐の島町
県	天	銘木	世間桜	隠岐の島町
県	天	銘木	春日神社のクロマツ群	隠岐の島町
県	天	銘木	中村のかぶら杉	隠岐の島町
町	天・名	銘木	大山神社の杉とケヤキ	隠岐の島町
町	天	鳥類	カラスバト繁殖地	西ノ島町
町	天	両生類	オキサシヨウウオ	隠岐の島町
町	天	植生	隠岐産著名植物群落（今津港）	隠岐の島町
町	天	植生	元屋のムクロジ群	隠岐の島町
町	天	植生	油井のスイセンなどの植物群落	隠岐の島町
町	天	植生	那久のアカガシ群落	隠岐の島町
町	天	植生	オオバグミ林	海士町
町	天	銘木	犬来のシイ	隠岐の島町
町	天	銘木	銚子おんぎゃくさんのケヤキ	隠岐の島町
町	天	銘木	物忌神社の大スギ	隠岐の島町

指定別	区分	分野	名 称	所在地
町	天	銘木	大満寺のマドスギ	隠岐の島町
町	天	銘木	伊後神社の大松	隠岐の島町
町	天	銘木	嶽山のイスノキ	隠岐の島町
町	天	銘木	中村海岸のクロマツ群	隠岐の島町
町	天	銘木	山田のツバキ	隠岐の島町
町	天	銘木	イヌマキ（１）	海士町
町	天	銘木	ヤブツバキ	海士町
町	天	銘木	オハツキイチョウ	海士町
町	天	銘木	モチノキ	海士町
町	天	銘木	ハナビワ	海士町
町	天	銘木	イヌマキ（２）	海士町
町	天	銘木	スギ	海士町
町	天	銘木	北分神社の椿・銀杏・杉	海士町
町	天	銘木	タブノキ	西ノ島町
町	天	銘木	ラカンマキ	西ノ島町
町	天	銘木	オオバヤドリギ（１）	西ノ島町
町	天	銘木	オオバヤドリギ（２）	西ノ島町
町	天	銘木	カゴの木	西ノ島町
町	天	銘木	エドヒガン	西ノ島町
村	天	銘木	タブノキ（１）	知夫村
村	天	銘木	タブノキ（２）	知夫村
町	史・天	銘木	唐傘の松	隠岐の島町

文化財の区分について

名：名勝、史：史跡・史蹟、天：天然記念物、建：建造物文化財

考：有形文化財（考古学）、有民：有形民俗文化財、無民：無形民俗文化財

工：有形文化財（工芸品）、書：有形文化財（書籍）、彫：有形文化財（彫刻）

古：有形文化財（古文書）

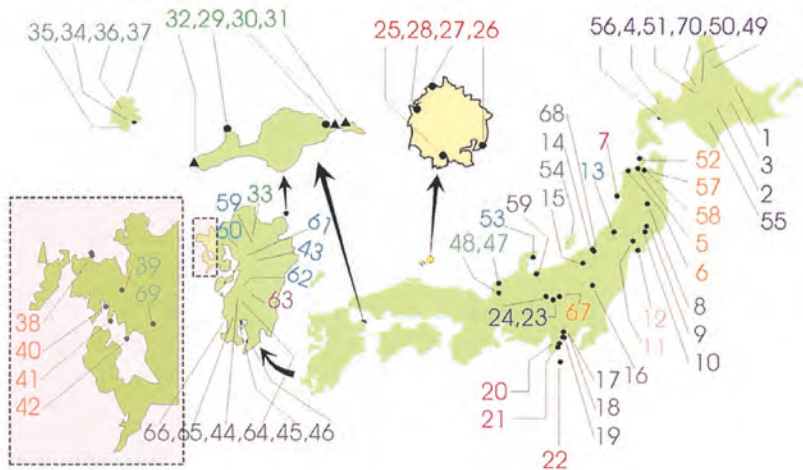
◆文化遺産

指定別	分類	名 称	所在地
国	史	隠岐国分寺境内	隠岐の島町
国	建	玉若酢命神社	隠岐の島町
国	建	水若酢神社本殿	隠岐の島町
国	建	佐々木家住宅	隠岐の島町
国	建	焼火神社本殿・通段・拝殿	西ノ島町
国	考	隠岐国駅鈴 附 光格天皇下賜唐櫃1合	隠岐の島町
国	考	銅印「隠伎倉印」	隠岐の島町
国	無民	隠岐国分寺蓮華会舞	隠岐の島町
国	無民	隠岐の田楽と庭の舞	西ノ島町
国	有民	隠岐島後の生産用具	隠岐の島町
国	有民	トモド	西ノ島町
県	史	平神社古墳	隠岐の島町
県	史	隠岐国分尼寺跡	隠岐の島町
県	史	玉若酢命神社古墳群	隠岐の島町
県	史	大城遺跡	隠岐の島町
県	史	黒木御所	西ノ島町
県	建	旧周吉外三郡役所庁舎	隠岐の島町
県	古	紙本墨書笠置家文書	西ノ島町
県	工	鉄腹巻 兜、頬当、筒袖当、箆手、膝鎧付	隠岐の島町
県	工	太刀銘来国光	海士町
県	工	銅鐘	西ノ島町
県	考	銅剣	海士町
県	書	紙本墨書高田明神百首和歌	隠岐の島町
県	彫	木造聖観音菩薩立像	海士町
県	彫	木造地藏菩薩立像	知夫村
県	無民	島後原田神楽	隠岐の島町
県	無民	島後久見神楽	隠岐の島町
県	無民	玉若酢命神社御霊会風流	隠岐の島町
県	無民	隠岐武良祭風流	隠岐の島町
県	無民	水若酢神社祭礼風流	隠岐の島町
県	無民	壇鏡神社八朔祭の牛突き習俗	隠岐の島町
県	無民	隠岐島前神楽	海士町
県	無民	隠岐島前神楽	西ノ島町
県	有民	旧佐々木家住宅生活用具	隠岐の島町
県	有民	隠岐島後の衣食住および生産用具	隠岐の島町

指定別	分類	名 称	所在地
県	有民	都万目の民家	隠岐の島町
県	有民	原田神楽の面	隠岐の島町
町	史	宮尾遺跡	隠岐の島町
町	史	湊遺跡	隠岐の島町
町	史	甲ノ原2号墳	隠岐の島町
町	史	東古墳	海士町
町	史	来居一号横穴	西ノ島町
町	史	寺ノ峰経塚	西ノ島町
町	史	焼火神社社務所・石垣	西ノ島町
町	建	伊勢命神社	隠岐の島町
町	建	白島神社本殿	隠岐の島町
町	建	高田神社本殿及び拝殿 附 若宮社	隠岐の島町
町	建	宇受賀命神社本殿	海士町
町	建	隠岐神社社殿	海士町
町	建	村上助九郎邸	海士町
町	建	由良比女神社本殿	西ノ島町
町	建	美田八幡宮本殿	西ノ島町
町	建	焼火神社社務所	西ノ島町
村	建	天佐志比古命神社芝居小屋	知夫村
町	古	佐々木家庄屋文書	隠岐の島町
町	古	紙本墨書 金光寺縁起書	海士町
町	古	紙本墨書 笠置家文書	西ノ島町
町	古	紙本墨書 焼火神社縁起書	西ノ島町
町	古	紙本墨書 沙門良源勸進貼	西ノ島町
町	工	台子皆具一式	海士町
町	工	隠岐神社蔵太刀	海士町
町	考	美田出土石器	西ノ島町
町	書	大般若経	海士町
町	書	大般若経	海士町
町	書	源福寺隠岐院額	海士町
町	書	大般若波羅蜜多経	西ノ島町
村	書	大般若波羅蜜多経	知夫村
町	彫	木造隨身半跏像	隠岐の島町
町	彫	狛犬（内藤伸 作）	海士町
町	彫	教海寺流仏	海士町
町	彫	木造矜羯羅童子像	海士町

指定別	分類	名 称	所在地
町	彫	木造如来形坐像	海 士 町
町	彫	木造大日如来坐像	海 士 町
町	彫	木造愛染明王仏龕	西ノ島町
町	彫	木造地藏菩薩立像	西ノ島町
町	彫	木造薬師如来立像	西ノ島町
町	彫	木造大黒天立像	西ノ島町
町	彫	銅造如来形坐像	西ノ島町
町	彫	銅造菩薩型坐像	西ノ島町
町	彫	十一面観音菩薩懸仏	西ノ島町
町	彫	十一面観音菩薩	西ノ島町
町	彫	如来形懸仏	西ノ島町
町	無民	西村神楽	隠岐の島町
町	無民	代神楽	隠岐の島町
町	無民	御碕神社祭礼宇屋だんじり舞風流	隠岐の島町
町	無民	山田客祭風流	隠岐の島町
町	無民	長尾田百手祭風流	隠岐の島町
町	無民	御碕神社の森	隠岐の島町
町	無民	東郷の大モミ	隠岐の島町
町	無民	いぐり凧揚げ風習	隠岐の島町
町	無民	旧西郷町の牛突き風習	隠岐の島町
町	無民	旧周吉郡東郷神楽	隠岐の島町
町	無民	花生神社祭礼風流	隠岐の島町
町	無民	光山寺跡	隠岐の島町
町	無民	旧五箇村の牛突き習俗	隠岐の島町
町	無民	御客神社祭礼風習	隠岐の島町
町	無民	承久楽	海 士 町
町	無民	恵比須祭の風流（だんじり）	海 士 町
町	無民	宇受賀命神社のあご石神事	海 士 町
町	無民	刀匠「沖光」二代目	西ノ島町
村	無民	皆一踊り	知 夫 村
村	無民	蘇民将来符	知 夫 村
村	有民	いもぐら（1）	知 夫 村
村	有民	赤はげ山の名垣	知 夫 村
村	有民	いもぐら（2）	知 夫 村

6-4 日本における黒曜石の産出地



都道府県名	位置番号および産地名
北海道	1：白滝・幌加沢 2：十勝三股 3：置戸 4：赤井川 49：名寄 50：近文台 51：滝川 55：美蔓 56：豊泉 70：秩父別
青森県	5：出来島 6：深浦 52：折腰内 57：戸門 58：鶴ヶ坂
秋田県	7：男鹿
岩手県	8：雫石 9：折居 10：花泉
宮城県	11：湯倉 12：塩釜
山形県	13：月山
新潟県	14：板山 15：大白川 54：佐渡 68：上石川
栃木県	16：高原山
東京都	22：神津島
群馬県	67：大窪沢
神奈川県	17：箱根・笛塚 18：箱根・畑宿 19：鍛冶屋
静岡県	20：上多賀 21：柏峠西
富山県	59：魚津
石川県	53：比那
福井県	47：安島 48：三里山
長野県	23：霧ヶ峰・男女倉・和田峠 24：麦草峠・双子池
島根県・隠岐	25：加茂 26：津井 27：久見 28：福浦
大分県・姫島	29：観音崎 30：両瀬 31：稻積 32：オイ崎
大分県	33：塚瀬

熊本県	43：冠ヶ岳 59：小国 60：南関 61：轟 62：白浜
宮崎県	63：桑ノ木津留
鹿児島県	44：出水（日東） 45：滝ヶ水 46：長谷 64：五女木 65：上牛鼻 66：平木
佐賀県	39：腰岳 69：稚葉川
長崎県・壱岐	34：久喜ノ辻 35：君ヶ浦 36：角川 37：貝畑
長崎県	38：松浦 40：淀姫 41：中町・古里 42：大崎

藁科哲男氏の石器原材の産地分析のデータ参照（京都大学原子炉実験所）



隠岐島の黒曜石も代表的なもののひとつである。各産地の黒曜石は、含まれる元素の量が微妙に異なっていることから、その元素の構成を蛍光X線などの方法で調べることによって、どここの黒曜石かがつきとめられる。

旧石器・縄文時代の狩人たちは、この優れた石のとりこになり、時に百キロ以上もの距離を越え、あるいは海を渡るなどいくつかの困難を乗り越えても、この石を手に入れようとした。

静岡県沼津市土手上遺跡の25,000年～30,000年前の地層から発見された黒曜石は、相模湾沖に浮かぶ神津島の黒曜石であることが蛍光X線分析から突き止められている。

当時は氷河期であり今より海面はだいぶ低かったらしいが、それでも島と本土とは陸続きにはならない。旧石器人が泳いで黒曜石をとってきたとは考えられないから、この黒曜石の存在は、間接的に舟の存在を暗示しているといえる。

3万年前に舟があり、旧石器人が危険を承知で、海原を航海し黒曜石をとってきたとすると、それは驚異的な事実といえる。まさに黒曜石は石器人にとっての「いのち」とでもいうべき存在だったのではないだろうか。

はるか南太平洋に浮かぶ島、イースター島にもたくさんの黒曜石が産出する。世界遺産ともなったあの不可思議な石の偶像＝モアイ像がある島である。ここでは黒曜石は奇妙な用方をされていた。モアイ像の瞳として埋め込まれていたのである。「黒い瞳」を持つ神秘的な偶像は、いったい人々に何を語りかけたのだろう。

—堤隆氏の文章より—

6-5 縄文海進と隠岐

今から約1万年前の縄文時代には温暖化により、縄文海進と呼ばれる海面が現在より約10m上昇する現象が起きました。

この縄文海進と隠岐の遺跡との関係では非常に興味深い発見があります。現在の海面を10m上昇させて隠岐の地図に重ね合わせると、縄文時代に海岸線であった場所に古墳や神社が配置されているのです。このことから、古代人は海岸線沿いを生活の場所としていたことが想像できますし、高い航海術をもった海洋民族だったのではないかと考えられます。

島前地区の縄文海進



第7章 おわりに

7-1 あとがき

隠岐ジオパークのガイドブックはいかがでしたでしょうか？

このガイドブックは、これまで作成しました『OKI まるごとミュージアム』および『OKI まるごとミュージアム（改訂版）』をもとに、隠岐ジオパークのガイドブックとして新たに作成しました。

この本を読んでいただくことによって、一人でも多くの方に『隠岐ジオパークの魅力』を伝えることができれば幸いに思います。

今後、更にデータを追加しながらより詳しいガイドブックを作成したいと考えていますので、皆様からのご意見をお待ちしています。

最後になりましたが、このガイドブックの作成にあたりましては、「隠岐自然倶楽部」「島後とぎの会」「隠岐野鳥倶楽部」「隠岐クロキツタ保全倶楽部」「隠岐ジオパーク戦略会議」「隠岐ジオパークガイド倶楽部」の皆様へ原稿の執筆や写真等の提供をしていただきました。紙面をお借りして、厚くお礼申し上げます。

7-2 協力していただいたみなさん

■隠岐自然倶楽部：会長 深谷 治

〒685-0014 島根県隠岐郡海士町大字海士5328-6

島前：深谷 治 Tel&Fax 08514-2-1313

E-mail : sizenmura@navy.plala.or.jp

島後：八幡浩二 Tel&Fax 08512-5-2513

E-mail : koji@sx.miracle.ne.jp

■島後とぎの会：会長 齊藤 一志

〒685-0015 島根県隠岐郡隠岐の島町港町塩口84 松浜旅館内

Tel 08512-2-0163 Fax 08512-2-4332

■隠岐野鳥倶楽部：会長 田中 功元

■隠岐クロキツタ保全倶楽部：会長 幸塚 久典

■隠岐ジオパーク戦略会議：会長 八幡 浩二

〒685-0013 島根県隠岐郡隠岐の島町中町目貫の四

Tel&Fax 08512-3-1005

E-mail:geopark-sk@mirror.ocn.ne.jp

■隠岐ジオパークガイド倶楽部：会長 八幡 浩二

隠岐ジオパーク戦略会議内

7-3 参考文献

このガイドブックを作成するにあたり、以下の資料を参考にさせていただきました。

- ◆エコツーリズム推進マニュアル：エコツーリズム推進会議 環境省監修 2004
- ◆東アジアの自然公園・保護区域における観光事業ガイドライン：IUCN 2001
- ◆鷲ヶ峰自然観察モデルコースガイドブック：島根県環境生活部景観自然課 2005
- ◆沖縄県エコツーリズムガイドライン2004：沖縄県 2004
- ◆改訂しまねレッドデータブック ㈱報光社：島根県環境生活部景観自然課 2004
- ◆クラゲガイドブックTBSブリタニカ：並河 洋 2000
- ◆海洋咬刺傷マニュアル～海の生き物と楽しく過ごすために～
ピークビジョン：小浜正博 1995
- ◆日本の海水魚 山と溪谷社：岡村 収・尼岡邦夫編、監修 1997
- ◆沖縄有毒害生物大辞典 新星図書出版：白井祥平 1982
- ◆OKIまるごとミュージアム 松陽印刷：風待ち海道倶楽部 2005
- ◆OKIまるごとミュージアム（改訂版） 松陽印刷：風待ち海道倶楽部 2007
- ◆隠岐の自然を守るための参考書：島根県環境生活部景観自然課 2006
- ◆大満寺自然観察モデルコースガイドブック：島根県環境生活部景観自然課
- ◆野外における危険な生物：島根県環境生活部景観自然課
- ◆隠岐の地質概論：大久保雅弘 1984
- ◆青潮文化～日本海をめぐる新文化論～ 古今書院：市川建夫他 1997
- ◆隠岐ジオパーク 日本ジオパークネットワーク加盟申請書（JGN提出版）
隠岐ジオパーク推進協議会 2009
- ◆隠岐ジオパーク 世界ジオパークネットワーク加盟申請書（GGN提出版）
隠岐ジオパーク推進協議会 2011
- ◆ジオパーク～地質遺産の活用・オンサイトツーリズムによる地域づくり～
オーム社：平野 勇 2008
- ◆洞爺湖有珠山ジオパークガイドブック：北海道新聞社 2011

隠岐ジオパークガイドブック

平成24（2012）年3月発行

編 集 隠岐ジオパーク推進協議会

発 行 隠岐ジオパーク推進協議会
島根県隠岐郡隠岐の島町港町塩口24
TEL 08512-2-9636

印 刷 有限会社 松陽印刷所
島根県松江市学園南2丁目3番11号

※隠岐ジオパークガイドブックは、島根県の地域プロジェクト推進費の助成を受けて作成されています。